

福岡県八女市

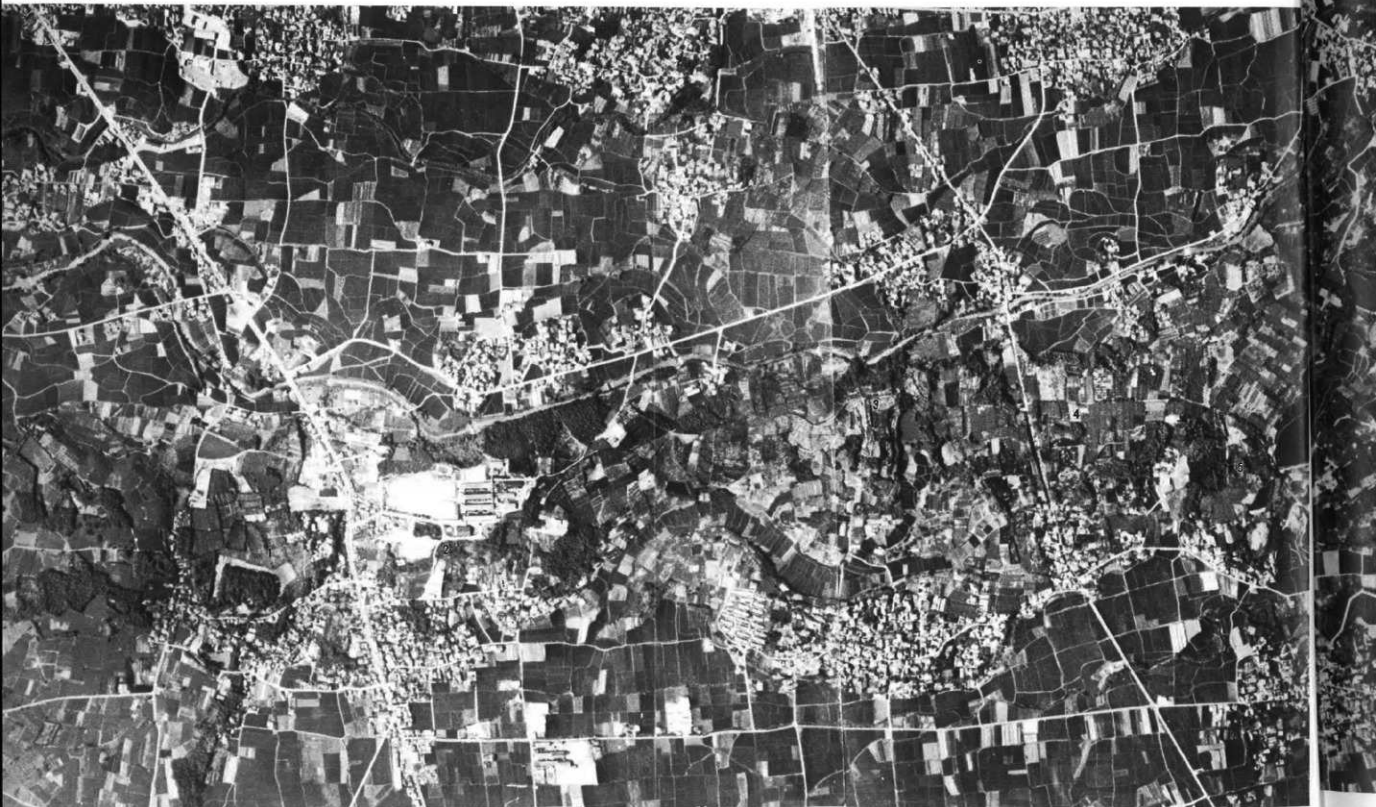
立山山窯跡群

—八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集篇—

牛焼谷古墳群・乗場古墳

1 9 7 2

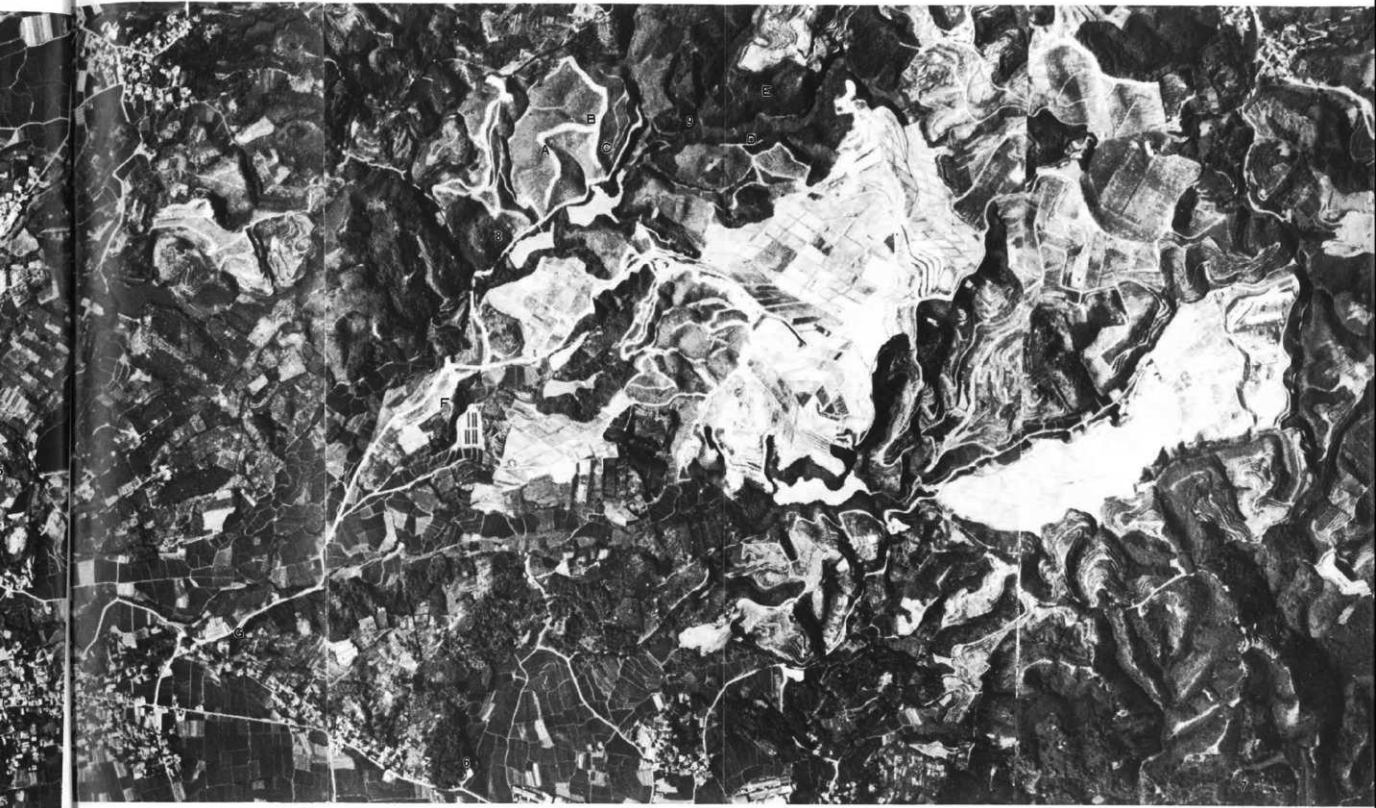
八女市教育委員会



八女古墳群と八女古窯跡群航空写真

- | | | |
|---------|-----------|---------|
| 1 岩戸山古墳 | 2 乗場古墳 | 3 菅原塚古墳 |
| 4 鶴見山古墳 | 5 釘崎第2号古墳 | 6 丸山古墳 |
| 7 童舅山古墳 | 8 牛焼谷古墳群 | 9 塚ノ谷古墳 |

- | | | |
|------------|------------|------------|
| A 塚ノ谷第1号窯跡 | B 塚ノ谷第2号窯跡 | C 塚ノ谷第4号窯跡 |
| D 管ノ谷第1号窯跡 | E 管ノ谷第2号窯跡 | F 中尾谷窯跡群 |
| G 立山山原跡群 | | |



序

八女市では、農業構造改善事業に関連し、これまで4ヶ年連続して、窯跡群の発掘調査をすすめてきました。

即ち管ノ谷・中尾谷・塚ノ谷・立山山のそれであります。

これらの調査にあたりましては、国県当局の補助を得て、九州大学文学部考古学研究室、別府大学文学部考古学研究室、及び地元の改良区組合、土地所有者等の、ご指導、ご好意を得て実施しましたが、予期以上の成果をおさめることが出来ました。

特に別府大学の小田先生には、九州大学在任当時より一貫してこの調査を指導され、貴重な資料を得ることが出来ました。衷心より感謝申し上げるところであります。

今回をもちまして、計画分の窯跡調査を終了することになりました。

これら一連の調査活動とその記録が、多くの関係者に、何等かの形で寄与することが出来ますならば甚だ幸いに存じます。

なお本書の発刊にあたり、直接その衝にあたられました、小田先生はじめ、関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

昭和47年3月30日

八女市教育委員会

松 延 一 男

本文目次

第1章 調査の経過	1
I 管ノ谷第2号窯跡の調査	(小田富士雄) … 3
II 立山山窯跡群の調査	(小田富士雄) … 3
III 牛焼谷古墳群の調査	(真野和夫) … 4
IV 乗場古墳の実測調査	(小田富士雄) … 5
第2章 管ノ谷第2号窯跡の調査	(真野和夫) … 6
I 窯跡の立地	6
II 窯跡の調査	6
第3章 立山山窯跡群の調査	13
I 窯跡群の立地	(真野和夫) …13
II 第1号窯跡	(真野和夫) …15
III 第2号窯跡	(小田富士雄) …24
第4章 牛焼谷古墳群の調査	29
I 古墳群の立地	(小田富士雄) …29
II 第1号古墳	(渡部明夫) …29
III 第2号古墳	(井上和夫) …36
IV 第3号古墳	(小田富士雄) (真野和夫) …40
V 第4号古墳	(渡部明夫) …46
VI 第5号古墳	(黒野 肇) …48
VII 小 結	(小田富士雄) …50

第5章 乗場古墳の調査.....	(小田富士雄) (真野和夫)	...52
第6章 八女古墳群発見の須恵器集成・続.....	(真野和夫)	...65
第7章 八女古窯跡群の調査・総括.....		68
I 八女古窯跡群の構造と編年.....	(小田富士雄)	...68
II 筑後における須恵器の編年—窯跡と古墳—.....	(真野和夫)	...70
III 埴輪生産の諸問題.....	(小田富士雄) (真野和夫)	...75
IV 筑紫国造の支配と須恵器生産.....	(小田富士雄)	...83
編 集 後 記.....		87

図 版 目 次

巻首図版	八女古墳群と八女古窯跡群航空写真
図版第一	管ノ谷第2号窯跡(一) 窯跡遠望
図版第二	管ノ谷第2号窯跡(二) 窯跡全景
図版第三	管ノ谷第2号窯跡(三) (上) 窯内燃焼部より煙出しを望む (下) 燃焼部における須恵器出土状態
図版第四	立山山窯跡群遠景
図版第五	立山山第1号窯跡(一) 全 景
図版第六	立山山第1号窯跡(二) 第一次床と第二次床
図版第七	立山山第1号窯跡(三) 前庭部遺物の出土状態および第二次床左壁に並べられた埴輪円筒
図版第八	立山山第1号窯跡(四) 遺物の出土状態
図版第九	立山山第1号窯跡(五) 遺物の出土状態
図版第一〇	立山山第1号窯跡(六) 遺 物
図版第一一	立山山第1号窯跡(七) 遺 物
図版第一二	立山山第1号窯跡(八) 遺 物
図版第一三	立山山第1号窯跡(九) 遺 物
図版第一四	立山山第2号窯跡(一) 全 景
図版第一五	立山山第2号窯跡(二) 遺物出土状態
図版第一六	立山山第2号窯跡(三) 遺 物
図版第一七	立山山第2号窯跡(四) 遺 物
図版第一八	牛焼谷古墳群の立地
図版第一九	牛焼谷第1号古墳(一) 石室の全景
図版第二〇	牛焼谷第1号古墳(二) 石室の構造
図版第二一	牛焼谷第1号古墳(三) 石室の構造
図版第二二	牛焼谷第1号古墳(四) 遺物出土状態
図版第二三	牛焼谷第2号古墳(一) 石室全景
図版第二四	牛焼谷第2号古墳(二) 石室の構造
図版第二五	牛焼谷第2号古墳(三) 石室の構造
図版第二六	牛焼谷第2号古墳(四) 遺物出土状態

図版第二七	牛焼谷第3号古墳(一)	石室全景
図版第二八	牛焼谷第3号古墳(二)	石室の構造
図版第二九	牛焼谷第3号古墳(三)	石室の構造
図版第三〇	牛焼谷第3号古墳(四)	遺物出土状況
図版第三一	牛焼谷第4号古墳	
図版第三二	牛焼谷第5号古墳(一)	石室全景
図版第三三	牛焼谷第5号古墳(二)	石室の構造
図版第三四	乗場古墳(一)	石室全景
図版第三五	乗場古墳(二)	石室の構造
図版第三六	乗場古墳(三)	石室の構造
図版第三七	乗場古墳(四)	石室の構造
図版第三八	乗場古墳(五)	石室の構造
図版第三九	乗場古墳(六)	石室の構造

挿 図 目 次

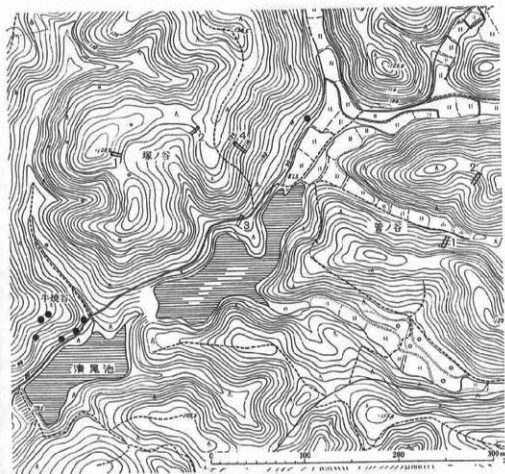
第 1 図	塚ノ谷、管ノ谷地形図……………	1
第 2 図	立山山第 1 号窯跡発掘作業風景（小田富士雄撮影）……………	3
第 3 図	管ノ谷第 2 号窯跡地形実測図（小田・真野和夫・米田鉄也・井上和夫 ・天本洋一・倉原謙治実測、真野製図）……………	7
第 4 図	管ノ谷第 2 号窯跡実測図 （小田・真野・米田・井上・天本・倉原実測、真野製図）……………	8
第 5 図	管ノ谷第 2 号窯跡出土須恵器実測図（真野測図）……………	10
第 6 図	管ノ谷第 2 号窯跡出土須恵器拓影（真野作成）……………	11
第 7 図	立山山窯跡群地形図……………	13
第 8 図	立山山窯跡群地形実測図（橘昌信・二宮忠司・横山邦経実測、真野製図）…	14
第 9 図	立山山第 1 号窯跡実測図（真野・青崎和憲実測、真野製図）……………	16
第 10 図	第 1 号窯跡第二次床左壁に並べられた埴輪円筒（真野測図）……………	17
第 11 図	立山山第 1 号窯跡前庭部埴輪出土状態（小田撮影）……………	18
第 12 図	立山山第 1 号窯跡遺物出土状態実測図（真野・青崎実測、真野製図）…	18~19
第 13 図	立山山第 1 号窯跡出土人物埴輪および竈実測図（真野測図）……………	19
第 14 図	立山山第 1 号窯跡出土形象埴輪実測図（真野測図）……………	20
第 15 図	立山山第 1 号窯跡出土埴輪実測図・拓影（真野測図）……………	21
第 16 図	立山山第 1 号窯跡出土円筒埴輪実測図（真野測図）……………	22
第 17 図	立山山第 1 号窯跡出土円筒埴輪実測図（真野測図）……………	23
第 18 図	立山山第 2 号窯跡実測図（真野・青崎実測、小田製図）……………	25
第 19 図	立山山第 2 号窯跡出土円筒埴輪実測図 （小田・黒野肇・渡部明夫実測、小田製図）……………	26
第 20 図	立山山第 2 号窯跡出土土師器実測図（小田測図）……………	27
第 21 図	牛焼谷古墳群地形実測図（小田・真野・青崎・天本・米田・倉原・ 井上和実測、小田製図）……………	30
第 22 図	牛焼谷第 1 号古墳横断トレンチ実測図（藤口健二・渡部実測、渡部製図）…	31
第 23 図	牛焼谷第 1 号古墳石室実測図（渡部・倉原実測、渡部製図）……………	32
第 24 図	牛焼谷第 1 号古墳出土遺物実測図（渡部測図）……………	34
第 25 図	牛焼谷第 1 号古墳墳丘内出土須恵器（真野測図）……………	35
第 26 図	牛焼谷第 2 号古墳石室実測図（井上・山野洋一・黒野実測、井上製図）…	37

第 27 図	牛焼谷第 2 号古墳出土遺物実測図（井上測図）	38
第 28 図	牛焼谷第 3 号古墳石室実測図（渡部・井上実測、弓場紀知製図）	41
第 29 図	牛焼谷第 3 号古墳出土環（小田撮影・測図）	43
第 30 図	牛焼谷第 3 号古墳封土出土土器実測図（真野測図）	44
第 31 図	牛焼谷第 3 号古墳封土出土土器実測図（真野測図）	46
第 32 図	牛焼谷第 4 号古墳石室実測図（渡部・井上実測、渡部製図）	47
第 33 図	牛焼谷第 5 号古墳石室実測図（黒野・山野実測、黒野製図）	49
第 34 図	牛焼谷第 5 号古墳渡道閉塞状態実測図（黒野・山野実測、黒野製図）	49
第 35 図	牛焼谷第 5 号古墳出土遺物実測図（黒野測図）	50
第 36 図	乗場古墳外形実測図（波多野皖三・福岡教育大学生実測、小田製図）	53
第 37 図	乗場古墳石室実測図Ⅰ（小田・黒野・武末純一・渡部実測、弓場製図）	54~55
第 38 図	乗場古墳石室実測図Ⅱ（小田・武末・弓場実測、弓場製図）	55
第 39 図	乗場古墳出土遺物実測図（小田実測、真野製図）	59
第 40 図	乗場古墳出土円筒埴輪実測図（渡部実測、小田製図）	60
第 41 図	乗場古墳出土遺物Ⅰ（小田撮影）	61
第 42 図	乗場古墳出土遺物Ⅱ（小田撮影）	62
第 43 図	八女古墳群発見の土器実測図 （小田・黒野・武末・渡部・井上実測、真野製図）	66
第 44 図	八女古墳群出土形象埴輪Ⅰ（小田撮影）	79
第 45 図	八女古墳群出土形象埴輪Ⅱ（小田撮影）	80
第 46 図	岩戸山古墳航空写真（石人石馬研究会提供）	85

別添付図 八女古窯跡群須恵器編年図（増補）（真野作成）

第1章 調査の経過

八女市忠見区を中心にする八女古窯跡群の調査は、昭和43年度の塚ノ谷窯跡群の発掘にはじまり、44年度には中尾谷窯跡群、45年度には管ノ谷第1号窯跡と塚ノ谷古墳の発掘をすすめてきており、各年度調査の報告書をその都度刊行してきた。もともと県営パイロット事業に端を発した開発工事にともなってはじめられた緊急調査であったが、昭和46年度は継続四年目にあたり、最終年度となった。今回は管ノ谷第2号窯跡と牛焼谷古墳群、さらにこの間に発見された埴輪を生産した立山山窯跡群の発掘調査を行なうこととなった。したがって予算、日程、調査員の都合などの制約をうけて一回で調査を完了することができず、計二回の発掘調査を行なった。



第1図 塚ノ谷・管ノ谷地形図(□ 窯跡、● 古墳)

〔第一回調査〕

調査日程	昭和46年7月21～28日	
調査員	別府大学文学部助教授	小田 富士雄
	九州大学文学部大学院学生	真野 和夫
	〃 学生	井上 和夫
	〃 聴講生	米田 鉄也
	別府大学文学部学生	天本 洋一
	〃 〃	倉原 謙治

〔第二回調査〕

調査日程	昭和46年10月12～21日	
調査員	別府大学文学部助教授	小田 富士雄
	九州大学文学部大学院学生	真野 和夫
	沖ノ島遺跡調査会研究員	黒野 肇
	九州大学文学部学生	井上 和夫
	〃 聴講生	米田 鉄也
	〃 〃	渡部 明夫
	別府大学文学部学生	青崎 和憲
	〃 〃	山野 洋一
	〃 〃	倉原 謙治
八女市教育委員会	社会教育課長	平島 忠太郎
	社会教育主事	江下 淳
	〃	松延 繁太
	中央公民館主事	渡辺 勲

第二回調査にあたっては、はじめ九州大学側から予定されていた調査員を折から重複した日程で計画された同大学の長崎県原山遺跡調査に急に連絡もなくひきぬいてゆく不祥事に遭い、その不当を抗議したのであったが受け入れられず、別府大学賀川光夫教授の配慮によって同大学側から調査員を補充した。また調査中に別府大学文学部の橋昌信講師、同学生中村幸史郎、同卒業生二宮忠司、横山邦雄両君（現在福岡市教育委員会勤務）らの応援によって地形測量を実施することができた。しかしながら牛焼谷古墳群の実測調査は一部をのこすこととなったので、さらに翌47年5月12～14日に小田・黒野・井上・渡部が補足調査を行なった。つづいて18、19日に井上・渡部が再度現地に出向いて補足調査を完了した。今回の調査も地元忠見地区の方々に連日人夫として労働力を提供いただき、四ヵ年にわたる思い出多い継続調査を終了することとなった。この継続調査の始終を通じて調査団では研究的にこの調査をすすめるために、市教育委員会に対して種々現況では無理かと思われるような依頼を行ってきたのであったが、よく主旨を御理解いただき変な御協力を惜しまれなかった。調査団が後年にのこるような基礎的な成果をあげた“緑の下の方持ち”はひとえに市教委当局の方々に負っている。衷心より感謝申しあげる。また、調査団の構成から報告書作成についても通じて九州大学・

別府大学の考古学研究室をはじめ奈良国立文化財研究所の平城宮跡発掘調査部、福岡県教育委員会文化課から御支援いただいた。調査の終了にあたってこれら各機関の方々にも改めて御礼申しあげる次第である。

I 管ノ谷第2号窯跡の調査

前回調査した管ノ谷第1号窯跡と谷をはさんで北側に対して位置してる窯跡である。梅雨明けを期して7月下旬を調査期間にあてたのであったが、梅雨明けがおくれたために調査中ほとんど雨模様の天候がつづき、調査は難行した。以前から窯体の中途が陥没していて、内部がのぞかれる状態であったから発掘の見当もつけやすく、無駄なく発掘作業をすすめることができたのは幸いであった。調査は7月21日から28日におよんだ。窯跡前面の灰原が想定される斜面までひろく伐採して発掘を行なってみたが灰原の存在が確認されず、焚口前面ではかなり落差のつく地形状況がみられ、廃窯後に地すべりを生じていることが考えられるにいたった。出土品は少いが、管ノ谷第1号窯跡にやや先行する八世紀代の窯跡であることが確認された。

II 立山山窯跡群の調査

忠見区本から立山丘陵が西に延びた北斜面ぞいに塚ノ谷に向う道路があるが、県営パイロット事業の開始以来、道路の拡幅工事が行なわれて立山丘陵の裾を切断した。すでに一昨年頃からこの切断面



第2図 立山第1号窯跡発掘作業風景

に埴輪円筒片が包含された状態が露出しており、往来のたびに気付いていたが、丘陵上に小古墳でもあって、それに付属する埴輪が落下したのではないかと思ひ、さして気にしなかった。ところが第一回調査の折にうすい炭化層が帯状に露出していることを発見し、にわかに埴輪窯跡として注目されるにいたった。そこで改めて第二回調査を計画し、10月12日から21日まで調査を実施した。この調査には主として真野・青崎両調査員があたり、二基の埴輪窯跡を発掘した。九州地方ではじめての埴輪窯跡の調査として各方面の関心も高く、多くの見学者が来訪した。さらに土地所有者の御好意によって終了後も窯跡を保存していただくことになったのは感謝にたえないところである。かくして六世紀代の埴輪窯跡をはじめて明らかにすることができた意義は大きい。

(小田富士雄)

Ⅲ 牛焼谷古墳群の調査

牛焼谷古墳群は塚ノ谷窯跡群のある塚ノ谷から西南約200mのところにあり、灌漑用池である清尾池の下池に南面する傾斜地に形づくられている。この立地はまさに塚ノ谷第4号窯跡の立地に酷似しており、池と傾斜地との間につけられた農道のり面にはそれらしい須恵器の散布がみられた。したがって、当初はこの地区に窯跡の存在を想定し、伐採を行なって灰原とみられるテラス状を形成した場所にトレンチを設定したのであった。トレンチは斜面等真線にほぼ平行して2本が掘られた。そうしたところ、第1のトレンチではトレンチに直行する形で平積みされた石列が平行してあらわれ、その外側からは掘り下げた地山との境にうすい炭灰層の広がりがあり須恵器の高坏が発見された。これらの結果によって、このテラス状をなす部分が古墳の墳丘であり、天井石を抜き取られ、その上に傾斜地のため封土が流れて現在見る形になったことが判明したのであった。このような目で見ると付近には同様の低い墳丘状をなすものを数ヶ所指摘することができ、この地区が小さい古墳群を形成していることが知られた。そして最初にトレンチを設定して確認した古墳を第1号墳とし、斜面直上に位置するものを第2号墳、東側に第3号・第4号墳までを発見した。これより先、最初にこの地に窯跡があるのではないかと推定の発端となった道路のり面において土器採集を行なった結果、坏・小形高坏・甕などの須恵器のほか赤茶色のきわめてろい土師質土器片が相当量採集された。

これらの土器はすべて砕かれたように細片になっており、須恵器の特徴は塚ノ谷第4号窯跡出土の須恵器とまったくあい似た形態を示ししかもへう記号にも同一のものがあることがわかった。また土器類に混在して馬具の一部とみられる銕着した鉄製品が発見されるにおよんで、この場所が窯跡とはまったく無関係の遺構であることが知られた。結果的にみるとこれらの遺物は第3号古墳の封土内に埋置されたものであった。そして、この須恵器の発見は窯における製品とその供給先の確実な例として、ひいては古墳の被葬者と窯業従事者との関連までに発展してゆく問題を含むものであり、この意味でも本調査の結果が大いに期待された。

第一回調査では古墳の存在を確認するにとどまったが、第二回調査で発掘調査を企画し、立山山窯跡群と平行して行なわれ、さらに新しく第5号・第6号墳の発見があった。この古墳群はパイロット事業によって歴戦する予定であったが幸いにも古墳群より高所で工事をとどめる話がまとまり、調査後も保存することができるようになった。調査は第1号～第5号墳の計5基におよんで第6号墳は当

初から工事予定地をはずれていたので発掘調査からはずすこととなった。調査は10月12日から井上・渡部・山野・倉原・黒野・米田の各調査員があたり10月21日に終了した。(真野和夫)

Ⅳ 乗場古墳の実測調査

八女古窯跡群の調査と関連してすすめている八女古墳群の研究の一環として、まず基礎的な作業は、すでに開口している古墳のうちで重要なものを選んで実測作業を行ない、正確な資料を集積することである。これまでも塚ノ谷古墳、釘崎第3号古墳、童男山古墳などの調査を行ない、報告書を作成してきた。つづいて考えていたのが乗場古墳であった。この古墳は装飾古墳として知られているが、これまでに本格的に石室構造や装飾壁画について実測調査を行なったことはなかった。またこの古墳出土の須恵器は、須恵器編年の第ⅢA期に相当するもので、中尾谷窯跡群と対比することができる。そこで本古墳石室の実測調査を企図した次第である。当初、小田は自費によって行なうことを企画して実施した。

調査日程 昭和47年7月8～11日

調査員 小田富士雄、黒野 肇、武末純一、渡部明夫、弓場紀知

調査期間中は折悪しく西日本を襲った梅雨期の集中豪雨に見舞われたが、調査は順調に行なわれた。この間、隣接する県立福島高校からは電燈配線し送電することに御協力いただき、八女市教委の江下淳主事には諸事御配慮いただいた。また八女市中央公民館の渡辺勲主事には石室の写真撮影をお願いした。かくして経費の大半を八女市教委が分担していただく結果となった。参加を快諾された調査員諸君の犠牲的協力と共に明記して感謝申しあげる次第である。(小田富士雄)

第2章 管ノ谷第2号窯跡の調査

I 窯跡の立地 (図版第一・第1・3図)

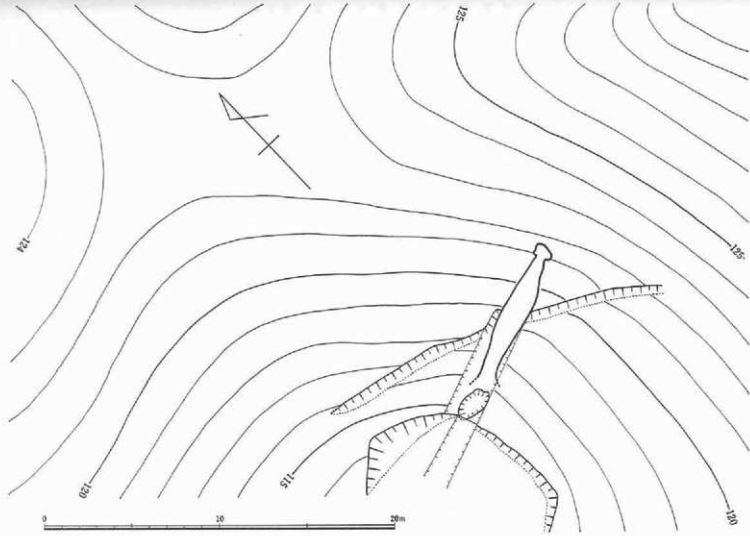
管ノ谷第2号窯跡は八女市志見区大字本字管ノ谷2009番地に所在する。付近には灌漑用池として重要な清尾池へ通じる小谷が丁度掌を広げたように放射状にはしり、この浸蝕からとり残されたように谷と谷の間には低丘陵がのびて非常に出入りの多い地形をなしている。すでに調査された第1号窯⁹⁾と今回の第2号窯も、このような地形の制約を受けて1小谷をへだてて相向い合う状態で構築されている。45年度に調査の行なわれた第1号窯跡は同字姫豊にあって、細長く車にのびた小谷によって先端を分割された低い南側丘陵の北斜面にある。これに対し、第2号窯は北側丘陵の南斜面にあるからまさに相対する格好で同じ谷へと吹き込む風を利用し操業したわけである。どちらも低丘陵の鞍部をなす斜面を利用しており、第2号窯跡の場合標高115~122mの間に築かれていて、第1号窯よりもやや高い。第1号窯跡のある姫豊の丘陵に比べ、管ノ谷の丘陵は傾斜が急で、ために窯跡のある場所も前庭部以下が崖崩れして流されてしまっていた。したがって灰原の調査を行なうことができず遺物採集は不可能であった。この窯跡は天井部が半分くらい遺存しており山へ入る人達から「タヌキ穴」などと呼ばれて早くから知られていた。このあたりも茶畑あるいはミカン園としての造成が行なわれる。

II 窯跡の調査

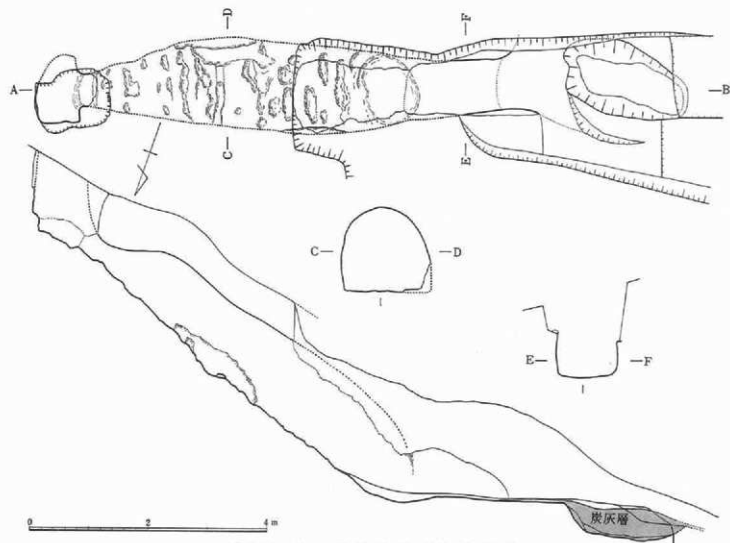
(1) 窯の構造 (図版第二、三・第4図)

窯の全長は約6.2m、幅は焼成部中央付近で最大となり1.45mある。煙道部が隅丸方形をして窯尻に付属するような形態をなす。くり抜き式の無段登窯に属するものであるが非常に床面傾斜が強いいため、結晶片岩の岩盤を利用した床面は内部作業に便利ようにか足がかりとなるような凸凹が多く、また壁や床のところどころをスサ入り粘土でもって補修している。窯の上半部約3.3mの長さ天井部が遺存していた。窯の主軸の方位はS70°W、焼成部における床面の傾斜はおおよそ42°である。前庭部にはいわゆる舟底状ビットがあるが、この位置より下位灰原のほとんどが崖崩れによって流失している。

焚口 1.7~2.3mほど両側に灰色に焼けた壁がある。幅は0.9mある。床面には窯内をすべり落ちた須恵器片があるが炭灰の堆積はほとんどみられない。焚口から前庭部にかけてはほぼ水平につくられ約2.6mほどで舟底状の掘り込みがある。形状は楕円形で上面長軸で径2mをはかる。深さは最も深いところで60cmで内部に含まれる須恵器片はきわめて少量である。



第3圖 管ノ谷第2号高跡地形実測図



第4圖 管ノ谷第2号窯跡実測圖

燃焼部 焚口から1.4mの間で床面が凹んだ部分がある。これより先の部分では同じ傾斜で床面がつくられているから焼成部との境は割合ははっきりしている。遺物もこの部分でほとんどが採集された。

焼成部 燃焼部との傾斜の変わり目から約4.6mの長さがある。床面は42°と急傾斜で階段状につくられたものではないが凸凹が多い。中央あたりにはスサ入り粘土でもって幅15cm、高さ5cmほどの帯を主軸に直交して張りわたして一層の階段状の構造にしている。これらは内部での作業における足がかりと製品焼成の際の置き場を兼ねたものであろう。また、壁と床面が交わるあたりにはところどころにスサ入り粘土で補修がなされている。焼成部は中央で約1.45mと最大幅をとり煙道部に向けて徐々に狭くなり煙道入口では50cmにせばまる。天井高は中央で1.4m、煙道入口で約40cmである。

煙道部 煙道部は横幅1m、奥行0.8mの隅丸方形をしていて、焼成部からは一段下るがほぼ同じ床面傾斜をもつ。地表までの高さは1.4mある。

(2) 遺物 (第5図)

この窯跡では灰原が崖崩れによって完全に流れ去っているため、資料はすべて室内燃焼部と焚口付近において採集されたものである。

蓋 (1~5)

口縁部の形態によって二種類に分けられる。すなわち天井部から一度屈曲させて口縁部をつくり出すわけであるが、その下降部分が長いもの(1~3)と、口縁端部を嘴状に短く下降させたもの(4・5)の二種類である。前者の場合でも口縁端までが天井部の延長のような形態をとるもの(2)とははっきりした屈折をもつ(3)のようなものとは分類すべきかも知れないが、資料数が非常に少ないため量的把握が困難である。径は15~17cmで、つまみの形のわかるものは1例である。扁平大形のつまみで中心をわずかに隆起させている。天井部にへう削り痕を残すもの(1・3)と、カキメ痕をもつもの(5)があり仕上げは丁寧である。

碗 (6)

口縁部から底部までのわかる資料は1例であった。口径16cmのやや大形品で、立ちあがり斜方向にほとんどまっすぐにつくられる。底部は厚手で、立ちあがりとの屈折部には底部へう削りの際の稜がついている。黄白色やや軟質の焼成である。

坏 (9~11・14)

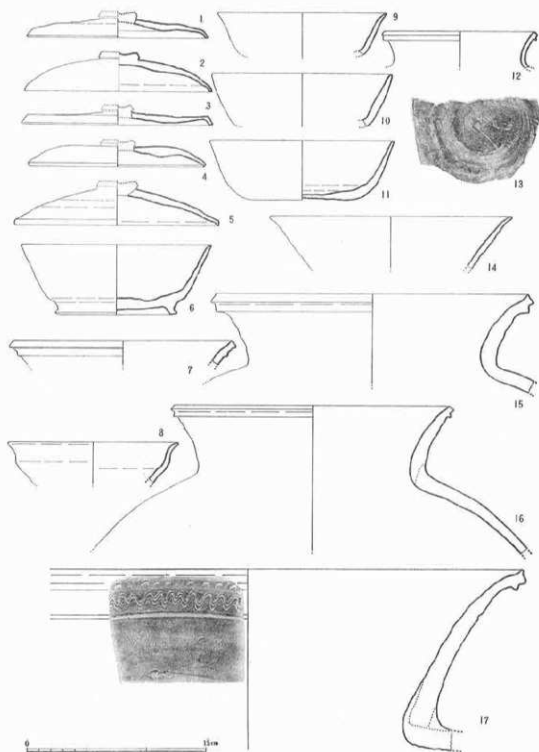
口径14~20cmあって、口縁部の外巻するものと、斜方向の立ちあがりまっすぐに口縁にいたるものがある。厚手のつくりのものは厚さが均一でない。

壺 (7・12)

口縁部のつくりにやや違いがみられる。(7)は外反が強く、口縁外側に小突帯を2条もっている。口径18cm。(12)は非常に薄手である。

甕 (15~17)

口径25cm前後の小形品と、46cmの大形品とがある。大形のものでは頸部に沈線をめぐらし波状文を配したものがあつた。内外面の叩き痕では、内面に同心円叩き・外面に平行叩きが行なわれること

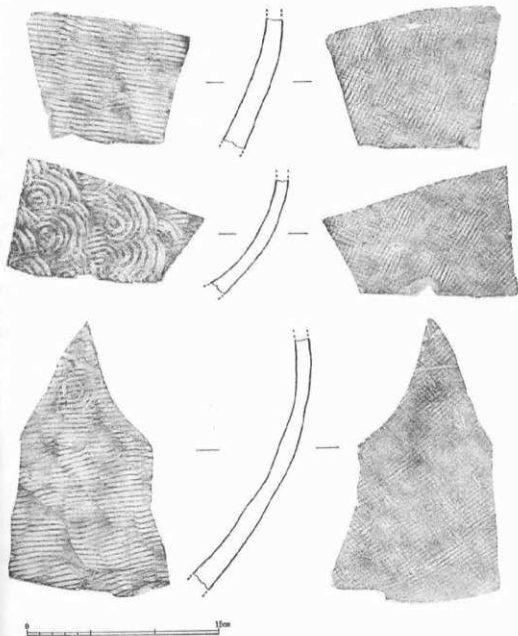


第5圖 管ノ谷第2号窯出土須恵器実測図

は変りがないが、そのほか内面同心円叩きの上から横方向の平行叩きを行なっているものがあった。
同心円叩きは大形で彫り目が太い（第6図）。

その他（8・13）

（8）はどのような器形になるのか不明である。口径14cm。（13）は坏底部に描かれたヘラ記号である。



第6図 管ノ谷第2号窟出土須恵器拓影

(3) 小 結

管ノ谷第2号窯は第1号窯とともに八女古窯群のなかでは、最も新しい時期に位置する窯である。窯構造から見ると42度という急傾斜の床の構造と、円丸方形の煙道部に特色がある。床面の勾配では牛焼谷瓦窯跡²⁾の40度をうわまわるもので現在までこの地区で調査された窯跡では最も傾斜が大きい。煙道部の構造で同様のものは塚ノ谷第2号窯²⁾で知られている。この場合も床面傾斜は38度と大きく、傾斜が大きいために煙道部に近いところでは地表から1m前後の深さしかないところも管ノ谷第2号窯の場合と似ている。また、製作された須恵器の年代から塚ノ谷第2号窯は第VI期の後半であり、牛焼谷窯はそれに後続する時期に比定されている。管ノ谷第2号窯では後述するように奈良時代前半に編年することのできる須恵器が作られているから、これら3窯はほぼ連続する非常に接近した時期に操業しているのである。したがって窯構造の上で類似した特徴を有することも理解される。

次に遺物については、灰原資料の採集ができなかったために各器種が十分そろわなかったことと、量的把握が不十分であったことは残念であった。しかしながら墳蓋の形態よりして、塚ノ谷第2号窯・牛焼谷窯よりは新しく前回調査の行なわれた管ノ谷第1号窯よりは古く位置づけることが可能である。なぜなら塚ノ谷第2号窯でみられた蓋内側に身受けかえりのつく形態のものは1点もなく、牛焼谷窯において大勢を占めていた天井部から口次に遺物縁へ屈折して下降部分の長い形態のものを含んではいるが、量的には奈良時代以後須恵器墳の蓋として特徴的な嘴状に短く下降するものがやや多いことによって、これら二窯より新しいことは明らかである。一方、管ノ谷第1号窯では嘴状に短く下降する形態が支配的であり、つまみの形も扁平なものから腰宝珠形への移行期にあるとみられる。器形の上からも皿および浅くて広い坏部をもった大形の高坏の存在などからみて、牛焼谷窯の製品との間にはもう一時期空白があることは否定できない。今回調査された管ノ谷第2号窯の資料は量的には不十分とは言えまさにこの時期を埋めるものであった。管ノ谷第1号窯が奈良時代後半を占めるとするならば同じく第2号窯は奈良時代前半代に比定することが可能である。

(真野 和 夫)

註1) 調査報告 Ⅲ

2) 調査報告 Ⅰ

第3章 立山山窯跡群の調査

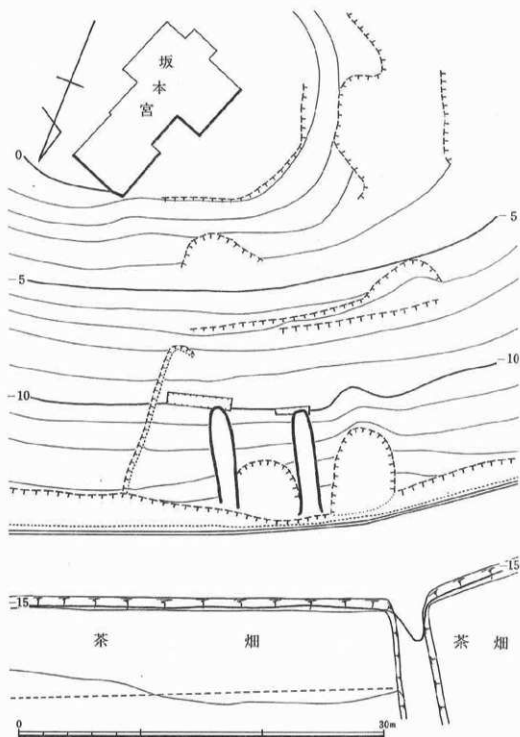
I 窯跡群の立地 (図版第四)

立山山窯跡群は、福岡県八女市忠見区立山山2717番地に所在する埴輪生産の窯跡群である。立山の集落の後背には八女丘陵のつけ根をなす一支脈が東西に延びている。最高所およそ89mのこの立山山には、東側斜面に前方後円墳の丸山古墳をはじめとして数基の古墳の存在が確かめられ立山古墳群と呼ばれている。窯跡はこの低い丘陵が舌状に延びて西側本の集落に達せんとするあたりに位置する。窯体は丘陵北側斜面に約5mの間隔で2基が並んでおり、窯跡のすぐ真上には坂本宮とよばれる社殿がある。このあたりで丘陵の水田面との比高は約20mである。現在窯跡の前底部または灰原を窯体主軸と直角に横切るようにして中尾谷を経て塚ノ谷窯跡群のある塚ノ谷地区などへと通じる道路が走っており、したがってこの部分の遺構はすでにカットされてしまっている。窯は焚口を西北方向にとり、等高線に対しほぼ直交して築かれ煙出し部分より社殿までの高さはおよそ10mある。東側を第1号窯跡、西側を第2号窯跡とする。



第7図 立山山窯跡付近地形図 (二万五千分之一「八女」分載)

- III 塚ノ谷窯跡 IV 牛焼谷窯跡 V はすむ窯跡 VI 立山山窯跡
5 鶴見山古墳 6 釘崎2号古墳 7 釘崎3号古墳 8 丸山古墳



第 8 圖 立山山麓群地形実測圖 (左: 第 1 号窟、右: 第 2 号窟)

I 第1号窯跡

(1) 窯の構造 (図版第五・六・七、第9図)

窯の全長は6.7mあり、地表から2~3mの深さに床面を築いた地下式登窯である。焼成部中央付近においてやや幅が広がるが各部に特別の変化はない。天井部は煙道の一部に遺存していただけでほとんど崩壊していた。一方床面は2ないし3回の床上げの状態がみられ、とくに第二次床では燃焼部から焼成部にかけて左壁寄りに半截した埴輪円筒を次々に入れ子状にして並べた様子が観察された。このような構造は他に類例をみないが、なんらかの意図のもとに行なわれた窯構造の一部として捉えるべきものであろう。この構造については後に述べる。窯の中軸線の方角はN 28°Wである。第一次床は中軸線より右側の部分について調査した。

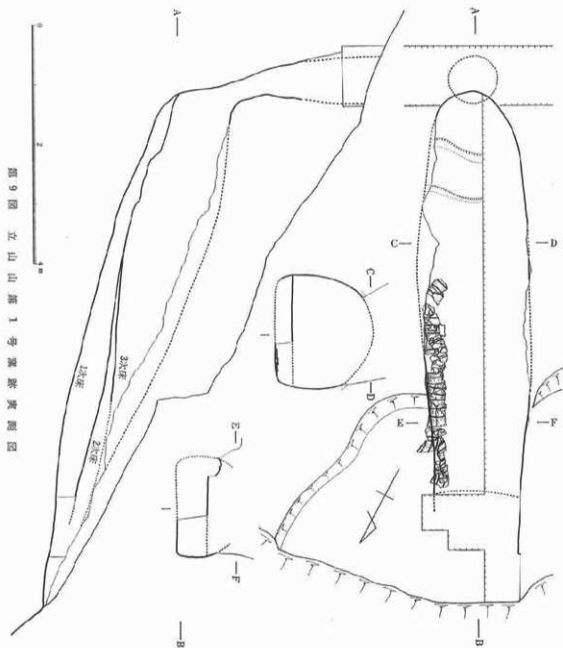
焚口 幅約1.4mあり、左壁は遺存状態がよくない。2mほどで道路ののりとなる。第二次床は第一次床面よりも約30cm高くなる。どちらの床面においても灰あるいは木炭などの堆積はほとんどみられない。第三次床面は崩壊れによって削られはつきりしない。

燃焼部・焼成部 燃焼部と焼成部とを構造上区別できるほどの境はみあたらない。第一次床では床面の勾配からみて約1.5mほどが燃焼部にあたるとみられる。第二次床ではこの勾配の変化が若干焚口方向に近い部分で観察され、あるいは天井の構架位置に多少違いがあったことも考えられる。この部分でも第一次床・第二次床とも炭灰層は検出されない。第三次床は焚口同様崩壊れによって削られている。焼成部は奥壁から3mのあたりで最大幅1.9mをとる。またこのあたりで第三次床と第二次床とが一致する。床面の傾斜は第一次床では16°あり、奥壁に近い部分でやや勾配が大きくなる。第二次床では焼成部中央付近で約5°と緩傾斜を示し奥壁に近く低い段を2段つくっている。第三次床面はほとんど水平に近く床面の焼けしまりも顕著ではない。第二次床面をつくるにあたって約50cmほど赤茶色粘土でかさ上げを行なっているが、第一次床面にははりついた状態で多数の埴輪円筒の破片が検出された。天井部高さは中央部で推定165cmほどであった。

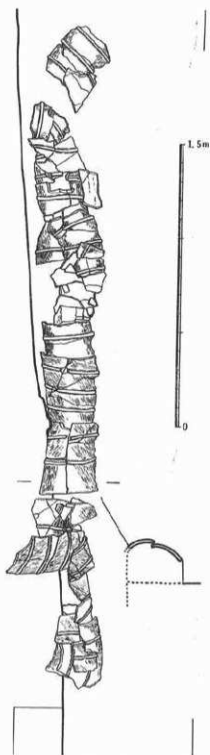
さて、第二次床に並べられた埴輪円筒列はほぼ焚口から3.4mの長さにわたって検出することができた。埴輪円筒は円周の劣程度に割ったもので長さは最も長いもので80cmある。円筒の下端を利用したものがほとんどで、ラップ状に広がる口縁部を用いたものはない。これは下端ほど厚く作られていることからみてその強度を考慮したものと考えられる。並べ方は左壁に寄せて奥の方から一部が重なるようにして順次並べられており、上からみるとまるで埴輪円筒を入れ子にして並べたような観がある。この構造の果す役割は次の二点と考えられる。一つは窯壁の補強を目的としたものでありこれには多言をしないであろう。もう一つは、入口付近における窯幅の縮小である。須置器の登窯では焚口付近の窯壁が非常にせまばっていわゆるとっくり形に近い形態となるものがある。これは最後に焚口を塞いで還元焰焼成を行なう上に便利な構造であり、本窯出土の円筒埴輪やその他の埴輪に一部灰色堅緻な焼成のものがまじっていたことからして、第二次床の段階で還元焰による焼成を行なったことも考えられる。

煙道部 奥壁からほぼ垂直に地表まで煙道が抜けている。煙道は断面が円形で入口部分が径 40 cm で最も狭く地表に向かって次第に広がってゆき、長さはおおよそ 2 m ある。

前庭部 焚口から約 1 m ほどで道路によって切られるため現存部の長さはわずかである。したがって凹欠の有無については確かめることができなかった。遺物の遺存状態からみて竈の東側、主軸から約 3 m のあたりまでが焚口床面よりはやや高いが平坦なテラス状をなして前庭部・灰原の一部であったとみられる。



第9図 立山山麓1号窯跡平面図

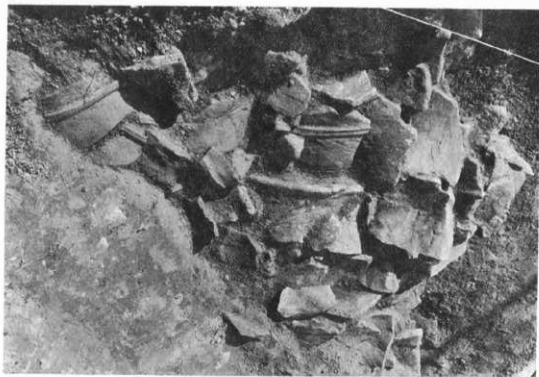


第 10 図 第 1 号窯跡、第二次床左壁に並べられた埴輪内筒

(2) 遺物の出土状態 (図版第八・九・第11・12図)

出土遺物は燃焼部、焚口、前底部において堆積した状態で発見され、室内に置かれた状態を想定させるものはない。焚口付近第三次床面にはとくに多量の埴輪破片の堆積がみられ、窯を廃棄する際にかなりの量の埴輪が窯内に残存していたとみられる。焚口から前庭部にかけては第1号窯・第2号窯間の崖崩れの影響を多少受けており、焚口西側部分の遺物は流失している。これら焚口に堆積した遺物は取除いてゆくと第二次床面にまで達し明瞭な境目によってそれぞれの床面にともなう遺物を区別することはできない。焚口付近では埴輪円筒の破片にまじって竈・把手などが検出された。

一方前庭部東側のやや高い平坦部にも約20cmほどの埴輪破片の堆積がみられた。焚口付近における出土の状態に比べると廃棄された感が強く灰原をなすものである。ここでは人物形象埴輪の下半部および両側に小円形刺突文のある不明埴輪破片が発見された。



第11図 立山山1号窯跡前庭部埴輪出土状態

(3) 遺物 (図版第一〇～一三・第13～17図)

形象埴輪

出土した形象埴輪の割合は、遺物総量からみれば1割にも満たないわずかな量であった。その内わけは人物に関するものが3点、器財埴輪の一部とみとめられるもの4点、不明のものが1点である。まず人物関係では、大形人物像の下半部が発見されている(第13図1)。腰から下の部分

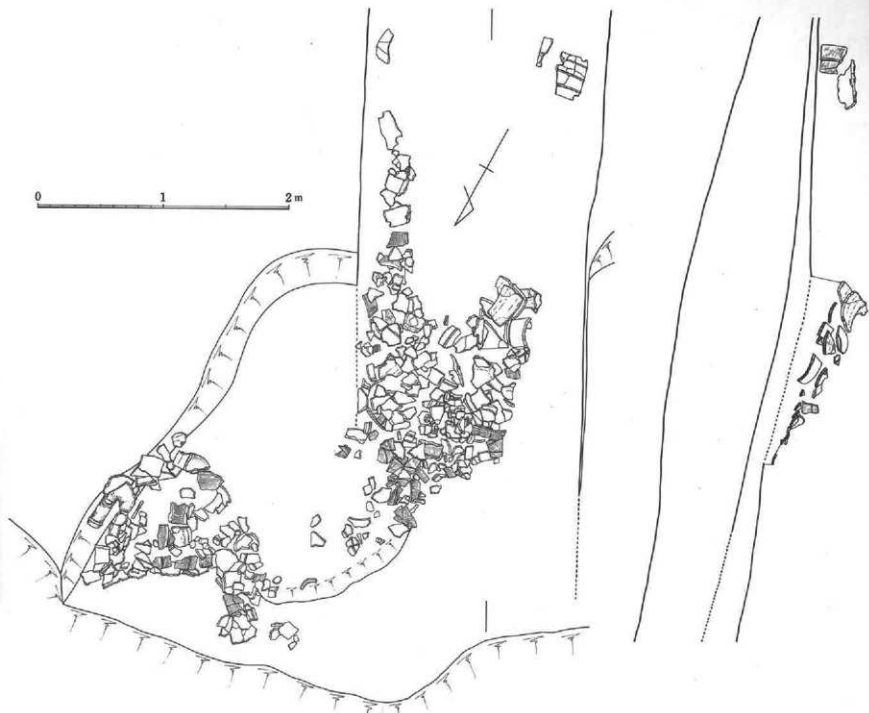
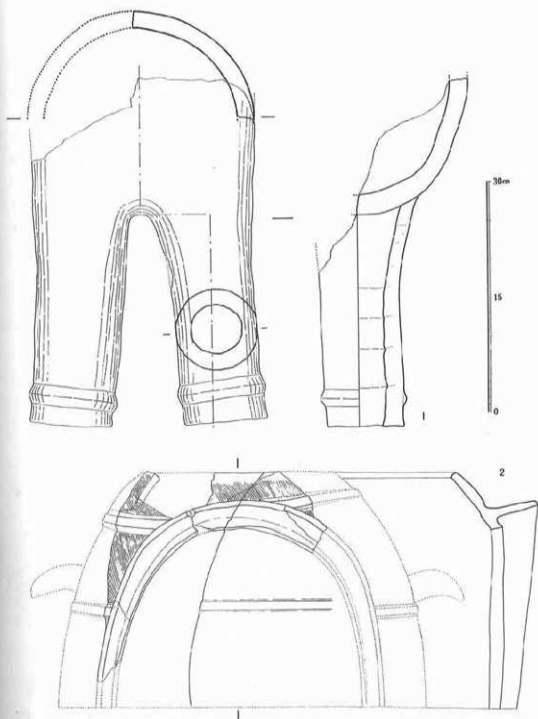
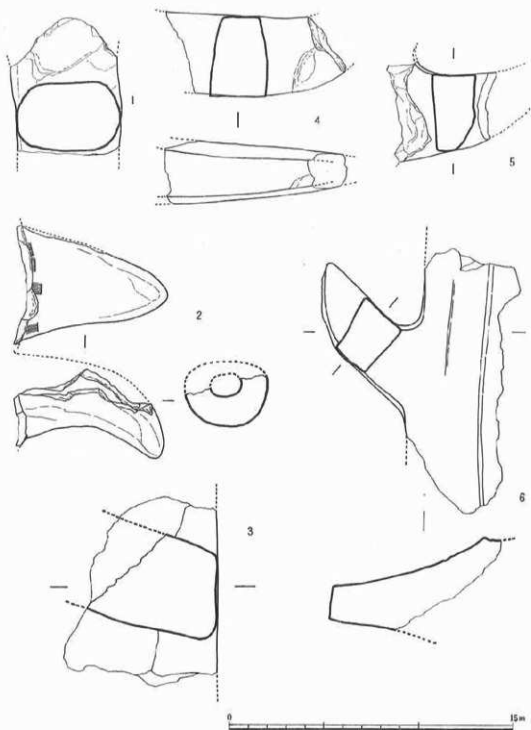


图12图 立山山第1号黑迹遺物出土状态実測図



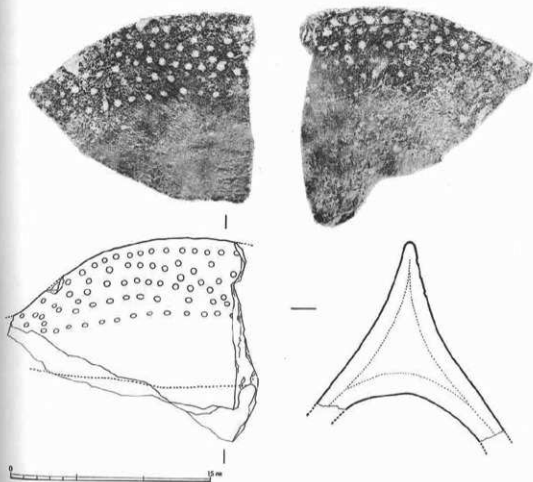
第13図 立山山第1号窯跡出土人物埴輪及び竈実測図



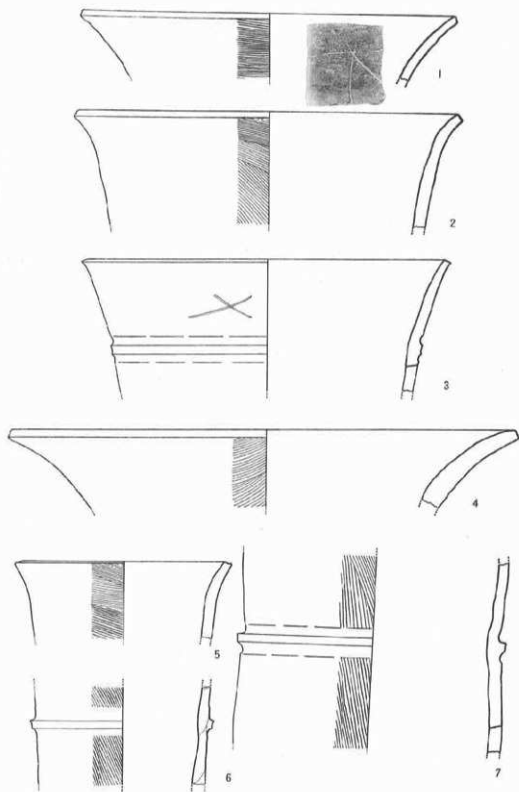
第14图 立山山第1号墓出土形象埴轮实测图

で足先まで 45cm ほどの長さがある。足だけの長さは 27cm、径はおよそ 11cm あって先端に近い部分に幅広の突帯をまわしている。足は内面に 5～6cm の間隔で接合線がみられ積み重ねていったことがわかる。腰部ではそのような痕跡は観察されない。色調は赤茶色、大粒の砂粒を若干含む。このほか手とみられるものが 2 点出土した（第14図1）。

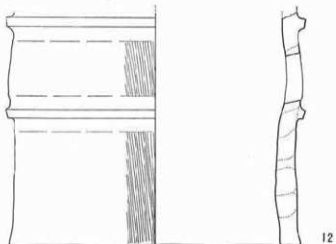
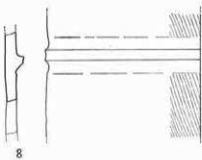
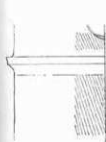
次に甕形埴輪では、家形埴輪の一部とみられる厚手の破片がある（第14図3）。約 5cm の厚みがあって小口が平面に対して斜めに仕上げられており、おそらく屋根の軒を表現する部分と考えられる。このほかに把手状つくり出しのある破片がいくつかある。断面方形で各面ともへう割りによって整えられている。以上のほかに不明の形象埴輪片がある（第15図）。残存部長さ 17cm で断面は各面が出隅した三角形を呈し、側面縦が弧状をなす部分を除いて他は割れ口である。弧状部にそって両面に小円形の刺突が不規則に行なわれている。刺突の行なわれていないもう一つの面は積重ねづくりの痕跡を残し整形がやや雑でおそらく表に現われない部分であろう。円筒形のものの周囲にヒレ状の張出しをもつ形態である。茶褐色、焼成は良好で砂粒をほとんど含まない。



第15図 立山山第1号窯跡出土埴輪実測図、拓影



第16圖 立山山第1号窯跡出土円筒埴輪実測図(→)



第17圖 立山山第1号源跡出土円筒埴輪実測図付

円筒埴輪 (第16・17図)

出土遺物の大部分が円筒埴輪の破片である。径の大きさによって大・小二種類に大別される。まず小形の円筒は径が大体 22cm 前後のものである。口縁部が大きく開く形態のものはみあたらない。口径の大形品に比べ、灰褐色須恵質に近い堅緻な焼成のものが多い。次に大形円筒は径が 30~40 cm のもので、口縁部の形に二種類あるようである。すなわち (2)・(3) のように開き気味に直立するものと、(1)・(4) のように朝顔形に大きく開くものとの二形態がある。径の大小を問わず外面の調整にはハケが使用されるのが一般的であるが、なかには無仕上げしたものもある (10)。それぞれ胴部には突帯と円形透しを施す。透しは 2 個を 1 対とし、上下の関係はこれらが直角になるように配している。成形はある幅をもった粘土帯を積み重ねてゆく、いわゆる輪積手法で内面あるいは割れ口において観察することができる。また口縁付近にヘラ記号の描かれたものもある (1・3)。

甕形土器 (第13図)

破片ではあるが全形をうかがうには十分である。復原するとおよそ底径 47cm、高さ 30cm ほどの大きさになる。前面は焚口部がヘラによって切り取られ中央約 6 cm ほどの庇がつき、次第にその幅を減じながら焚口をとりまいている。

甕上面の口径は約 23cm ほどになるとみられ、胴部には二段にタガをもっている。側面には把手 (第14図2) がつく。胴部外面は斜方向のハケ目が残る。灰褐色須恵質に近い焼成である。

以上、後章との関連上ここでは報告のみにとどめるが、隣接する第2号窯との作業時間の前後関係については、第2号窯跡焚口へ前庭部にかけて 1 m ほどもあった土砂の堆積の上部にかなりの埴輪片を含む層がおおい、それが窯体部分だけでなく第1号窯から連続する相様を呈していたことからして第2号窯の作業を先とするのが妥当であろう。

(真野和夫)

Ⅲ 第2号窯跡

(1) 窯の構造 (図版第一四・第18図)

第1号窯の西 7 m ほどのところに並んでつくられたくりねき式の登り窯である。全長 6.44 m を測り、地山を削りぬいて構築した地下式の無段登り窯である。天井はすでに陥没してしまって旧態をとどめていなかったが、須恵器焼成窯跡と同様な形態をとるものであったことがうかがわれる。窯体の中軸線は N 27°W で北側に開口している。

焚口床面の幅 1.6 m で、焚口の奥と外側の幅はほとんど変わらない。これより前方 2.3 m ほどで崖面に達し、この間の床面はほぼ平面をなす。焚口付近には約 3.5 cm の厚さで炭灰層が堆積しており、左右の壁面は熱作用をうけて固くしまりほぼ垂直の立上りを示している。焚口から奥にむかう床面は約 13° の傾斜を示しながら燃焼部につづいている。

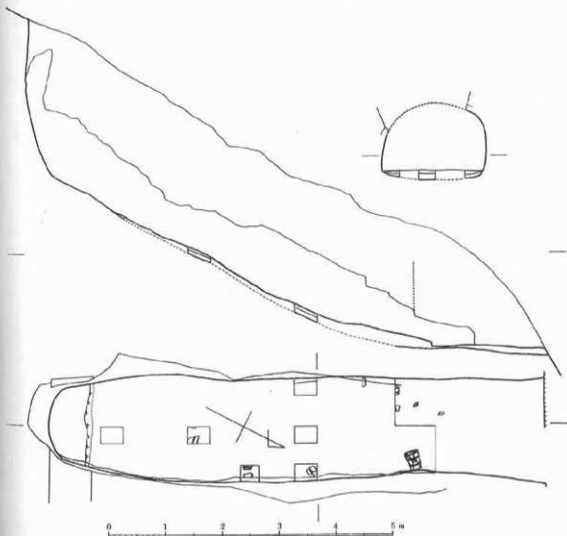
燃焼部 焚口につづいて約 13° の傾斜をもった床面で焼成部へとつづいており、両者の境界を明確にすることはできない。焚口部にくらべて若干窯幅が広がる傾向があり、窯幅 1.75 m を測る。焚口から 1.7 m ばかり奥にすすんだあたりで窯壁の保存状態が良く、両壁から天井にかかるあたりのカ

ープがのこされているので、天井の推定復原を試みると高さ1.2mばかりになる。

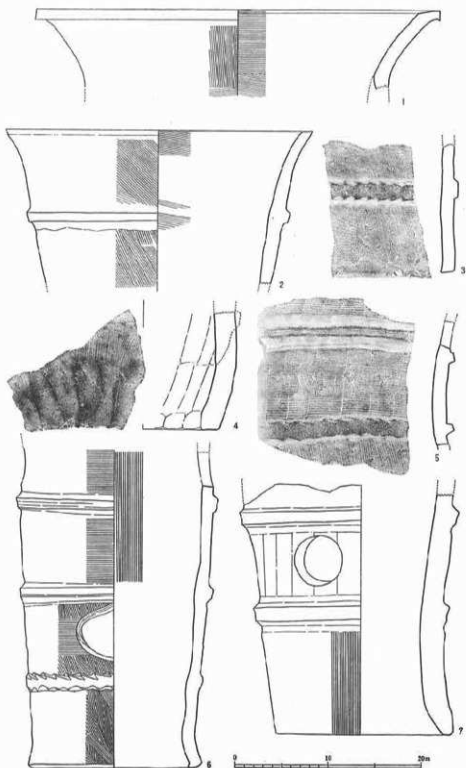
焼成部 燃焼部につづく焼成部は窯幅を同じくしながら奥行約4mの構成である。煙出しとの境界にむかって窯幅を減じてゆき、煙出し部との境では窯幅1.4mとなる。床面の勾配は燃焼部をすぎると25°の傾斜を示している。燃焼部の奥半分から煙出しにかけての窯壁面にみられる熱作用は著しい痕跡をとどめている。

煙出し 窯体の最奥部は床面を一段高くして半円形のプランをなし、焼成部と同じ傾斜を示している。末端から上方に煙出しの円形竪竈を穿っていたのであるが、天井の陥没によってくずれ去り、大きさは不明である。

操業と床上げ 以上の窯構造は操業時最後の形態を示すものであること論を待たないが、築窯時における第一次操業時の窯体の規模をさぐるために、床面の中軸線沿いに3ヵ所、窯壁沿いに3ヵ所の盗掘りを行なった。その結果、焼成部の末端から焚口にかけて10~20cmの厚さの床上げがあること



第18図 立山山第2号窯跡実測図



第19圖 立山山第2号窯跡出土円筒埴輪突刺圖

が確かめられた。床上げの厚みは奥から焚口にむかうほど厚みを加えており、焚口前方のあたりでも約10cmの床上げがみられる。また床上げにあたっては埴輪円筒片をつきこんだ床面のつき固めが行なわれており、断面にみる土層は二層を区分することができるが、厚みもうすいところから推して、本窯跡の操業期間はさして長期にわたるものでなかったことが知られるのである。

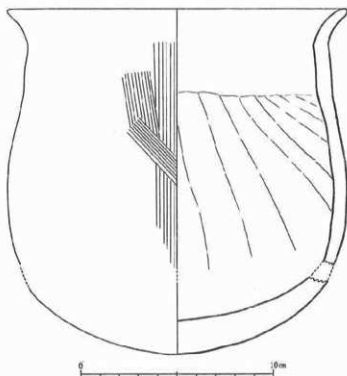
(2) 窯内遺物の出土状態 (図版第一五)

第一次床面に密着する状態で埴輪円筒の破片が発見されるものは、すべて床上げに際してつきこまれたものである。最終操業時の床面に発見された遺物はほとんどなく、焚口あたりの西壁沿いにまとまった形の円筒埴輪1個が横転した状態で出土した。この埴輪は小形円筒の下半部であった。

焚口付近の窯体東側から窯体上方にかけて、かなり窯床から高い位置に円筒埴輪片がやや集まって発見され、土師器甕なども出土したが、これらは本窯跡が操業を停止した後に、東側から棄てられた状況を物語っているようで、本窯廃止後も東側に隣接する第1号窯跡が操業をつづけており、この方面からの廃棄された状況を物語る公算が大きいと思われる。

(3) 遺物 (図版第一六・一七、第19・20図)

窯内では焚口から燃焼部にかけてのあたりで円筒埴輪が発見されたが、出土量はさして多くなかった。埴輪はほとんど破片であったが、焚口付近では円筒のままの形で上半分が欠失したものが一、二



第20図 立山山第2号窯跡出土土師器輪実測図

発見されている。円筒の完全なものがいないので高さを正確に知ることはできないが、大小二種あったようである。上端でやや外反して開き、下端にむかってすぼまる形態である。大形のもの(1)は上端径43.2cm、小形のもの(2)は33cmを測る。大形円筒埴輪は垂場古墳出土品にほぼあい似た完形品があって全形をうかがう参考品になる(本書第5章参照)。大小両埴輪とも最上段と最下段をのぞく各段に一对の円孔があり、各段90°づつ方向をかねて配されるのは通常のものとかわりない。筒身中途の破片には製作上その他の特徴を指摘できるほどのものがないので、実測図には上端部二例(1・2)と下端部五例(3~7)を示した。特に円筒の小形品には下半分を完存するもの(6・7)があったことは製作技法などを観察する上に役立つところが多かった。下端径は18~19cmで最下段の貼付突帯は、筒身に固着させるために鋳先でおさえた痕跡がそのままのこされている(3~6)。二段目より上は断面コ字形に整形されることが普通である。おそらく墳丘に樹立するにあたって一段目突帯のあたりまで地下に埋没させるために整形の手間を省いたものであろう。また下端の表面を粗いタッチで削ってすぼませたものもみられる(4)。表面の整形には粗い筒状あるいは板状工具で縦方向あるいは横方向にかき目を加えているが、二~三段目には横方向のかき目を途中で休みながらきき次いでいった様子をうかがえるものがある(5)。また鋳で縦方向に削って仕上げる手法もある(7)。焼成は一般に黄色あるいは赤褐色のやや軟質の焼き上がりであるが、なかには黒色あるいは鼠色の固い須恵器風な焼き上がりのもの(2・4・5)がみられることは注意される。

このほか窯跡焚口部の外側上方から土師器の甕形土器一個分がほぼまとまって出土した。口径17.8cm、復原高18cmの丸底、胴ふくらみあるもので、黄色軟質の焼き上がりである。表面は粗い刷毛目整形のあと、なでけており、内面は斜め方向に器壁を削っている。器壁は底部をかなり厚くして安定度を大きくするようにはかっている。この土器は本来第2号窯で焼成されたものではなく、隣接する第1号窯で焼成されたものが、廃棄されたものであろうと考えられる公算が大きい。埴輪窯跡群で発見された唯一の土器であるから、年代判定の上に貴重なものとなるが、土師器編年の鬼高式期相当と思われる。

(小田富士雄)

第4章 牛焼谷古墳群の調査

I 古墳群の立地 (図版第一八・第21図)

〔所在地〕 八女市大字本字牛焼谷1947-1番地

塚ノ谷および菅ノ谷の窯跡群に通ずる新道が清尾池に沿ってすすむ西北側の斜面は急な傾斜で池に迫っている。この清尾下池に面した斜面は忠見区牛焼谷に属している。この急斜面に現在まで確認できた古墳は6基を数えるが、当初パイロット事業計画による掘削予定のものは第1号から第5号までの計5基であったので、予定地外にある第6号墳は発掘調査を行なわなかった。

古墳はいずれも小古墳であるが、急斜面のために早くから封土が流失し、詳細に観察するとわずかに地表に高まりを認めることができるほどであった。またいずれも早く天井石を持ち去られているために埋没してしまっていた。道路の切通しにのぞむあたりで海拔80mの等高線が走り、最高所を占める第2号墳、第5号墳は95mの等高線あたりにある。このあたりでは山腹のなかほどに相当する。

調査終了後、事業工事者との話し合いによって工事による削平を頂上から山腹の中ほど以上にとどめて、古墳群の保存が実現したことは幸いであった。道路に近い80mから85mの間はかつて階段式に整地して開墾したことがあるらしい痕跡をとどめていて、等高線の走る状態は急傾斜をなす山地形を著しく乱して正常でない。この部分に第1号、第3号、第4号の三古墳があり、いずれも等高線に直交する方向に石室の主軸線をとって道路にむかって開口している。高所にある第2号、第5号の二古墳は石室の主軸線を等高線に斜交し、あるいは平行させて設営していて、南から南西にむかって開口している。

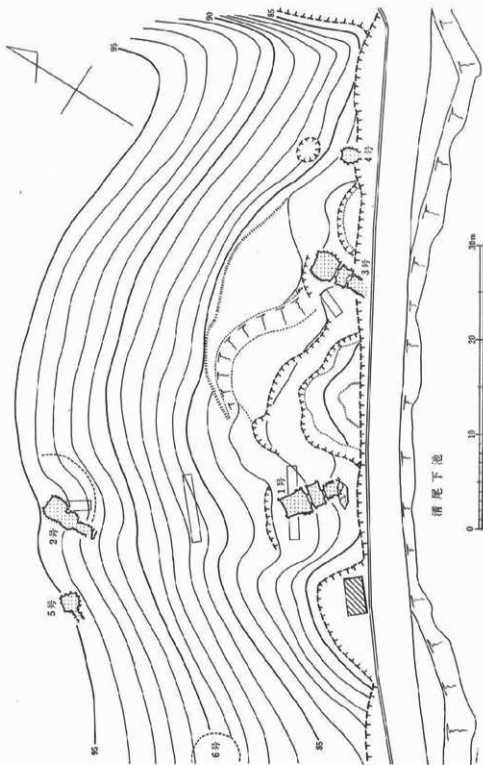
このような山腹の斜面に営造される古墳例は、近時次第に実例を加えてきている。とくに福岡市の西柚山山麓地帯では、このような立地をとる小古墳が群して営まれている様子が顕著な好例である。八女市周辺ではこのような様相は牛焼谷古墳群の出現によって注意されるにいたったが、今後実例を加えてくるであろうという予想を禁じえなくなった。

(小田富土雄)

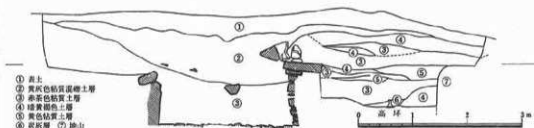
II 第1号古墳

墳丘及び石室の構造 (図版第一九～二一図)

墳丘は直径10m内外の円墳で盛土より成る。石室は地山を掘りこんだ墓竈の中に構築されている。この墓竈は石室が斜面に直角につくられているため後室部分では深く、後室の床面は墓竈の上端より約1.3mも下になるが、羨門部分ではほとんど深さをもたない。石室と墓竈の罅隙および石室上には



牛壩谷古墳群地形図



第22図 牛焼谷第1号古墳横断トレンチ実測図

盛土を行なって墳丘を形成している。墳丘の本来の高さは正確に知りえないが、後室床面の深さからみて、もともとあまり高くはなかったものと思われる。

墓壇と石室の隙間を埋めた堆積土中に小範囲の炭・灰層があり、ここから須恵器高杯の脚部が出土した。この高杯が古墳に伴う可能性は大きい、破片がわずか1個出したのみであり、これが墳丘築造に伴う祭祀に関係あるかどうか断定はできない。この点、期日の都合で墳丘トレンチの調査が完全にできなかったことは惜しまれる。

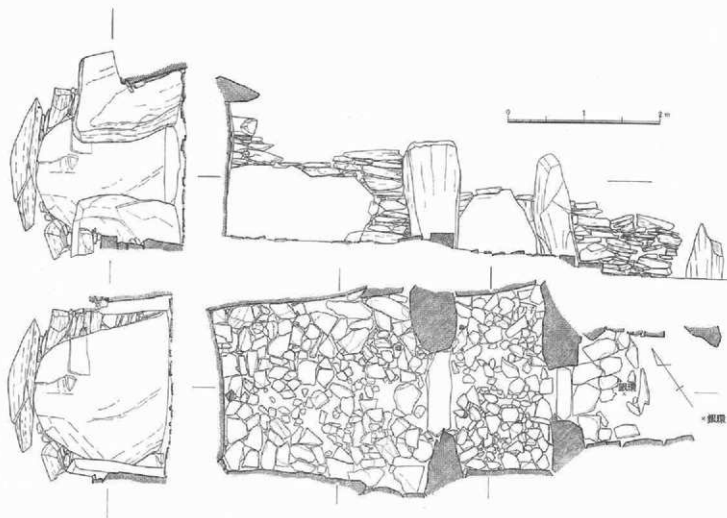
石室は後室・前室・羨道からなる複室構造の横穴式石室である。天井石および石室上半部は盗掘による破壊を受けている。石室は結晶片岩を用いて構築し、各室の境界には袖石を立て、隅石を置いて区分している。敷石は羨道の前半部を除くほかは全面に認められる。石室の全長は6.55mを計り、主軸はN 54.5°Wで南東に開口する。各室の大きさは下表に示したとおりである(単位、m)。

	長さ	幅	高さ
後室	2.68	2.17~2.65	1.77+α
前室	1.40	2.29~2.44	
羨道	1.97	1.35~1.5	

各部分についてみると、前室・後室とも前部ほど幅が広がっている。特に後室では長さとも最大幅はほぼ等しいが、奥壁部分では幅が約50cmも狭く、平面形は台形を示している。後室の奥壁・左右両壁には大きな腰石を用いている。特に奥壁はほとんど一板岩でおおい、天井石はこの1板岩の上に直接乗せられている。積石技法で注目されるのは奥壁と側壁にまたがって、隅丸状に配された石材がみられることである。このいわゆる力石は奥壁北側では現存の上から5個がこれにあたり、西側では1個認められる。この石室の場合、これらの力石は両壁にはほとんど食込んでおらず力学的効果には疑問が残るが、いずれにせよ両壁の安定を計算に入れた積石法であろう。両側壁は後室長より若干短い長大な腰石を奥壁に接して立て、袖石との間は扁平な割石を床面から横積みにして壁面を埋めている。

前室は幅が長さの約2倍であり、古式の形態を示している。両側壁は大きな腰石を立て最下段とし、その上に扁平な割石を積んでいる。後室と同様、壁面は最下段から内傾している。床面は後室が最も高く、階段状をなして前室から羨道へと低くなっている。

羨道両壁は羨門部分がやや狭く設計され、扁平な割石を床面から積んでいる。北東壁の羨門部には三角形の石を立てている。この立石と壁面は連続していないが、これを羨門とみなすことができ



第23圖 牛麓谷第1号古墳石室平面圖

よう。羨道部の壁面は前室・後室にくらべると石積は粗雑で、石材と石材の間隙には多くの土砂で埋めて壁面を構築している。このような壁では天井石を支えることはできず、また壁面の高さからみて、羨道部には本来天井石はなかったものと思われる。また、前室入口付近の、羨道閉塞石上にあった大きな板石は、前室の扉石であった可能性が高い。

遺物の出土状態 (図版第二二図)

石室内部は羨道の一部を除いてすでに以前の盗掘のために攪乱され、遺物はほとんど残されていなかった。後室床面からは須恵器破片(甕・高杯)などが、前室からは須恵器破片(甕・杯蓋)・土師器高杯破片・鉄刀子破片などが発見されたが、いずれも小破片で副葬状態を示すものはなかった。羨道は盗掘をまぬがれていたため、前室寄りの部分には閉塞石が遺存していた。遺物としては北東壁近くの閉塞石上から須恵器高杯が発見され、前室入口近くの閉塞石の間からやや小型の銀環が1個発見された。また、南側羨門付近でも銀環を1個発見し、ほかに須恵器甕破片1個を検出した。羨道部出土の須恵器が前室出土のものより型式的に新しいことからわかるように、これらはいずれも追葬時に前室・後室より持ち出されたものと考えられる。

石室の天井石は後室奥壁上の1板をのぞいてすべて取り去られており、石室内には多量の土砂によって埋められていた。このうち、後室の部分では第2層である黄灰色粘質泥礫土層から須恵器・土師器の破片を検出した。須恵器には羨道部で検出した高杯と同時期のⅢb期の杯身があり、土師器は風化が著しい。これらの土器はもと墳丘上に置かれていたものが天井石の除去によって石室内に落込んだと考えることができる。また、墳丘トレンチでは炭灰層から須恵器高杯胸部を検出した。

遺物 (第24・25図)

羨道	銀環	2
	須恵器(高杯・甕)破片	2
前室	鉄刀子破片	2
	須恵器(杯蓋・甕)破片	4
	土師器(高杯など)破片	10
後室	須恵器(高杯・甕)	2
後室埋土	須恵器(杯身・甕・甕)破片	10
	土師器(高杯など)破片	8
墳丘盛土	須恵器(高杯)破片	1

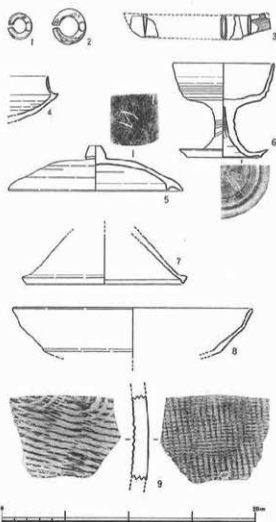
銀環はいずれも銅地に銀張りをしたものである。1は長径2.05cm、短径1.85cmを計りやや小型である。腎食は少なく大部分は白っぽい黄色に光っている。断面は長円形をなし、0.7×0.5cmを計る。2は羨門付近から出土したもので、2.8×2.65cmを計る。銅地の一部も腎食しており、銀も大部分は暗灰色をしている。これら2個の銀環は大きさからみてセットになるとは考えられない。

鉄刀子(3)は釜と切先の部分のみ残存している。茎長2.3cm、幅1.2~1.7cm。刃部の幅1.9cmを計る。刃部は平造りである。

須恵器杯身(4)は後室埋土より出土した。短小な受部に比べてたちあがりは高い。灰色～暗灰色を呈し、焼成は堅緻で胎土は精良である。第Ⅲb期に属す。

杯蓋(5)は口縁径13.8cm、高さ3.6cmを計る。頂部には円錐台状のつまみをもち、天井部からゆるやかに下って口縁部に至る。口縁部内側にはかえりがつく。天井部外面にはカキ目状の調整がみられ、体部内外面は横ナデを行なっている。灰色を呈し、焼成は不良で軟質。胎土に細砂を少量含む、天井部外面にはヘラ描記号がある。この型式の杯蓋は塚ノ谷1号窯から出土しており、本品も1号窯の製品と考えられる。第Ⅴ期にあたる。

高杯(6)は口縁径8cm、高さ7.3cmを計る。外反の著しくない杯部は外面に三条の沈線をもち、底部外面にはカキ目が施されている。脚は裾部が大きく広がり、さらに脚端部が斜上方に外彎して鋭い稜をもつ。脚端部の直径は7cmを計る。脚中央にはラセン状の沈線が2～3周している。焼成は良く、堅緻で青灰色を呈し、胎土は細砂を少量含む。この型式の高杯は塚ノ谷4号窯から出土してお



第24図 牛焼谷第1号古墳出土遺物実測図

り²⁾、本品もその製品であろう。第Ⅲb期のものである。

(7) は黄褐色をして軟質であるが土師器ではなく、須恵器が低温の酸化炎で焼かれたためである。高杯の脚部で、脚端には断面三角形の凸帯をつけている。脚端部の直径は 13 cm。

(8) は土師器高杯で杯部の推定復原径は 19cm である。内外面に横ナデ調整を行なっている。黄褐色を呈し、焼成は色く、胎土も精良である。

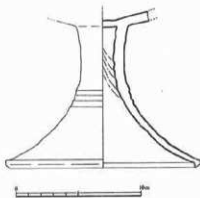
(9) は前室より出土した須恵器蓋の破片で外面は縦平行叩文、内面は青海波叩文・平行叩文を有す。青灰色で焼成は良く、胎土も精良である。

(渡部 明夫)

須恵器高杯

第 1 号墳の墳丘に石室主軸に対してほぼ直角に設定したトレンチにおいて、石室外封土中より出土した須恵器である。位置は東側墳丘裾部に近いところで、高さは地山の直上であった。脚端での径 15.5 cm を測る大形品で、いま坏部を欠損しているが蓋付の形態であったとみられる。脚は中央部に三条の沈線を配し、透孔はない。脚端は断面三角形の突出部を downward につくっている。色調は明かるい茶色で堅緻な焼成、胎土は精良である。

(真野 和夫)



第 25 図 牛焼谷第 1 号古墳墳丘内出土須恵器

小 結

1 号墳は出土須恵器からみて 6 世紀後半に築造され、さらに 7 世紀代に少くとも 1 回の追葬が行なわれている。これらの須恵器はきわめて近くの塚ノ谷 4 号窯・1 号窯で生産されたものである。したがって、被葬者は須恵器生産と何らかのかかわりあいをもった人たちであった可能性が強いと考えられる。

石室は古墳群中で玄室が胴張りでない唯一の例であった。このことは玄室両側壁に長大な腰石を用いたために必然的に生じたことで、石室構造と石材との密接な関係を示しているものといえよう。したがって、石材が異なれば同一古墳群中であっても、牛焼谷古墳群のように数種類の石室構造が同時期に築造されるのである。また、この古墳によってこの種の石室構造が八女古墳群内において²⁾ 乗場古墳から童男山古墳³⁾ へと連続的にとらえられたことも重要である。

(渡部 明夫)

註 1) 小田富士雄ほか『塚ノ谷窯跡群』1969

2) 本報告書

3) 小田富士雄ほか『曾ノ谷窯跡群』1971

Ⅲ 第 2 号 古 墳

石 室 の 構 造 (図版第二三～二五・第26図)

石室は清尾池に面する斜面の中ほど、等高線に平行して構築された二室構成の横穴式石室である。石室の主軸はN8°Eで、ほぼ南北方向をとり南に開口する。石室の全長は5.3mである。羨道、前室、後室からなり、おのおのの境界には、左右の袖石を立てて区分している。床部は後室から羨道にかけてゆるく下向し、両端の落差は約50cmある。本古墳は斜面上に营造されているため、土圧のため早くから崩壊していたと思われ、現状では床から約70cmの高さまでの石積の状況しかみられない。石材はすべて近傍に多い結晶片岩である。各部の大きさをまとめて示せば下表のようになる。(単位m)

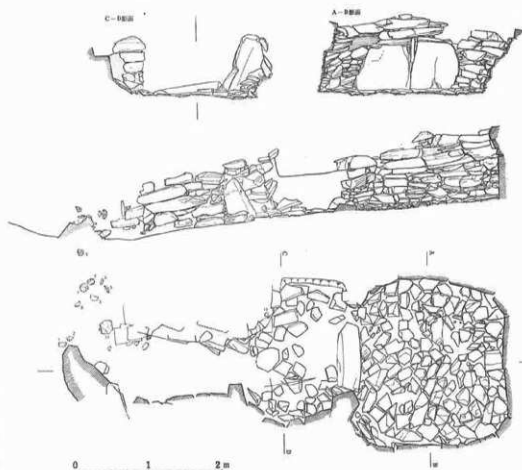
		長 さ	巾	高 さ
後	室	1.95	2.30	0.7 以 上
前	室	1.20	1.70	0.6 以 上
羨	道	1.50	0.85	0.7 以 上

後室は奥壁に幅70cm前後、高さ60～70cmの石を2枚立てて腰石としている。その上には扁平に近い割石を三段、持送りぎみに平積みしてある。側壁はすべて割石を平積みにして構築されている。横断面は西壁が山頂側にあるため腹圧をうけて内傾しており、東壁は逆に著しく外傾し、平行四辺形を呈している。この種の古墳の石積は本来持送り状に積まれているのであるが、本古墳の西壁の内傾は本来のものではないと思われる。平面形は両側壁間の最大幅が石室中央付近にあり、その前後にゆくに従い狭くなる、いわゆる三昧線胴張りを呈する石室である。敷石は全面に亘ってみられる。本古墳の石室は崩壊しているのでその高さは不明であるが、同様な構造をもつ朝倉町上須川所在の上須川1号墳の規模より考えて、大略2.5m前後であったらうと思われる。後室と前室を区分する袖石の西側の方は消失している。東側の袖石の上には0.9×0.6mの菱形の石が丁字状に垂っていたが、天井石であろう。この部分には圓石もある。

前室はすべて割石で構築されているが崩壊が著しい。西壁は羨道側がかろうじて残っている他は崩れ去っている。東壁は後室同様外傾していて高さも床面より30cmしか残っていない。このため前室の立体構造については分からない。平面形は東壁の状況より胴張りの石室であることが知られる。前後長よりも左右幅の方が広い。前室と羨道の境界には圓石はない。

羨道部の石積みは粗雑で間隙が多い。両壁はほぼ直線で外側にやや開く。敷石はみられない。

石材はすべて結晶片岩を使用しているが、奥壁の腰石、各部を区分する袖石等石室の構築の際の基礎となる部分は石理が縦方向になるように立てて使用している。その外はすべて横方向になるよう積まれている。



第26図 牛焼谷第2号古墳石室実測図

遺物の出土状態 (図版第二六図)

遺物は石室内外の三ヶ所から出土した。羨道部の末端を確認するために墳丘を掘り進めていったところ、羨道西壁の終る部分から墳丘裾部にかけて須恵器の坏、蓋、甕、提瓶、土師器の皿など約10個体分が無秩序な状態で検出された。羨道部末端部付近からは須恵器の蓋、甕、提瓶、土師器などが検出されたが小片であったり、風化していたりして器形の不明なものもある。前室の西壁は崩壊していてわずかに羨道側の部分が残っているだけであったが、それも内傾のひどい状態であった。その床面から小形の高坏が出土した。本古墳の石室から副葬品が検出されないことを盗掘のためとするなら、この高坏は盗掘時すでに傾いた石積の下にかくれていたものと考えられる。後室の床面を検出するため内部に落ち込んだ石材や土砂を排除していた際奥壁近く床面より約10cm上の土の中から同一個体と思われる須恵器の蓋片が2片出土した。封土中に含まれていたものが土砂と一緒に流れ込んだものであろう。

遺 物 (第27図)

〔墳丘裾部出土遺物〕

- 須恵器 坏身 5 个体分
 坏蓋 2 〃
 甕 1 〃
 提瓶 4 〃
 甕 2 片 破片 10
 土師器 甕 1 〃
 破片 11

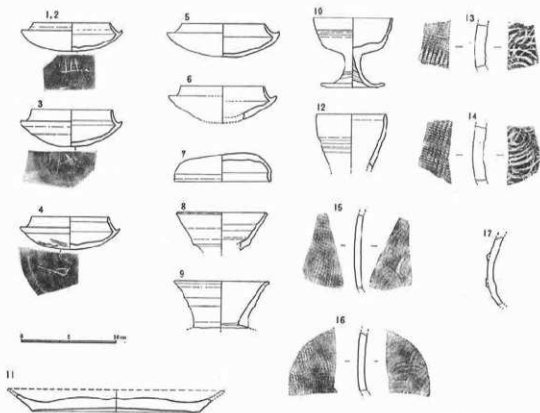
〔前室内出土遺物〕

- 須恵器 高坏 1 〃

〔後室内出土遺物〕

- 須恵器 甕 2 片

石室実測図中に図示されているものには番号を付した。以下で使用する番号はそれと合致する。



第 27 図 牛焼谷第 2 号古墳出土遺物実測図

A. 墳丘裾部出土遺物

坏(1,2) この2片は出土当時10cmの距離をおいて離れていたが同一個体である。口径8cm、最大径10.6cm、高さ3cm、灰色を呈し焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。立ちあがりは全体に内傾するが、口縁部付近で直立ぎみに外彎する。蓋受の線はつまみあげたような格好で外側は内に傾むき縁は高い。山字状の窯印がある。

坏(3) 口径8.5cm、最大径10.7cm、高さ3.9cm、外面は黒みをおびた灰色、内面は灰色を呈する、焼成は良好である。口径に比し高さが高い。立ちあがりは接合部では内傾しているが中ほどから内側にあまい稜をつくって直立ぎみに外彎する。窯印がある。

坏(4) 口径8.1cm、最大径10.5cm、高さ3.5cm、灰白色を呈する、焼成は弱く軟質である。立ちあがりは接合部内側ですどい稜をつくり、中ほどまで内傾するが口縁部付近で直立ぎみに外彎する。底部はへうで削って成形しているが雑である。窯印がある。

坏(5) 口径8.8cm、最大径11.8cm、高さ3.5cm、灰色を呈し焼成はよいが形がいびつである。蓋受部はひろく外縁との間に溝がある。

坏(6) 復原形で口径8.6cm、最大径11.3cm、高さ4cm、青灰色を呈し焼成は良好で堅緻である。

蓋(7) 口径10.1cm、高さ3cm、黒ずんだ灰色を呈し焼成はあまりよくない。内外面ともに天井部と体部の境に特色がみられる。外面は天井部から体部に移る部分が最大径をなし、体部は凹みをもって口縁部へ続く。内面は天井部と体部の境にカーブの変節点をもつ、すなわち天井部からなめらかにカーブしてきたのがこの部分で稜をつくり中ぶくらの状態で口縁部へ続く。

臚(8) 口頸部上半だけである。灰色を呈し焼成は良好で、堅緻である。口縁部は外側に斜めに段をつくって削られている。

提瓶(9) 口頸部だけである。接合部の部分で本体と離れたものである。口縁径10cm、灰白色を呈し軟質である。口縁部は外にわずかに張出している。

皿(11) 周縁部が破砕しているため全形がうかがえないが、本来径23cm、縁高2.4cm前後の円形のものであったと思われる。表面は中心に径1.5cmの凸部がある。その外側はなめらかにカーブして中心より8cmのところでも最も深くなる。そこから斜め上方に向って再びひろがり周縁に続く。裏面は中心より9cmのところ平坦な面においた時面と接触する部分であり、それより内側は中心部で4mmの深さをもつなめらかなカーブを描く。それより外側は斜め上方に向ってひろがり周縁部へ続く。中心部で1.1cmの厚さがある。全体に赤茶色を呈するが裏面の中心部付近は黒色を呈する。

以上の他須恵器の甕、甕、蓋、提瓶、土師器などの破片が出土したがいずれも小片で全体形を推測できない。

B. 前室内出土遺物

高坏(10) 口径8.2cm、高さ7.4cmを計る小形品である。青灰色を呈し焼成は良好である。坏部は体部より斜め上方に直線的にひろがる。坏部中央に2条の沈線がめぐる。内面底部は不定方向へのナデにより仕上げである。脚部中央に沈線がめぐるがこれは螺旋状にめぐっている。脚内面には成形時のしぼり痕がみられる。脚底部径6.6cm脚端ははねあがっている。

C. 後室内出土遺物

須恵器の甕の小片(15、16)である2片とも同一個体分と思われる、灰色を呈するが割口は茶色がかった色である。焼成は良好である。外面には平行叩、内面には青海波状文がみられるが凹凸の変化が少ない。

小 結

第2号墳の年代については墳丘裾部および前室から出土した須恵器がきめてとなる。これらの須恵器はすべて第Ⅲb様式の特徴を示し、実年代において6世紀後半にあてることができると考えられる。またこれらの須恵器は古墳群のある山丘の東方約300mの地点にある塚ノ谷4号窯で生産されたものであると考えられ、被葬者と須恵器生産とに何らかの関係があったであろうことを思わせる。

石室は「三味線胴張り」と呼ばれる石室の最大幅が石室中央付近にあり、その前後が狭くなるものである。この種の石室は本古墳群中第1号墳を除いたすべてにみられる。またこの種の石室は福岡県の朝倉、八女地方に多くみられ一部大分県日田地方にもみられる。これらの三味線胴張りを一括して呼称される石室も仔細にみると、大きく2つに分類できるようなのである。石室の平面形に外接する線で作られる四角形の形がそれで前後に長い長方形のものと正方形(左右に幾分長いものも含む)のものに二分出来る。前者は更に最大幅が石室中央付近にあるものと、奥壁部にあり玄門部の最も狭いものに二分出来る。後者はほとんど最大幅は石室中央付近にあり、奥壁と玄門部の幅は等しい。この種の石室をもつ古墳は後期後半からみられるものであり、従って群を形成するものが多い。牛焼谷古墳群の石室を詳細にみていくと同じⅡ類でも隅丸方形的な2、5号墳と円形的な3、4号墳とに分類できる。これらの古墳が距離的に近い関係にあるのも興味あることである。(井上 和夫)

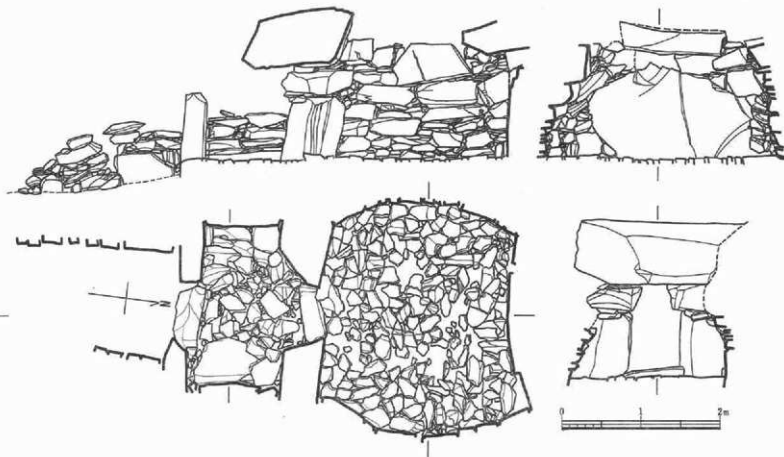
Ⅳ 第3号古墳

古墳の現状

道路に接した低い位置にある本古墳は、かつて盗掘を蒙っている。墳丘を削平して天井石を運び去っている。したがって発掘前には一部のこされた天井石の上面がわずかに露出する程度で、外観から石室の方向、所在範囲を推定することはできなかった。羨門近くで切断された道路の切通しに須恵器片などが発見されて、ようやく古墳の存在が注意にあがったのであった。

石室の構造(図版第二七～二九・第28図)

道路の切通しに羨門を開く複室構造の横穴式石室古墳である。主軸方位N5°Wで南側に開口する。等高線に直交するように石室主軸を配し、81～83mのあたりを占めている。石室の全長6.3mで、羨道、前室、後室の三区から成り、用材には近傍に多い緑色結晶片岩をもって構成している。石室各区の大きさをまとめれば次表のようになる(単位、cm)。



第28圖 牛焼谷第3号古墳石室実測圖

		長 　　さ	巾	高 　　さ	備 　　考
後	室	230	290～220	150(+)	左右壁胴張り、床石敷
前	室	120	196	90(+)	長方形プラン、床石敷
羨	道	210	130	110(+)	閉塞石積み、東壁破壊

後室は奥壁に高さ1m強の一枚石を立て、その上に石材を平積みするが、天井に接する石材は奥壁よりも60cmばかりせり出させていて、箱形石室の構成に屢々みる工法を示している。左右両壁は小形の石材を組合せているためにいわゆる胴張りあるプランのとり方を示しており、ために後室のプランはいわゆる「三味線胴張り」形を呈している。壁面の石積みには腰石の使用がなく、床面から平積みの技法がとられているが、下方の石材は小さく、上方に積みあげるにつれて大きな石材を使用しているのは特異というべきであろう。工法は完全な煉瓦積みでなく、積みあげた石材の二段乃至三段にわたって目路を通す重箱積みの技法が一部に併用されている。しかも壁面は積み上げるにしたがって室内にせり出させてゆく工法がみられるので、全体として内傾する状態がみられる。したがって天井石をのせる部分の空間平面は小さくなり、おそらく一枚乃至二枚の天井石を構築したのであると思われる。床面には割石を敷きつめている。

前室は左右に長い長方形プランを呈し、複室構造の形成過程からみて、古式の前室に位置づけられる特徴を示している。壁面の石積みは西壁では、割石を床面から平積みしてやはい腰石の使用がない。ただ東壁には腰石的な使用がみられて両壁の相違が注意をひく。また石積みの技法、壁面の傾斜などには後室のそれと共通した特徴をみることができる。床面に敷石をすることも後室と同じであるが、左右両壁寄りの石材は大きなものを使用し、中央部に小さい石を使用していることに気付く。壁面と敷石の配置状況からみて、室の周辺から中央へと敷いてゆき、中央部で調整した手順を推考することができる。石室を三分する境界には袖石を左右に立て、その間におさまるように隅石を据えている。

羨道は床面が石室の床面より10cmばかり低く、入口にむかってさらに徐々に下がっている。壁面の石積みは前室寄りに腰石の使用がみられるが、全体に平積みしており、石室にくらべて一般に工法が粗雑である。石積みが必ずしも密着しておらず、土壁が露呈しているところも少くない。とくに東壁の前方は破壊しており、床面の敷石なども認められない。この部分は元来天井などの構築はなかったと思われるが、床面に攪乱された状態で割石を平積みして閉塞されていた名残りがみられた。このような閉塞状態は前回（調査報告Ⅲ）に報告した塚ノ谷古墳や本古墳群中の第5号墳などにみることができる。

遺物の出土状態（図版第三〇）

遺物は後室内床面や羨道などの石室内と羨道西側の封土中から発見されている。本古墳は本塚石室の高さの大半を地表下に築造し、したがって地上に認められる盛土部分はわずかであったと思われるが、石室外の遺物はその封土裾部に一括して埋納されたものであった。しかしながらこれら外部発見の遺物は須恵器、土師器、馬具におよんでいるものの、土器類はすべて破砕している点からみると、

いわゆる副葬品としてよりも、葬儀に伴う祭祀にあてられたものを一括埋葬したのではないかと考えられる可能性がつよいであろう。後室床面で発見された遺物は左右両壁寄りに金環、ガラス玉などが発見されたが、本来の位置というよりは攪乱された感がつよく、盗掘による取りのこしかと思われる。

遺物 (第29～31図)

A. 石室内の遺物

金環 2 (第29図)

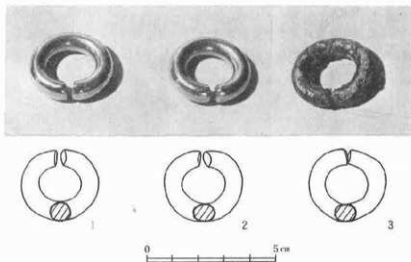
径 3 cm の金環で金色の保存きわめてよく、大きさからみても本来一対をなしたものであろう。

銀環 1 (第29図)

同じく径 3 cm であるが、風化が著しく銀箔の剝離も目だち保存はよくない。

丸玉 1

浅緑色のガラス製丸玉が発見されていたが、保管後に惜しくも散逸した。(小田富士雄)



第 29 図 牛嶋谷第 3 号古墳出土環 (1・2 金環、3 銀環)

B. 封土中の遺物

第 3 号墳の墳丘裾部は一段低い農道の拡幅によって一部を削られ、現在道路の法面にある。第 3 号墳が古墳と知られる以前にこの法面の一部に須恵器破片を包含するところがあって、当初はまとまった出土状態ではなかったこともあり遺構の性格もわからないまま採集していた。その後、浅掘によって古墳を確認し、採集した部分が羨道部の西側墳裾に当たることがわかったのは本調査での発掘によってであった。したがって、出土の平面的位置関係については確かではない。しかし採集時の状況からみると、使用後の須恵器および土師器をそのまま埋置したというよりも、破砕片をこの部分に一括して埋めたとみるのが適当であろう。

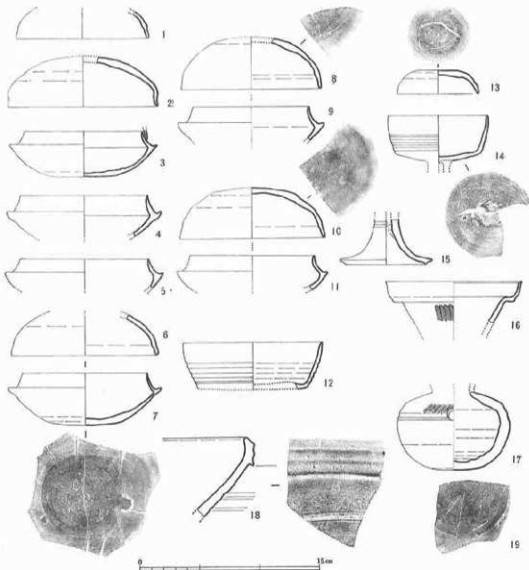
このことは破片がかなり小さいこと、接合によってほぼ原形を復することのできる器が 1 個体もないことによってわかるが、さらに一般に割れにくい廻の球形部までが小破片となっていたことによって裏づけられよう。廻は口縁の一部と胴部破片の数個を認めたのみで出土は少ない。土師器は細片の

うえに磨滅しており、相当量出土したにもかかわらず復元できるものはなかった。わずかに器種の推定できるものが数点あったにとどまる。

土器類に混在して鍍金具および尾錠が出土した。これらは一部欠損はあっても土器類のように故意に破砕したとみられるような形跡はない。

土器と馬具のこのあり方からみると、使用後の土器類の一括埋置の場所に被葬者への副葬品とみられる馬具の一部を置いたということになる。しかし馬具の他の部分については石室内においても発見されていないから、搬入し忘れた副葬品を置いたというようなものでなく、もともとここに置かれたかあるいはある時期に内部が片付けられてこの場所に置かれたものとみられる。

須恵器（第30図）



第 30 図 牛焼谷第 3 号古墳封土出土土器実照図（15は土師器、他は須恵器）

環・小形高環・甕・甕・蓋・提瓶などが出土している。このうち提瓶は図示することができない。

環は蓋をとまう形式のもの(1~11)、蓋のない平底のもの(12)との二種類ある。前者の蓋は外部肩のところには顕著な段はつけず、口縁にも古式の特徴は残らない。ただ口縁内側1cmほどのところをわずかに肥厚させるくせを持っている。外形は丸く仕上げへう削りは割合丁寧に行なわれる。径は12cm前後をはかり比較的小形の製品である。身の蓋受け立ち上りはやや傾斜するが高く、1~1.5cmほどある特徴的な形像を示す。へう記号その他の特徴によって蓋とのセットがわかるものもある。胎土はいずれも精良である。一方、後者の蓋をもたない環は、径11.6cmあり底部を欠失しているが平底をなす。やや内彎して斜めに延びた立ち上りには下半に5条の沈線が施される。別の個体ではこの沈線が螺旋形に入れられたものもある。

小形高環は環部(14)と脚の一部がある。口径約8cmあり下半部に沈線が施されて、底部はカキメ調整される。底部にHのへう記号がある。薄手で作くりはよい。

甕は口頸部(16)と球部(17)が出土した。おそらく1個体であろう。口縁部は頸部から段をつけて一度大きく径を拡大し端部にいたる。端部は斜めに鋭い仕上げで径11.4cmある。整美な波状文のつけられた頸部は急速にすばまった形態をとり球部との接合部では3.5cmほどになる。球部は細かく割れていたが接合の結果はほぼ形を知ることができた。肩部に2条沈線を入れその上を篩状突起によって装飾している。上半部はカキメ整形、下半はへう削りである。短い平行線5本のへう記号をもつ。

この他、甕の蓋とみられる(13)や蓋片(18)がある。

土師器

量的にはかなり出土したが、細片になっている上に磨滅が著しく復原は困難であった。形のわかるものとしては小形高環および直口甕らしきものがあったが、図示し得たのは小形高環の脚部(15)のみにすぎない。

小形高環脚部は作りにおいて須恵器の製品とまったく変るところがなく、ただ黄茶色を呈し、水洗いによっても容易に磨滅するほど柔らかい焼成である。脚部の径7.8cmあり中ほどに2条の沈線がめぐる。これが須恵器の焼成不良品でないことは、須恵器の出土量に匹敵するくらい多量のまったく土師質の土器片があること、須恵器が灰色堅緻な焼成であるのに対しこれらとの中間的焼成のもの、すなわちそれだけを抽出した場合に、どちらに入れるか迷うような破片が全然含まれていないことによって明らかである。したがってこの高環などは、本来須恵器として成形したものを途中で転用したことも考えられよう。

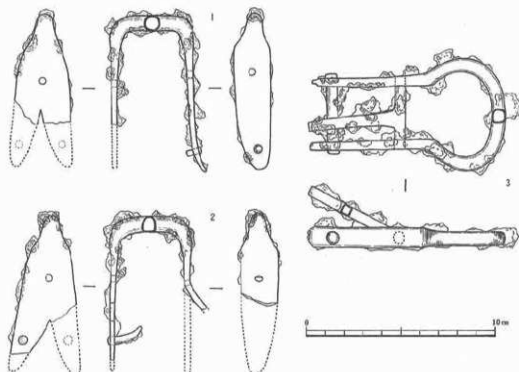
馬具(第31図)

木製輪鍔にとまう金具および尾錠が発見された。

鍔金具(1・2)は1対あって、鍔の木製部の上端について力革に連絡させるものである。力革にとりつく部分は断面円形で両端を扁平に仕上げてコ字状に曲げたもので、扁平部の片方が広くつくられ二股に分かれているところに特徴がある。両面とも上下に釘穴をもつ。この二股になった鍔が鍔を置いた時外側に見えて装飾の効果をもつものであろう。長さ約8.5cm。

尾錠(3)は長さ10.3cmをはかる大形のもので、刺金が反対側に鑲着してしまっている。平行した基部に槽を通す部分がC字状につくられる。

(真野和夫)



第31図 牛焼谷第3号古墳封土出土鉄器実測図

小 結

本古墳は古式の複室構成の特徴を備えた横穴式石室で、基本的には箱形石室の系統に属するものであるが、使用石材の制約によるものか、後室の左右壁は胴張り構築の技法が採用されている。石積み
の工法には煉瓦積みと一部に重箱積みの工法がみられる。遺物では特に石室外に一括埋納されたものに須恵器、土師器、馬具などの時期を明確にできる資料があることは有力な手がかりを与えてくれる。

須恵器にみる蓋杯、杯、高杯、甕などの形態的特徴、また施刻記号のいわゆる窯印の種類などを検討して、これらが塚ノ谷第4号窯跡(調査報告I)の生産須恵器と一致することが確認されたことで、その需給関係が明らかにされた。かくして本古墳の年代が須恵器第ⅢB期に比定されるものであることがさだまった。さらにこれまでに発見された資料によるかぎり、特に追葬などの事実を指摘できるほどの確証はない。

(小田富士雄)

V 第4号古墳

古墳の現状

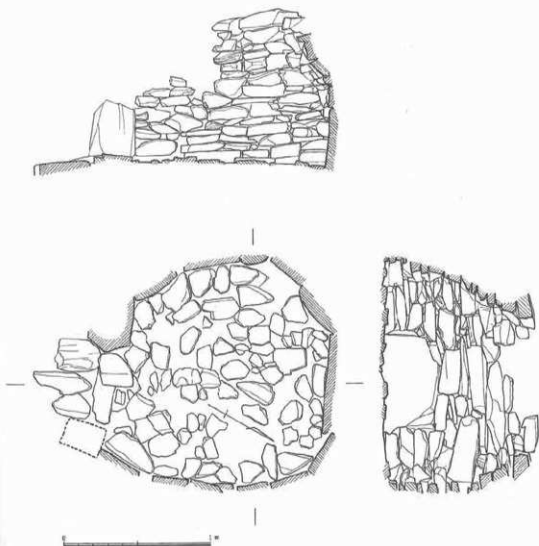
4号墳は3号墳の東にあたり、谷で区切られた南斜面の東端近くにある。古墳群のうちでは最も東に位置している。古墳はかろうじて確認できる程度の小規模な盛土をもつ円墳であるが、以前、林道

の開鑿工事によって墳丘の一部が削られ、崖面に玄門部の石材をのぞかせていたため発見された。この石室はかつて盗掘を受けたため天井石はなく、遺物も何ら検出されなかった。

石室の構造 (図版第三一・第32図)

石室は胴張りの玄室をもつ横穴式石室で、主軸の方向を $N29.5^{\circ}W$ にとる。玄門部より前の部分は墳丘と共に削られているため、本来の石室構造を知りえないが、羨道部はもともとなかった可能性もある。天井部は発掘当時すでになかったが、玄室奥壁付近の壁面はかなり保存状態が良い。

玄室は長さ $1.43m$ 、中心部の幅 $1.51m$ を計り、幅がやや大きい。羨道部との境界には袖石を立て隅石を置いているが、玄室の東側壁が若干長いために両袖石は多少くい違っている。両袖石の幅は約 $50cm$ である。玄室床面には全面に敷石があるが、隅石の前面では若干大きな石が敷かれている。



第32図 牛焼谷第4号古墳石室実測図

玄室奥壁はやや大型の板石を立てて腰石とし、その上に割石を平積みしている。両側壁は腰石を使用せず小型の割石で構成しているが、一部には丸石も使用している。石材はほとんどが長さ20~40cm、幅10cm内外の板石であり、奥壁および袖以外に大きな石材は使用されていない。壁の積石はやや雑である。石材は床、壁とも片晶片岩を使用している。玄室の三壁は小型の石材を使用しているためか持送りが著しく、袖石も低いことから考えると天井はもと穹窿状をしていたものと思われる。

小 結

4号墳からは遺物が出土しなかったため、年代の決定資料は石室構造のみである。4号墳の玄室は2号、5号墳のように隅丸方形状ではなく、3号墳と共にいわゆる三味線胴張りタイプに属すると考えることができる。ただ、3号墳にくらべて奥壁の腰石は相対的に小さく、平面プランもややいびつであるが、これらのことが時期差によるものかは明らかでない。一般にこの種の石室は6世紀中葉に出現したとされている⁷⁾。また、牛焼谷古墳群は1号、2号、3号墳は6世紀後半に築造されており、4号墳も2号墳とほぼ同様な石室構造をもつことから、ほぼ同時期とすることができよう。

(渡部 明夫)

註1) 渡辺正氣ほか「弘化谷古墳」日本歴史 276号 1971

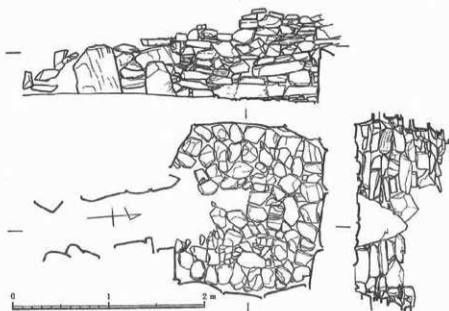
Ⅶ 第5号古墳

古墳の現状

本古墳は標高90mあたりにあり、2号墳と共に本古墳群中では高位置を占めている。単室の横口式石室で天井部の石材は既に取り去られており、発掘を進めるにつれて破壊が玄室入口附近の敷石にまでおよんでいることがわかったが、羨道部は当初のままの状態で保存されていた。本古墳は斜面を利用してつくったもので石室は地表下に営造され封土はわずかに盛り上げた程度のものである。規模は4号墳につぐ小さな円墳である。

石室の構造(図版第三二・三三・第33・34図)

石室は牛焼谷の東斜面に所在する古墳群幅では高位置にあり、等高線に平行して構築された単室の横口石室である。石室の主軸はN2°Wで南に開口する。羨道と玄室の境界には左右に袖石を立てている。玄室の長さ15m、幅1.7m、羨道の長さ1.5m、幅0.6mである。玄室は奥壁の中央部に幅0.56m、高さ4.8mの三角形の石を立てて腰石としているが、これは奥壁を埋めるのには不足するのでその両側は扁平に近い割石を平積みにして構築している。また、両側壁は腰石を用いず最下段より扁平な割石を持ち送りに平積みにし、現在では天井部を欠いているがドーム状の構造に仕上げられていたようである。石室の構築には煉瓦積み技法が用いられ、平面は方形に近い、いわゆる「三味線胴張り」状をなすが、上部では円形に近い形状をなしている。敷石は玄室の入口近くで一部欠くがこれは後世の擾乱によるもので、もともとは玄室全面に敷かれていたようである。遺物は玄室の床面

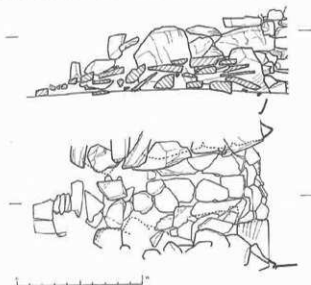


第33図 牛焼谷第5号墳石室実測図

より10cm上部で須恵器の坏蓋の破片が1個出土したのみである。

羨道部の閉鎖状況

羨道部は割石を一面敷きならべた状態で両袖石より羨道全部をふさぎ1.8mとその外部にまでおよんでいた。積石の高さは袖石の所で30cmであるが羨道の外部に向って高さを減少している。割石を平積みにし、間隙を土砂で埋めるという技法で羨道を閉鎖している。



第34図 牛焼谷第5号古墳羨道閉塞状態実測図

遺 物

環蓋全体の半分にも満たない破片である。復原口径 11cm で頂部には円錐台状のつまみがつくものと思われる。蓋受けの部分は基部より欠失しているが、復原すると口縁部と同じ高さか張が出る位となる。色沢は鼠色を呈し胎土良質、焼成堅緻である。



第 35 図 牛焼谷第 5 号古墳出土遺物実測図

小 結

本古墳の石室構築技法は、この地方に多く産出する絹雲母片岩を利用しているため扁平な割石を平積みにし、平面形は胴張りのある方形を呈する筑後地方通有の「三味線胴張り」式と称するものであった。

羨道部の閉鎖は扁平な割石を積み上げ間隙に土砂を埋めるという方法で羨道全体を塞ぎ天井石は架してなかったようである。これは塚ノ谷古墳に見られたと同様な手法を用いていた⁹⁾。

遺物は玄室内よりただ 1 片須恵器の環蓋が出土したのみであった。これは第 V 期特徴を備えており、八女窯址群中においては、塚ノ谷 1 号窯址に類品を求めることが出来る⁹⁾。従って本古墳の被葬者の埋葬年代の下限は 7 世紀前半代に比定して大過なきものと思う。(黒野 肇)

註 1) 八女古窯跡群調査報告 III

9) 八女古窯跡群調査報告 I

Ⅶ 小 結

今回調査された牛焼谷古墳群の 5 基は、いずれも天井石を持ち去られ、急な山の斜面に營造された小古墳であった。しかしながら石室構築においては、古式の複室構成を示す横穴式石室(第 1、3 号墳)と、筑後地方に屢々みられる胴張りあるプランをもった横穴式石室(第 2、4、5 号墳)があらわれた。なかでも第 1 号古墳は典型的な箱形石室の構造をもった、しかも古墳群中で最も規模の大きなものであった。第 3 号墳は箱形石室に胴張りプランをとり入れて、両者の折衷的方向を示している。また第 4 号、第 5 号の両古墳は稀にみる平面の小さな石室古墳であった。

これら古墳群の調査で特に出土品で注目されたのは、窯跡調査との関連において、出土須恵器の需給関係の検討であった。須恵器の出土したのは第 1 号、第 2 号、第 3 号の三古墳である。このうち第 1 号古墳出土の小形高環(第Ⅲ B 期)は塚ノ谷第 4 号窯跡、また腰宝珠銀みつき蓋(第 V 期)は塚ノ谷第 1 号窯跡に求めることができるので、追葬が行なわれたことも推測できる。

次に第 2 号古墳出土の小形高環、蓋付はともに塚ノ谷第 4 号窯跡のものと近似した特徴をもっていて第Ⅲ B 期に比定できるが、高環の形態にやや一致を欠くところあり、また環の口径も小さく、詳細

な検討を行なっていくと、塚ノ谷第4号窯跡の製品と断定するには疑問がのこる。むしろ三助山窯跡群の出土品のなかにより多くの可能性が求められるようである。この窯跡群は十分な調査を経ないままに湮滅し、我々が実現しえた資料も任意な蒐集によるものであるために、もう一つ断定できない憾みがある。さらに第3号古墳出土の蓋坏、坏、高坏、甕などは塚ノ谷第4号窯跡に製品を求めることができた。

このように塚ノ谷古墳群に埋納された須恵器群は塚ノ谷窯跡群、さらには三助山窯跡群に供給源を仰いだものであることが明らかになった。本古墳群の上限はこれによって須恵器第ⅢB期までさかのぼることができ、第1号古墳の場合には第Ⅶ期にさらに追葬が行なわれたであろうことも推測できた。6世紀後半代に築造され、一部は7世紀前半代まで使用されたことになる。 (小田富士雄)

第5章 乗場古墳の調査

研究小史

乗場古墳はすでに江戸時代より古塚として知られており、矢野一貞の『筑後将士軍談』巻第52墳墓碑塔部に「吉田村奈良山之園」として紹介されている。同図によれば周濠をめぐらした平面図と側面図が描かれていて

岩戸山ノ寅ノ方三四町ニアリ岩戸山ヨリハ稍小也

周囲ニ堀ノ形略々残レ共全カラズ

是及朝田ノ塚等真ノ山陵造也此ノ類モ尙有之

などの註記がある。さらに後円部の図中に

古甕甚多シ石人ノ残骸モアリ

という注目すべき記載がみられる。規模については「直立西ハ二間」、「三方ハ直立二間二分五厘」、「周囲百間」、平面図主軸長は「二十間五分」などの数値が記載されている。しかしながら石室については図示も記載もないところからみると、当時はまだ開口していなかったのであろう。その後、大正11年3月には後円部石室の壁面に赤、白、緑の三色を以て文様を描かれているところから国指定をうけた。また、東京国立博物館には、本古墳出土遺物が保管されていることなども参考して明治から大正にかけての頃に開口したことが知られる。

乗場古墳は福岡県下における石室内に装飾ある古墳として、大正14年3月に発刊された『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第一輯に概略の紹介があるが、以後は第二次大戦後までそれ以上の調査や紹介もなかった。

昭和27年刊の斉藤忠著『装飾古墳の研究』44頁に石室実測図が掲載されているが、壁面は西壁と奥壁を掲げており装飾の記入はない。その後、昭和30年代後半から活潑になった装飾古墳ブームと併行して、いくつかの装飾古墳に関する出版があるが、小林行雄編『装飾古墳』（昭和39年）、斉藤忠編『古墳壁画』（日本原始美術5・昭和40年）には乗場古墳の解説がおさめられている。しかしこれらにも石室の実測図や装飾文様についての全貌についての調査は示されていない。

一方、岩戸山古墳に代表される八女古墳群についての関心は、古代史上にあらわれる筑紫国造磐井の研究とも関連して高まりつつあるが、筆者らは昭和44年刊の『塚ノ谷竊跡群』（八女古竊跡群調査報告1）で八女古墳群の詳細な分布地図を公表した。さらに同書ではじめて乗場古墳出土の須恵器実測図を掲げて、後期古墳の編年研究に有力な手がかりを提供した。そこで乗場古墳が岩戸山古墳にすぐつづく時期に比定できることが明らかになった。この成果に拠って乗場古墳が磐井の子孫の墳墓に比定できであろうという推察も加えられるようになった¹⁾。乗場古墳は大正11年3月内務大臣指定史蹟となり、現在も国指定史蹟として保存されている。

（小田富士雄）

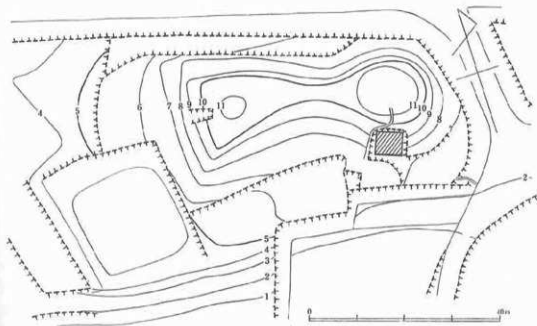
古墳の現状

久留米から八女市福島に通ずる国道3号線が八女丘陵を横断するところ、国道より東に120mばかり東側の丘陵上に位置している。国道をはさんで西側にある岩戸山古墳からは東方300mほどにあたる。現在国道から古墳の北側に隣接して県立福島高校への通学道路が設けられたために、乗場古墳を辛うじてのこすまでに丘陵が切下げられた。また西側、南側も宅地化のために近年削りとられて古墳の部分だけが周囲絶壁をなして佇立している。乗場古墳はもと周濠をめぐらしていたが昭和30年代に周囲を削平した際に削りとられてしまった。当時立会った岩崎光氏の話によると周堤上に円筒埴輪の並んでいる状況が観察されたという。国指定の範囲が古墳の墳丘部分であったために、周堤や周濠は地形測量を経ないままに湮滅し去るという不幸を招いたのであった。

古墳は主軸方位を東西(W10度N)におき、前方部を西にむけている。東西に細長くのびる八女丘陵上の前方後円墳がいずれも東西方向をとるのは、この地形条件に規制されているからであろう。墳丘の全長約70m、後円部径約30m、前方部幅約35m、後円部高さ5m余り、前方部高さはやや低い。南側くびれ部が大きく湾入しているのは二次的変形であろう。墳丘全面灌木生い茂っていて詳細をきわめるのはむずかしい現状である。

石室は後円部南側に開口しているが、羨門付近は完全にのこっているようではない。昭和44年に入口の保存工事を行なった際に羨門付近を掘り下げて天井石かと思われる大石が落下した状態で発見された。この付近の墳丘切断面には黒土と赤土を交互に盛った状態が観察できる。

(小田富士雄)



第36図 乗場古墳外形実測図

石室の構造 (図版第三四～三九・第37・38図)

全長約10mの複室構造の横穴式石室で、ほぼ南向きに開口する。主軸の方向はS16°W。石室各部の規模は表に示すとおりである(単位cm)。

	長さ	奥室	入口室	高さ
後室	330	272	242	320
袖石部	(添え石)	81	115	178
前室	170	230	210	250
袖石部	(添え石)	—	65	180
羨道	350 (併)	157	160	170

平面形でみると石室は羨道に対して、後室および前室の主軸線がやや東寄りに方向を振っている。この傾向は、とくに左壁において顕著である。しかも後室左壁の延長線が前室左壁に一致している。これに対して右壁では後室がほぼ左壁に平行して構築されるが、前室では幅を減じてさらに羨道壁に平行となっている。したがって前室は約20cmほど幅を減少して、その結果前室は横長というよりむしろ方形に近い形態を示している。これは前室・後室の間の袖石の前面に置かれた添え石が左右で厚みが違うこともあざうっている。後室・前室とも大形腰石を奥に据えて、入口方向の長さの不足を小形の石で補っている点は変りがない。

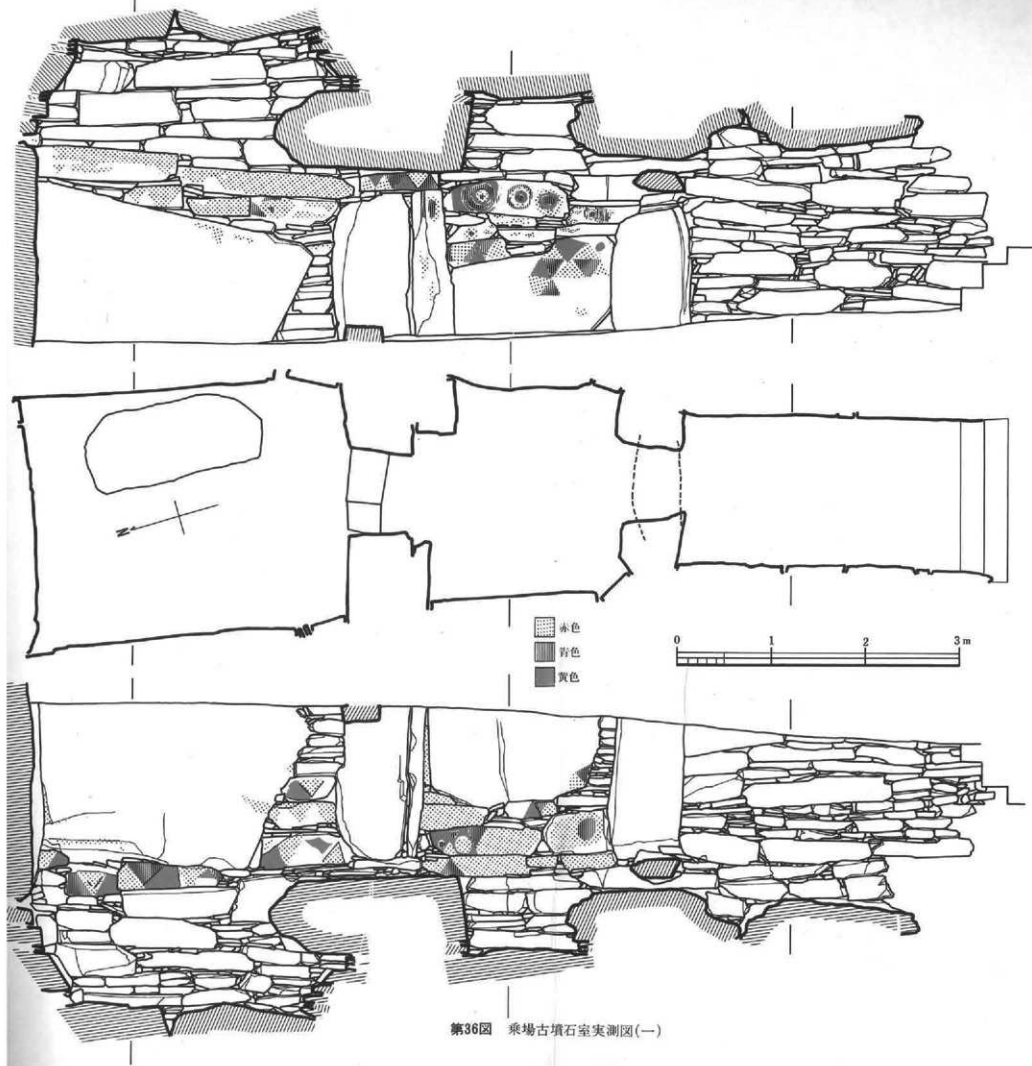
羨道部は、前室の左右両壁からそれぞれ約15cmせばめてほとんど平行にいま3.5mを測ることができる。石室内部へおりのコンクリートの階段によって隠されているが本来はもう少し長かったらしい。前・後室の主軸線に対して方向が多少振れることは先に述べた。羨道壁は前室右壁にほぼ平行して構築されている。

石室縦断面における観察では、奥室・前室ともに巨大な腰石をもち、使用石材はこの上に平積みされた小形の石材・天井石同様この地方に多い結晶片岩であるが腰石および袖石はこれを立てて使用している。また奥壁腰石のみは袖石上に架された天井の高さに一致させている。腰石上にはやや小形の石材でもって平積みされ、間隙も丁寧にうめられる。腰石の高さが天井の高さに対して $\frac{1}{2}$ 以上を占めるため縦断面での後室前後壁の持送りはきわめて少い。前・後両室の壁に比べると羨道壁は腰石をもち、平積みされた石材も小形のものの占める割合が多くなって簡略化されている。天井の構築に際して前室部を羨道部天井より一段高くして、側面視からも室としての意識を強く表わしているのは、平面視における前室の定形化に対応するものである。

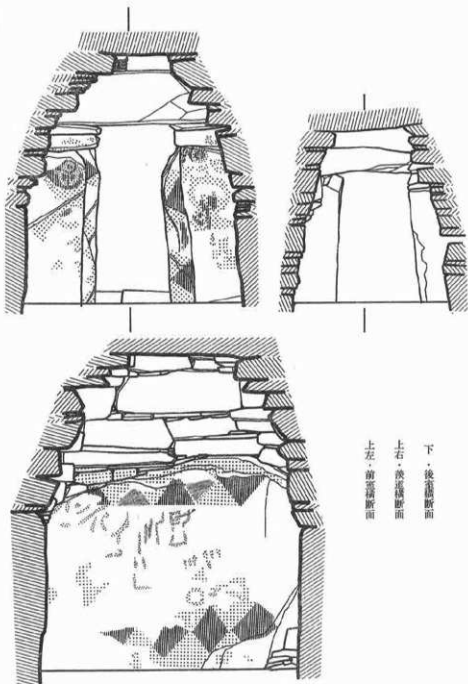
横断面では、左右壁の持送りがかなりみられ、後室および前室において60～80cm、羨道部において約40cmを測ることができる。

一方後室では、奥壁と左右の壁との間で両壁にわたしたいわゆる力石が使用されるのが一般的であるが、ここでは3～4段のように架された石材があるにもかかわらずそれ以上の部分においてまた直角に合わされており、力石としての機能はきわめてうすい。したがって全体として箱形石室の形態をとる。

石室の構造上特筆すべきは、後室入口の袖石前面の添え石と前室袖石上の添え石である。添え石は袖



第36図 泉場古墳石室実測図(一)



下・後室橫斷面
上右・後室橫斷面
上左・前室橫斷面

0 1 2m

第38圖 雙廟古墳石室實測圖(分)

石の幅より若干狭く、したがって、前室側から見たとき袖石が二段に奥行きをもって見え、しかもそのどちらにも装飾がなされてより荘厳さを増している。単に天井の重量を支えるためだけの補強的な使用にとどまらずこのような意図のもとに工夫されたとみられる。

次に楣石は袖石上にわたしてさらに天井石との間に窓状に空間をつくり出したものである。この古墳では楣石を構築するために袖石上に重ねられた壁石を挟み込んでおり、天井石との間に約20cm程度の空間がある(図版三五)。この二つの構造は同じ八女古墳群のなかにある童男山古墳³⁾においてもみられ、両者の関連が考えられる。ただ童男山古墳の場合、後室入口の袖石に以上の二つの構造が集中しており乗場古墳の場合とやや異なっている。また楣石の使用は、同じく装飾古墳として著名な福岡県王塚古墳⁴⁾においてもみられる。ここでは楣石は後室入口に構築されている。王塚古墳では平面形において、前室がまだ室として完全に独立した構造に発達しておらず、天井を一段高くしているという縦断面の形態によって室の意識を認めうるにすぎない。すなわち前室はそのまま羨道を兼ねているのであって、複室構造としてはいまだ定形化しない以前の様相を示していると考えられている⁵⁾。また複室構造をもつ初期の横穴式石室として知られる熊本県・大塚古墳では、前室は横長の平面形をとり後室に対しきわめて付属的なとり扱いである。一方乗場古墳では、築造当初の平面計画からして前室・後室の側壁線をそろえたり、しかも前室にも装飾を行なうなど複室構造の定着した姿を示している。

このように乗場古墳は石室構造の変遷を辿る上からも重要な位置を占めるものであって、後述されるように遺物および石室内部にほどこされた装飾の年代観からして六世紀の中頃に比定される。

(真野 和夫)

装 飾 文 様 (第37・38図)

石室内壁面に装飾画がみられることは古くから知られており、大正14年刊の『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯には次のように紹介されている。

本墳の装飾は幾何形体の同心円、三角形等に過ぎざるも同種の形を規則正しく並列せるの特徴あり。則ち後室には三角形を四ケ及三ケ、前室には同心円三ケ若くは四ケ並列せるを見る。色彩は赤白線の三色を以て描かれたること稍眼識し得られしも、本古墳は岩戸山と共に観覧者の多かりし為著しく其色彩を變じて目下は之が識別に困難を感ずるに至れり。

その後、小林行雄編『装飾古墳』(1964)、齊藤忠編『古墳壁画』(日本原始美術5・1965)などにも紹介されたが、以上の紹介以上に出るものでない。すなわち壁画構成文様の単元が部分的にとりあげられている状況で、石室の構造との関連で壁画の全体構成が調査されることがないままに今日に至っているのである。著しい退色と電燈などを導入できる施設がなかったことが、壁画の調査をおくらせた大きな原因であつたらう。

壁画は前室と後室の両側壁と奥壁、さらに両室の境を区切る両袖石の正面と側面に彩色で描かれている。描かれた範囲は奥壁腰石の上端から二室境界の天井石下面を箱お高さより以下の——すなわち石室壁面の下半部である。彩色顔料は古くは赤・白・緑といわれているが、今回の調査で確かめられたのは赤・黄・青の三色であった。

前室の壁画は両側壁とも一枚石を立てて使用した高さ1mに達する腰石面に三色からなる左右方向

の連続三角文を描いている。この面の文様は退色非常に著しいために識別は容易ではないが、東壁の仔細な観察によっておそらく西段に重ねた連続三角文が壁面全体をうずめていたであろうことが推察できた。西壁ではわずかに左上隅にその残存を認めることができたが、本来は東壁と相対して同様に重ねられたであろうと考えられる公算が大きい。連続三角文はさらに腰石の上に平積みされた石材にまで一部およんでいる。東壁の平積み石壁面には、三色による同心円文3個を併列した状態、さらに同心円文に接して赤青二色の縦方向の連続三角文がみられる。このほかに赤色を石面全体に塗布したのではないかとと思われるところもみられる。この状態は西壁でとくに指摘することができる。西壁では赤・青による同心円文や三角形文が、本来黄色による全面地塗りを行なった上に描かれたのではないかとと思われるところがある。

後室に通ずる境界をなす両側袖石には正面観に赤青二色の文様がみられる。袖石は天井石を支えるには側面幅が小さすぎるためか、前室側にもう一枚づつ添え石を立てている。この添え石の正面観は奥の袖石のそれよりも幅がせまいために、添え石の内側に袖石がさらに縦長のはみ出してみえる結果となった。このはみ出し部に縦方向の連続三角文を描いて特殊な効果をあげている。さらに詳細に観察すると、連続する三角文の境界にはきわめて浅い線刻による図刻の企劃の痕跡がみられる。添え石の正面観上方には同心円文、蔽手状文があるが、そのほかに主題をなしたと思われる鬚状の図形がある。赤色の流失と退色で本来の図形を復原することができないのが惜しまれる。添え石と袖石の側面では東壁側がわずかにのこり、西壁側は不明である。添え石上部には長方形に青色を塗布した外郭を赤色で囲った図形があり、観を描いたのではないかとと思われる。袖石の上に架された平石の側面には赤・青・黄の連続三角文が描かれている。ここでも図形刻の線刻を見出すことができた。

後室に入ると、東西両側壁と奥壁の三面に壁面がみられる。東壁は一部に青色の三角文かと思われる痕跡があるが、腰石はほとんど彩色が退色してしまって不明である。腰石上に積まれた平石には赤色がほぼ全面に塗布されていたかと思われる。二色以上による塗り分けがあったかどうか確かめられなかった。西壁でも腰石面にはわずかに赤色塗料の痕跡を認めることはできるが、図形の有無を判定するにはあまりに退色が著しい。しかしながら腰石と袖石の間や腰石の上に積まれた平石には赤・青・黄色による連続三角文が描かれている。また三角文の境界に刻線を加えているのがここでも認められる。

奥壁も退色は著しいが、特に赤色の保存がよい部分があり、これを手がかりにしてある程度の復原が可能である。すなわち奥壁の上縁と下縁に連続三角文が左右にならび、中央部に赤色による形象画があるが、この部分の全貌は復原がむづかしい。上縁の三角文は三色を交互に使用して一段にならべている。下縁の三角文は赤・青二色で二段にならべ、上、下段から三角形の頂点で接するような内行する三角形の赤色で、またその間にできる方形区劃を青色で塗りわけている。この連続する三角文帯ではきまれた中央部には赤色で円文、三角文のほかに観かと思われる図形を併列していた形跡がある。奥壁の左端に赤色の三角文がのこっているところから推して、本来この中央部の形象画群を囲んで四週に左右、上下の連続三角文があったのではないかとと思われる。

今回の調査によって、本古墳の装飾文様は連続三角文様を主体としながら同心円文を一部に加え、奥室正面観には観などの形象図の併列を画面の中心にすえて、これを前室から望むときは、左右の袖

石(添え石)に翳かと思われる図形を配して、一段と荘嚴性を増してゆくような立体構成がなされている。さらに彩色の實際にあたっては、壁面全体に黄色の地色を塗り、その上に赤色や青色を重ねて図形を描く場合と、連続三角文様のように壁面に刻線による図形割を行なって構図をきめたのちに顔料を塗りわけてゆく場合のあることが知られた。このような彩色画の種類と技法は装飾古墳の変遷とも微妙なかかわりあいを示しているようである。これについては項を改めて後述するであろう。

(小田富士雄)

遺 物 (第39~42図)

乗場古墳の遺物は石室が開口したと思われる明治~大正年間に発見された遺物と、太平洋戦争終結後に開墓などの作業を通じて発見された遺物がある。前者には玉、馬具、須恵器などがあり、東京国立博物館に保管されている。後者には金銅製卑鳳式環頭柄頭と人物埴輪頭部があり、八女市県立福島高校に保管されている。このほか円筒埴輪片は採集者も多いが、ほぼ完形のもの一個が九州大学考古学資料室に蔵されている。このうち須恵器については調査報告Ⅰ(67頁)に実測図を紹介し、環頭柄頭については調査報告Ⅲ(34~35頁)に紹介するところがあった。

(小田富士雄)

玉 類 (1~3)

(1)はメノウ製の丸玉で淡紅色を呈し径約7mm。(2)はトンボ玉と呼ばれるもので緑色と黄色のしま模様がみられる。それぞれ1個ある。(3)は青色のガラス玉で2個出土している。またこのほかには黄紺色の丸玉が2個みられる。

耳 環 (4)

欠損部が多いが径約2.7cmほどの耳環である。金銅製で内部は空洞になっている。

帯金具 (5~8)

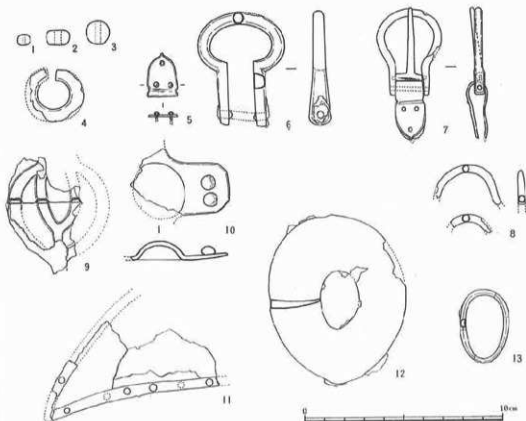
2個の尾錠および尾端金具が1個ある。いずれも金銅製。(6)は先端がC字形に大きく開いた形態で刺金を欠いており、刺金を通す軸は鉄製である。(7)は細手のつくりで先端はゆるやかに広がり、基部には刺金を支える軸と帯に連なる金具を通す軸とがある。(5)は尾端金具で、(7)の尾錠に付属する金具と対をなすものであろう。下端凹部分には青金具がはめられていたとみられる。(8)は尾錠の残欠と思われる。

馬 具 (9~11)

いずれも残欠であるが、古葉・辻金具および鞍とみられる金具がある。鉄地金銅製の製品である。このほかに鉄地金銅製の鏡板がある(第41図)。立間部分もいれて縦7.5cmを測る横広の心葉形を呈し、中央に銜を通す窓が開けられ引手が連続する。表面は十文字四区に画かれて、それぞれに金銅板を切り抜いた忍冬唐草文が区画に対してほぼ対称に配される。文様は刻線と小列点文によって縁どりされ流麗である。立間には面繋と連なる金具を有するがこれは尾錠(7)に付属する金具と同工である。

刀装具 (12~13)

鉄製鐔と青銅製青金具がある。鐔はほぼ楕円形で縁に近づくにつれ厚手のつくりとなっている。長径約8.5cm。黄金具は長径約3.7cmの倒卵形で上面を丸く整えている(以上、東京国立博物館蔵)。



第39図 乗場古墳出土遺物実例図

このほか本古墳出土と伝えられるものに金銅製環頭柄頭^りがある。環の横径7.5cm、縦径5cmを測る単鳳式環頭で文様はいく分定型化しつつある（八女市県立福島高校蔵）。

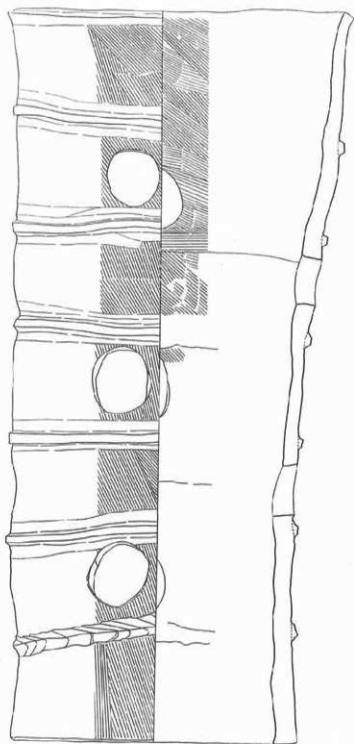
土 器

本古墳からは5個の須恵器が出土している。これらについてはすでに報告 I²において述べられたとおりである。三個の提籃ならびに大小二個の高杯がある。そしてこれら須恵器のもつ特徴は須恵器第三—A期に比定することが可能である。とくに、塚ノ谷第4号室において特徴的であった小形高杯²を有することは注目されるが、これは墳丘での採集資料であることを付言しておく。

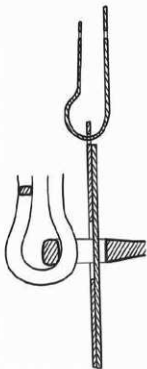
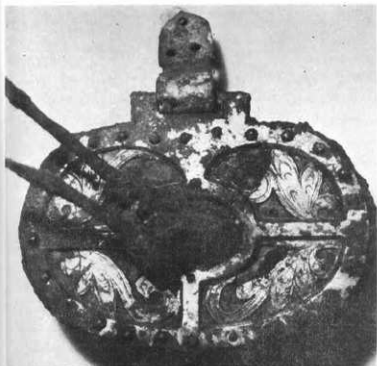
（真野 和夫）

形 象 埴 輪（第42図）

帽子を被った人物頭部がある。頭頂部が若干削られ、また首以下を欠失しているが、現存高17.7cmある。布あるいは革製の帽子を頭部にいただき、優しい風貌の男子像である。帽子は背面で結びあわせ、表面には刺突文による格子模様がいれられていて、縫合線を表現しているのであろうか。両側には写実的な耳の表現があるが、頭髪などの表現は省略されている。両眼と口、鼻の表現は緊張らずごく無難作に工作したのであるが、それがまた自然なおおらかな気風を全体にただよわせていて、人物埴輪中の優品に数えられるであろう。

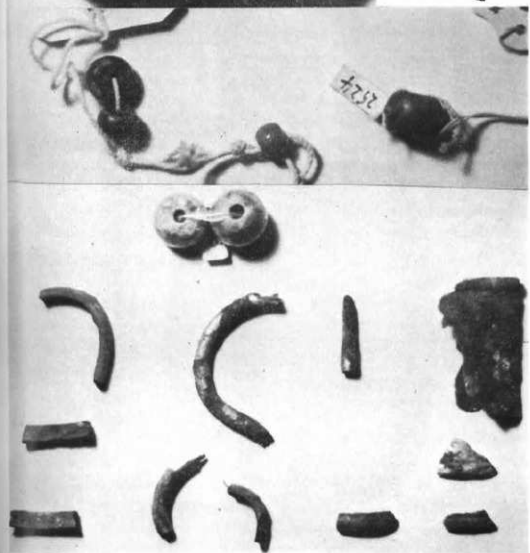


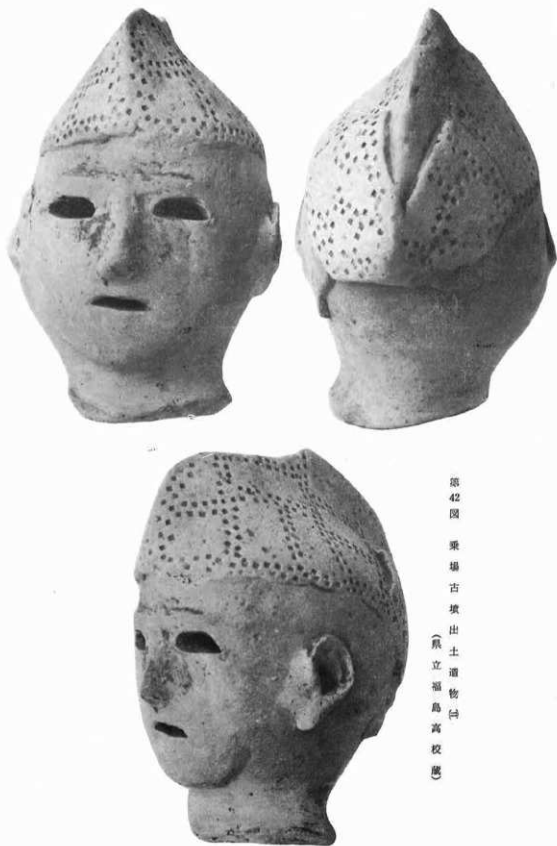
第40圖 兼場古墳出土円筒輪実測圖(1/4大)



第41図 乗場古墳出土遺物(一) (東京国立博物館蔵)

(上) 鏡板・(中) 玉類 (左よりガラス玉・メノウ玉・トシヤ玉)
(下) ガラス玉・尾鉾残欠・資金具





第42圖 乘場古墳出土遺物(同)
(國立福島高校蔵)

円筒埴輪 (第42図)

ほぼ完形品である。高さ79cm、底径30.8cm、上縁径37cmで、中ほどから上方に徐々に開く円筒形である。筒身の表面は高さをほぼ七等分するように貼付突帯が六ヶ所にめぐられ、断面コ字形に整形されている。最下段の突帯だけは貼付けるときに塋であらくなでつけたままで、その後の調整が行われていない。突帯によって七段に分けられた筒身には二段から六段まで径7cmの円形透孔が各々一対ずつつくられているが、その方向は各段毎に90°回転した方向をとっている。

表面および内面の上半部には粗い葎目調整の痕がみられる。内面下半部は横などで調整の仕上がりであるが、輪轆み成形の継ぎ目が一部にみられる。円筒樹立にあたっては、最下段の突帯仕上げがあらうこと、また透孔もみられないことなどから、最下段の突帯あたりまでの部分が土中に埋められたであろうと考えられる。円筒埴輪はほとんど上半分が欠失することが多いので、本例のように完形をとめていることはきわめて珍らしく、円筒埴輪の研究上貴重な資料であろう。(小田富士雄)

小 結

乗場古墳は九州における後期古墳の系列上では、岩戸山古墳について年代的にも接近した重要な位置を占めるものである。外形は定型化した前方後円形で、盛期或いは盛期をすぎた頃の姿を示している。石室も北九州の後期古墳に流行した複室構成をとるが、すでに定形化した時期の様相を示している。いわゆる“箱形石室”の構造をもち、石室四隅における力石の使用はほとんど認められない。前室入口の割石の構架と窓の施設、後室入口の両袖石と添え石の付設などに特異性をみることができる。

この古墳が従来注目されてきたのは、石室壁面を飾る彩色画の存在であった。今回の調査によって初めてその全貌と構成を知ることができた意義は大きい。二色以上の顔料を連続使用して三角形文様を葎盤目状に配するものを多く描いたものに福岡県王塚古墳(赤・黄・緑・黒)、佐賀県太田古墳(赤・黄・緑)があり、また石屋形に描いたものに熊本県大坊古墳(赤・青)、熊本県チブサン古墳(赤・白・青)、福岡県弘化谷古墳⁹⁾(赤・緑)、福岡県桜京古墳⁹⁾(赤・緑)などがある。このうちでも配色などの点で最も整ったものとして王塚古墳、チブサン古墳があげられる。後者には三角文と菱形文の連続組みあわせがみられる点で乗場古墳奥壁と関連して注目される。王塚、チブサンの古墳では全体に一色による地色を塗り、その上に他色を重ね塗ってゆく技法があり、また弘化谷、桜京の古墳では、刻線で図割りして彩色を塗りわけける技法がみられる。この両技法が乗場古墳で併用されていることは前述したとおりである。しかし連続三角文様の整美さ、配色の考慮などは王塚古墳にはおよばない。また額などの器財面や同心円文などが連続三角文様のなかに挿入された様子は太田古墳や弘化谷古墳の在り方ともあい近く、それがまた一方では連続三角文様の整美さをくずす結果をも招いている。このような装飾文様構成上の諸様相を総合してみると、王塚古墳をさかのぼらず、太田、弘化谷、桜京、チブサンなどとはほぼ同列の位置づけが推察されるのである。

ところで副葬品の明らかなもので共通したものに須恵器があるが、王塚、乗場、弘化谷三古墳についてみるといずれも第Ⅲ様式に含まれる。なかでも王塚、乗場は第ⅢA期に、弘化谷は第ⅢB期に比定される。また王塚と乗場の二古墳における馬具についてみても乗場のそれは後出様式として位置づけられる。かくして王塚古墳から乗場古墳への編年の序列は副葬品の上からも、装飾文様の推移の上

からも首肯することができるのである。以上を総合して乗堀古墳の築造は6世紀中頃から後半にかけての時点に推定することができよう。しかしながら追葬の有無については馬具の位置づけに若干の疑問をのこしている。

(小田富士雄)

註1) 小田富士雄「磐井の反乱」(『古代の日本』3)・昭和45年

2) 調査報告 Ⅲ

3) 柳原未治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚古墳」京都大学考古学研究報告第十五冊・昭和15年

4) 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史観第100輯・昭和43年

5) 文化財レポート37「弘化谷古墳」日本歴史276号・昭和46年

6) 昭和47年5月新発見の装飾古墳である。

第6章 八女古墳群発見の須恵器集成・続

八女古墳群から発見された須恵器資料は、すでに調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに搭載されて、古墳の編年上あるいは窯業との関連の上からも寄与するところが大きい。今回ここに掲げた資料はその後所在が明らかになったものであり、岩戸山古墳はじめ立山古墳群・豊福古墳群などからの出土資料である。これらは、県立福島高校、九州大学玉泉館に収蔵されている。(第43図)

1. 八女市豊福古墳群 (3・4)

坏(3)と高坏(4)がある。坏は口径11cm、高さ4.7cmあり底部が丸く盛りあがっている。口縁立ち上りは高くはぼ垂直に立ち上る。口縁部内側には段を有し古式の特徴を示す。底部外面はへう削りが行なわれ器壁の厚みを一定に整えている。へう削りの際についた砂粒の走行は器面に対して右まわりである。焼成は良好、灰色を呈す。(4)は高さ約15cmの無蓋高坏で、口径に比して脚部の広がりやや小さい。杯部の仕上げは非常に薄く、脚には上下に三対の長方形通しがある。これら二つの須恵器は、坏(3)がやや古い形態を示し須恵器編年の第ⅡB期に比定し得る。

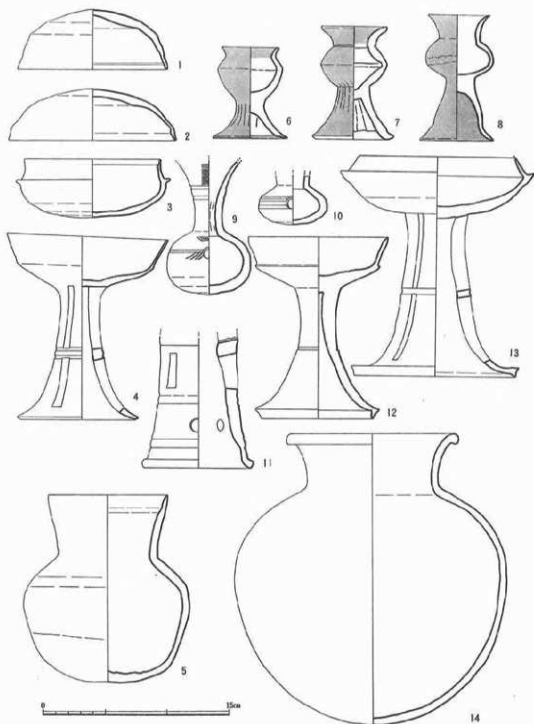
2. 八女市立山古墳群 (2・5)

蓋(2)と直口壺(5)がある。蓋は径13.4cmあり頂部よりなだらかに口縁へとつらなる。口縁部内側を帯状に肥厚させて口縁部整形の手法上の特徴がみられる。頂部はへう削りを行なう。砂粒の走行は左まわりである。胎土は精良、やや硬質の焼成。直口壺は高さ約15cm。口頸部は短かくやや開き気味である。胴部にはところどころ横方向の稜が残る。色調は褐色で焼成は良い。蓋は第ⅢB期に属し、直口壺もほぼ同時期とみられる。

3. 八女市吉田岩戸山古墳 (1・6～13)

須恵器および土師器(6～8)がある。蓋(1)は口径12cm、高さ4.8cmあり、肩にわずかに稜が残る。口縁部内側には小さい凹線がつく。高坏は蓋付きの形態のもの(13)と無蓋(12)との二種類がある。(13)は高さ17.8cm、杯部も大形でとくに太い脚は力強い安定感がある。口縁立ち上りは高いがやや傾斜がみられる。脚部通しは上下それぞれ三対行なわれる。第ⅢA期の特徴をもつ。

これに比べ(12)はやや小形で脚部の選しもない。杯部は底部と立ち上りとが(4)の場合ほどなだらかにつながらず、外部に突出部をつくる。脚端は下方への突出が顕著である。(9)・(10)の踵はやや



第 43 図 ハ女古墳群発見の土器実測図（6～8は土師器、他は須恵器）

大きさは異なるがどちらも矮小化した製品である。(9)は口頸部が長く延びまた径も細くなっているが、楕円波状文や刺突文などの装飾を加えている点で第ⅢB期より下降させることはできない。(11)は脚とみられるが上部の形態は明らかではない。三段に透しが行なわれており、上から長方形透しが同一線上に並ぶように二段に配され、最下部にこれと六分の一周ずれて円孔がある。透しはそれぞれ三対である。胎土に砂粒を含み、色調は淡赤褐色、焼成不良でもろい。土器器はほぼ同じ形態の小形脚付甕で高さは7.4~10.1cmある。(6)・(7)は外面および内側の一部が丹塗りされており(8)は黒漆塗りである。体部は横方向へう研磨、脚部は縦方向のへう研磨が行なわれている。(8)は器壁の厚みも薄く仕上げがよい。いずれも焼成は良好である。

岩戸山古墳発見の須恵器は今回掲げた資料では第Ⅲ期に属し、しかもさらに前後二つに区分することが可能である。すなわちこれらのなかでは有蓋高杯をより古式の様相を有する資料として分離し、他をやや降る時期に比定した。報告Ⅱで示された大形器台は、第ⅡB期の特徴を有する資料であり、この古墳の上限の年代を示すものである。したがってこれら時期の降る須恵器類の発見は、かなり長い時期にわたってこの古墳に土器類の供献が行なわれたことを物語るものである。

また、小形脚付甕は報告Ⅱにも一例みることができ、同様の形態のものが須恵器第Ⅲ期を中心に地域的にもかなり広く分布することは興味のあることである。

4. 八女市古墳群 (14)

本部落の北側後背には立山から延びた丘陵の端が低く続いている。ここに数基の古墳が存在することが知られている。短甲2領を出し横口式の特異な石室構造をもつ真浄寺2号墳はこのグループに属する。

(14)は高さ23.5cm、径13cmを測る甕で、胴部は最大径を中央やや高いところにもつほぼ球形に近い形態である。器壁の仕上げは一様で内面はすり消し、外面上端には縦方向叩き目の上をカキ目調整している。口頸部はゆるく外増して5cmほど立ち上り端部を丸く肥厚させる。波状文などの装飾は施されない。第Ⅲ期に属するものであろう。(真野和夫)

以上1~5・8・14は福岡県立福岡高校収蔵

7・9~13は九州大学教養部三泉館収蔵

第7章 八女古窯跡群の調査・総括

I 八女古窯跡群の構造と編年

八女古窯跡群の調査は昭和43年にはじまり、四ヶ年継続して昭和46年に及んだ。この間に調査した窯跡は次のとおりである。

塚ノ谷窯跡群	第1～4号窯跡	4基
牛焼谷窯跡		1基
中尾谷窯跡群	第1～3号窯跡	3基
管ノ谷窯跡群	第1～2号窯跡	2基
立山山窯跡群	第1～2号窯跡	2基

計12基の窯跡を発掘したが、このうち立山山窯跡群が埴輪生産窯であるほかは、すべて須恵器の生産窯であった。これら窯跡の規模、構造などをまとめれば次表のようになる。

	長さ (cm)	巾 (cm)	高さ (cm)	方位	傾斜	生産品
塚ノ谷1号	880	170	130	W16°N	38°	須恵器(V～IV A) 円面硯
2号	860	148	120	N55°E	38°	須恵器(VI B～C) 円面硯
3号	?	102	88(+)	N18°E	32°	須恵器(III B)
4号	1470	180	100	N40°W	22°	須恵器(III B)
牛焼谷	540	130	116	E15°N	40°	須恵器(VIC) 瓦
中尾谷1号	910(+)	226	130～70	N76°E	22°～36°	須恵器(III A)
2号	1270(+)	225	160～80	N82°W	28°	須恵器(III A)
3号	990(+)	190	160	N88°W	25°～32°	須恵器(III A)
管ノ谷1号	520	100	94	N30°E	22°	須恵器(VII) 瓦
2号	620	145	140	S70°W	42°	須恵器(VII)
立山山1号	670	190	165	N28°W	16°・5°	埴輪 { 円筒形 形象
2号	614	175	120	N27°W	13°～25°	埴輪 (円筒)

なかでも最終年時に調査した立山山窯跡は須恵器窯と同じ形態をとる埴輪窯として注目されるものであるが、改めて別項で考察をすることにして、本項では須恵器を生産した窯跡に限って考察することとする。

調査された須恵器生産窯跡10基についてみると、その年代は各窯跡で発見された須恵器の編年順で示される。これまでに発見された須恵器は第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ期に属するものである。筑後地方における須恵器の編年は、調査報告Ⅰにおいて当時調査した塚ノ谷窯跡群、牛焼谷窯跡を中心にして試みた

のであったが、その後の調査を積重ねて新資料を加えた昨今ではさらに補充できる状況となってきた。その成果については別項で詳述されているので、それらの成果をも援用して八女古窯跡群の編年序列を組むと次のようになる。

須恵器編年	III		IV	V	VI			VII
	A	B			A	B	C	
窯 跡 例	中尾谷 { 1号 2号 3号	塚ノ谷 { 3号 4号		塚ノ谷1号		塚ノ谷2号		菅ノ谷2号 牛焼谷・菅ノ谷1号

すなわち、6世紀中頃（第ⅢA期）にはじまり、8世紀代（第Ⅶ期）に及んでいる。窯跡群の操業期間は、中尾谷1～3号窯から塚ノ谷3・4号窯へと変遷する過程が6世紀代にあり、7世紀代には塚ノ谷1号窯→塚ノ谷2号窯→牛焼谷窯と時間的推移があった。さらに8世紀代には菅ノ谷窯跡群の操業があった。ここでも2号窯から1号窯へと重複しながらも推移がたどられる。そうして菅ノ谷窯跡群の活動を最後に八女古窯跡群の命脈は終わったのである。この間、八女古窯跡群の上限はついに須恵器第Ⅱ期にさかのぼる実例を発見するにいたらず、また第Ⅳ期はブランクのままとなった。今日八女地方で知られている窯跡はこのほかに三助山窯跡群、はずわ窯跡群があるが、蒐集資料による限り前者は第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ期、後者は第Ⅵ～Ⅶ期に比定されるものである。次に窯の構造についてみれば、第Ⅲ期と第Ⅴ期以降の相違は、古墳時代後期と歴史時代の相違として認識される点で重要であるが、調査報告Ⅰでこの問題をあつかったときには、第ⅢB期の実例として塚ノ谷第4号窯跡が知られたにすぎなかった。その後、中尾谷窯跡群の発見によって、第ⅢA期の実例を加えることとなった。この時期の窯構造は、全長が10m～15m程度で窯体の巾に比べて全長が長いので、細長い感じのプランとなり、床面の傾斜は22°から36°までである。なかでも塚ノ谷第4号窯跡は地下式であるが、一般にみられる地下式でなく、竪穴を穿って天井を構築したものであり、床面も貼り床であるなどの点で、やや特殊な例とすべきであろう。このような推測は中尾谷窯跡群の発見によって裏付けられることとなった。ここでは灰原だけ調査したもので加えると4基の窯の存在が確認されたが、いずれも第ⅢA期に属するものであった。そうして窯構築の順序が

第1・2号窯→第4号窯→第3号窯

とたどられて、立地も山腹から頂上へと移動してゆく傾向が知られた。

6世紀末頃に位置づけられる第Ⅳ期の窯跡は存在を確かめることができなかった。これまでに八女古窯跡群の分布調査を行なったところではこの時期の窯跡は存在しない。まだ将来に発見される可能性があるとも断言できないが、またこれまでの精査によって知られないところをみれば、本来八女市古窯跡群の範囲では第Ⅳ期の須恵器生産はなかったのではないかという可能性もある。もしそうであるならばこれ以前とこれ以後にあられる窯跡群の生産者集団は、その間に一時期中断現象を生じることとなるので同一系譜の人々であるのか、あるいは両者の間で系譜を異にするような交代があったのかという推察を生むことになる。ともかく、八女古窯跡群で第Ⅳ期の須恵器窯跡を欠いていることは、八女古墳群発見の須恵器の検討ともあわせて重要な問題を含んでいるようである。

7世紀代（第Ⅴ・Ⅵ期）から8世紀代（第Ⅶ期）に操業された窯跡は歴史時代の窯跡として6世紀

代の窯跡と対比できる。この時期には窯体の全長が10mをこえる窯はない。塚ノ谷第1号窯、第2号窯は第V期から第VIA～B期に属し、全長は9m弱、窯床の傾斜は38°である。ついで第VIC期に比定される牛焼谷窯跡は全長5.4m、床面傾斜40°を測り、にわかに全長が短くなる。窯巾、傾斜はさして変うないところからみると、窯の全長短縮はきわめて顕著な変化である。加えて立地が尾根近くの高所を占め、床面傾斜が大きいかとも、第III期の窯跡に対比して注意すべき変化である。このような傾向は8世紀代まで継承されたようで、管ノ谷第1号窯、第2号窯では全長5～6m、傾斜も40°をこえている（第1号窯は22°）。この時期には窯巾が小さくなるところに7世紀代との相異をみることができる。尾根近くの高所を占める立地はひきつがれている。結局7世紀から8世紀への推移は窯体の小形化という点に示されているといえよう。管ノ谷第1号窯における床面の緩傾斜は立地した地形の傾斜に併せられるであろう。立地の高所移動と床面の急傾斜に示される7～8世紀代の窯跡は谷をわたって吹きあげてくる風向を考慮して風力を強化することに起因する生産の自然的条件をよりよく利用するための改良であったのであろう。ただ地下式無段登り窯の形態は、八女古窯跡群の上限から終末までを通じて踏襲されていた。これは須恵器窯の基本的形態であったであろう。生産品についてみれば、須恵器のほか第V～VIA・B期には円面碗の生産があわせみられ、第VIC～VII期には屋瓦の生産があわせ行なわれていた。陶瓦業生産は、北九州地方ですでに須恵器の第IV期から開始されているが、八女地方では未だ8世紀代の屋瓦を使用した遺跡が知られていないので、円面碗とともにその探索が将来にのこされることとなったが、これらの供給先がつきとめられるならば、八女古窯跡群の性格は一層明確になるであろう。

（小田富士雄）

Ⅱ 筑後における須恵器の編年—窯跡と古墳—

八女古窯跡群の須恵器編年の大綱はすでに調査報告Ⅰにおいて発表されている。今回八女古窯跡群調査の一応の終了にあたって、その後の調査資料によって前回編年の欠を補うとともに、周辺をも含めた地域の古墳出土須恵器を検討し製品の需給関係にまで敷衍してみたい。

調査報告Ⅰの刊行後に調査された須恵器の窯跡は、第ⅢA期の須恵器を生産した中尾谷窯跡群および第Ⅶ期に属する須恵器をもつ管ノ谷窯跡群である。前者が灰原のみの調査をも含めて4基、後者が2基が発掘された。これら一連の調査によって調査報告(Ⅰ)で不明であって時期が補充され、第Ⅲ期～第Ⅶ期までがほぼ明らかとなった。しかしながらいまだに第Ⅳ期須恵器を生産した窯跡の所在は、確かめられておらず今回も空白のまま残さざるを得ない。なお、窯跡出土資料による編年については、調査報告Ⅰより要約・引用した部分があることをあらかじめお断りしておく。

さて、筑後地方の須恵器の編年において八女市岩戸古墳出土資料が欠かすことのできないものであることは、これまでにも何度か述べられている。岩戸山古墳が筑紫国造磐井の墳墓であるということは現在ではほとんど疑う余地のないところであり、日本書紀の記述によれば磐井は継体天皇の21年(527)に叛乱を起し翌年官軍によって誅される。岩戸山古墳の別区と研人の存在がこれを磐井の墳墓に比定する確證を与えたが、ここで発見された須恵器もまた須恵器編年に確実なよりどころを与えるものであった。そしてこの観点から岩戸山古墳出土資料を須恵器編年の第Ⅱ期として位置づけたのは

樋口隆康氏¹⁾であったが、これは現在でも筆者らが踏襲して、編年上の基準となっている。今回の一連の発掘調査を通じて、岩戸山古墳出土の第Ⅱ期資料²⁾に相当する窯跡まではついにつきとめることはできなかった。岩戸山古墳は大正末年に大神宮祠を新築した際に墳丘から出土したもので、かなりの量の須恵器・石人・埴輪円筒などが知られていた。しかし大戦後の混乱によって大部分が散逸し、現在残っているものは少ない。管見にふれた須恵器資料については、調査報告Ⅱでとりあげた今回その後の資料を載せることができた。しかしながら掲載した資料のすべてが必ずしも第Ⅱ期に属するものではなく時期の降る資料を含むことは注意しなければならない。第Ⅱ期の資料として確実なものは4個の大型器台をあげうるのみである。2種類あって、1つは大型受皿に脚のつく形態のものでこれが3個分ある。残りの1つは、小型の受皿部に柱状部が接続しこれに円錐台形の脚部がつくものである。前者の脚は長く発達し中央部で最も細くなって裾がラッパ状に開いている。脚部にはいずれも櫛状施文具による整美な波状文が施されている。

さて、次に第Ⅲ期の須恵器では八女古窯跡群でこれまでに調査された資料からあげることができる。このうち4基の窯の存在が確かめられた中尾谷窯跡群は第Ⅲ期前半に位置すべき古式の特徴を有するものであり、後半の資料として塚ノ谷第4号窯跡がある。また、調査以前の蒐集資料には中尾谷窯跡群と同時期に比定すべき三助山窯跡群出土資料がある。三助山窯跡群は地元の岩崎光氏の調査によるもので、その蒐集資料には第Ⅲ期から第Ⅵ期の須恵器までを含み十基ほどの窯の存在が考えられている。

第Ⅲ期須恵器の特徴は、杯・高杯・甕・提瓶などに顕著である。中尾谷窯跡群の須恵器でみると杯の蓋は天井部と体部との境に退化した段あるいは沈線をつくり出し、口縁内側には古式の特徴である斜の段がある。杯身は蓋受けの立ち上りはまだ高いがやや傾斜してくる。また蓋受けのつくりが薄手になって古式にみられる力強さが失なわれるとともに口縁端の段もなくなる。総じて全体の形にこんもりとしたふくらみが消えて次第に扁平な傾脛へと傾いてゆく。そして後述するようにこの時期の後半から高杯・甕などに小形化の傾向が現われるのであるが、杯では一足さきに小形化が認められる。杯の口径でみるならば例えば、同時期の須恵器を生産した福岡県野添6号窯³⁾では13~14.5cm、第Ⅳ期前半に比定される福岡県小迫窯⁴⁾では11~12cmであるのに対して、中尾谷窯群の場合10~13cmで11cm前後が圧倒的である。また中尾谷窯につづく形式の塚ノ谷第4号窯跡の場合も9~11.5cmとこの小形の傾向は受けつがれている。杯の身でみる限りではこの小形化の傾向を除けば中尾谷窯跡群資料と塚ノ谷第4号窯跡資料との間にはほとんど形態差はみられず、第Ⅲ期後半になっても蓋受けの立ち上りは高い。蓋には肩の段がなくなって口縁の仕上げも丸くなる。

高杯には有蓋と無蓋の区別があり、有蓋のものには第Ⅱ期に出現する長脚式二段透しを有する大形品の系統をうけたもので、蓋も古式の特徴をよく継承している。これに比べ無蓋高杯はやや小形となり、一段透しと二段透しがある。有蓋高杯は塚ノ谷第4号窯跡では確認されていない。そして塚ノ谷第4号窯では第Ⅲ期後半の時期を特徴づけた小形高杯の出現がある。これは、甕とともに一見塚ノ谷第4号窯跡における時期差のように感じられるもので、第Ⅲ期前半と明らかに一線を画する材料である。杯部口径・高さともに9cm前後で製品に規格性がみられる。脚に円形小孔を穿った1例があったが他に透しをもったものは発見されていない。杯部外面下半に何本もの沈線状装飾を施したり、

脚中央にも1・2条の沈線がめぐらされたり、螺旋状に入れられたりする。

甕は、中尾谷窯の製品では大きくラッパ状に開いた口頸部をもつ通常の形態のもので、段を作って径を拡大する口縁部にいくらか違いがあるが、斜めに立ち上る形態よりも横に広がって口径を拡大する傾向のものが多いようである。頸部にはこまかい波状文が施されている。ところが塚ノ谷第4号窯では通常の大サイズの甕は1例も発見されず、かわって口径3.5cmほどの口頸部をもつ小形甕が登場する。口頸部を沈線によって三区に分け、上部二区に大きめの波状文を施し、最上段がやや径を拡大した形になっているが屈曲は小さい。口縁内側には古式の杯などにみられる段がつくられている。この少形甕と先の中尾谷窯跡資料とは形態的にただちに結びつけることはできないが、三助山出土資料をもってその推移をとらえることができる。

その他の資料では、提瓶・壺・甕などにおいてその口縁部断面を外側に肥厚させ、沈線を加えるなどの共通した特徴が前・後半を通じてみられ、とくに口唇部上面を水平に仕上げる癖は前半のものに多い。提瓶はこの時期の後半に側面観で一方が扁平となり、また平瓶が登場する。さらに後半には杯で蓋受けのある形態の他に蓋受けのない器種があらわれる。これには高い身受けをもつ蓋がともなう。大形器台は中尾谷窯跡で小破片が発見された。

以上みてきたように第Ⅲ期須恵器の特徴は第Ⅱ期須恵器に通じる古式の残存と新式への移行という現象で理解することができ、この違いを窯単位にセットとして把握できたことで前後に区別した。A・B=小期に分けた所以である。A期には杯・高杯など第Ⅱ期の特徴を受け継ぐものがあり、B期ではこれらが消えて小形化した製品が主流をなすに至る。すなわちここに第Ⅳ期以後一般化する小形・粗製化への萌芽を感じることができ、急激に進行する量産の傾向を反映したものとみられる。さらに杯の小形化で他地域との比較をみたように八女地方では、この傾向がほぼ半形式早く現われるようである。

第Ⅳ期の須恵器を生産した窯跡はまだ発見されていない。前段階での特色ある傾向がどのように継承されてゆくのか、きわめて興味深い問題である。福岡県大浦窯跡ではこの時期の後半には杯は口径9cmにまで小形化しており、またこの時期には身と蓋の転倒がおこることが知られている。

第Ⅴ期の資料は塚ノ谷第1号窯跡須恵器の大部分が相当する。蓋杯では第Ⅲ期にみられた身に蓋受けのある種類は消滅して、かわって第ⅢB期塚ノ谷第4号窯跡で登場した身受けかえりをもつ蓋をとともなう平底の杯が主流をなす。形の大・中・小の三種がある。第ⅢB期との相違は、この時期になって厚手づくりになり、蓋では内側につくかえりが小さくなっている。その他の器形も第ⅢB期から系譜をたどることは容易である。しかし、手法および胎土焼成などの観察において両者は明らかに相違しており、第Ⅴ期では厚手のつくりになるばかりでなく胎土に細砂粒を含む割合が多くなり器肌が粗くなる。第Ⅲ期に一般的であったヘラ削り手法も少なくなっており、カキメ整形、撫でが行なわれることが多い。

一般に各時期を通じて蓋杯が最もよく時期の特徴を示している傾向があるが、第Ⅲ期のなかで進行してきた小形化の傾向が、他地域の例でみるように第Ⅳ期においても継承され、さらに第Ⅴ期では小形の形態がなくなることから考えれば、第Ⅴ期の蓋杯にみられる三種の大サイズの存在は第Ⅳ期をうけて小形→大形への推移を考えることができよう。

第Ⅵ期の須恵器の特徴は歴史時代に普遍的となる高台付碗の出現であり、杯から碗へ転換する時期として重要な位置を占める。この時期の資料としては、塚ノ谷第1号窯跡の製品の一部と第2号窯跡さらに次期との過渡期にあたる牛焼谷窯跡の資料がある。この時期は蓋の形態、とくに身を受けるかえりや、短かく下降させた口縁部のつくりによって三種の変遷をたどり得る。すなわち形の上で大形となって第Ⅴ期とは分離されたが、なお第Ⅴ期と相似た身受けかえりを有する塚ノ谷第1号窯資料（A式とする）に比べて、塚ノ谷第2号窯資料では撮みが扁平な鉤状となり、身を受けるかえりが次第に小さくなって退化してゆく傾向があり（B式とする）、これがさらに身受けのかえりがなくなって口縁部付近で急に折れ下って直角かそれに近い角度の口縁を形成する。この形態から急に蓋の扁平度が目立ってくる（C式とする）。これら蓋の変化に対応して碗の方でもわずかながら相違がみられる。塚ノ谷第1号窯資料にみられたやや長目の付高台が、斜めにはね上り気味に張り出すくせがなくなって、塚ノ谷第2号窯資料では下端面が完全に平面に接触するようになる。また器壁の厚みがほぼ一定に作られるようになることも技術的進歩を裏づけるものとして注目される。このように第Ⅵ期の蓋付碗の変遷をA→B→C三種にたどることによって、第Ⅶ期の蓋付碗の出現は容易に導き出せよう。

蓋付碗以外には杯・高杯・盃・壺・提振・平瓶・大甕・鉢・皿などの器形が知られている。

塚ノ谷第1号窯をはじめとするこの時期の三つの窯で、特筆すべきは、塚ノ谷第1号・第2号窯における円面硯・牛焼谷窯での瓦の生産である。塚ノ谷第1号窯では第Ⅴ期から操業されており、円面硯の製作がどの時期から行なわれたのか明らかにし得なかったが、塚ノ谷第2号窯出土資料とは形態的にやや相違がみられ、第Ⅴ期までしかのぼる可能性も考えられている。いずれにせよ窯跡出土の円面硯としては九州では最古式に位置づけられる貴重な発見であった。

牛焼谷窯における瓦の生産は、須恵器の製作に引きつづいて行なわれたもので、出土須恵器の形態は第Ⅵ期後半～第Ⅶ期にかかる特徴を示している。ここで作られた瓦は行基葺九瓦と平瓦があり、軒先瓦などの瓦当文をとまなう資料は発見されていない。

第Ⅶ期の資料は塚ノ谷第1号窯・第2号窯の須恵器が相当する。いずれも灰原の大部分を欠失しているため採集できた資料はごく限られたものであったが、器種全体の組合せからみてここでも二小期に分けることが可能である。すなわち、第2号窯→第1号窯の順に操業されており、第Ⅵ期同様高台付碗の蓋の変化に着目するならば、第Ⅵ期C式にみられた口縁部が直角に近い折れ曲りで短く下降した形態から、奈良時代を通して行なわれる代表的な形態である鳥の嘴状に断面三角形のごく短い下降部をつくるもの、さらにこれの退化形とみられる丸く仕上げたり下降部をもたないものに分かれる。碗では前後の時期で目立った変化はないが口径の大形のものが一般的となる。器種では碗・杯・皿・高杯・壺・甕などが作られ、第Ⅵ期以前のいわゆる古墳時代須恵器に比べ器種の減少が認められる。また第1号窯を第2号窯より降る年代の操業とみてこの時期の後半におく有力な材料となったのは、第1号窯出土の大形浅い杯部をもつ高杯と胴部に凸帯を有する壺の存在であった。さらに第1号窯からは断片資料ではあるが瓦も発見されている。第Ⅶ期資料は量的にも器種の上からも十分とは言えず今後の資料の増加に期待するところが大きい。

以上、窯跡出土資料を中心として須恵器の変遷をみてきたが、これを実年代に対比するならば第Ⅱ期は岩戸山古墳の築造された前後の時期—6世紀の前半—があたり、第Ⅲ期が6世紀中葉から後半に

およぶ時期、第Ⅶ期が6世紀終末から7世紀の前半代にかけての時期、第Ⅵ期は7世紀後半代を中心とする時期にそれぞれ比定されよう。

さて最後に八女古窯跡群で生産された須恵器の需給関係についてみてゆこう。

八女市周辺の数ある古墳群のなかでも出土須恵器がはっきりしている古墳は意外に少ない。これまで調査報告Ⅰ～Ⅲにおいて八女古墳群の須恵器集成を企画したのも結局散逸した資料を寄せ集めて八女古墳群の全体像を把握するとともに、個々の古墳と窯跡との需給関係にまで踏み込みたいとする目的に外ならなかった。表は管見することのできた出土須恵器の形式からみた八女古窯跡群と周辺の古墳との対比である。

これらの古墳のうち窯跡出土資料とまったく符合する特徴を有する須恵器をもった古墳がいへつかある。塚ノ谷古墳、牛焼谷3号墳などがそれで、調査には筆者も参加した。塚ノ谷古墳では追葬が行なわれていて第ⅢB期の坏および第Ⅵ期後半の埴が発見された。これらの資料はそれぞれ塚ノ谷第4号窯跡、塚ノ谷第2号窯跡出土の資料とまったく同一と言えるものである。塚ノ谷古墳はそれら二つの窯と100m以内の距離にあり、被葬者についても窯業とかなり密接な関係を有する人物ではないかと考えられている。

次に牛焼谷3号墳についてみると、須恵器は墳丘裾より発見されたもので、坏・小形高杯・座・壺などの器種がある。坏は蓋受けのつく形態のものと、身受けかえりを有する蓋をとまう平底風の形態のものとの2種類がある。この2種類の坏と高さ9cmほどの小形高杯とは塚ノ谷4号窯の製品である。しかし座についてはやや古い特徴を有するもので同窯跡からは発見されていない器形である。また塚ノ谷4号窯出土の小形高杯とまったく同形の土師高杯も含まれている。ここではいくつかの窯の製品の寄せ集めの状態をみる事ができた。牛焼谷古墳群ではほかに1号墳・2号墳でも第ⅢB期の坏などの須恵器が出土しているが、これらの資料は塚ノ谷4号窯の製品とみることはできず、あるいは三助山窯のものかとも考えられる。さらに1号墳では追葬が行なわれて第Ⅵ期前半の須恵器があるが、これは塚ノ谷第1号窯の製品と同一のものである。牛焼谷古墳群の場合も塚ノ谷窯跡群と距離300mほどのきわめて近い位置に営まれた古墳群である。

形式	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
窯 跡		中佐山第1号窯跡 第2号窯跡 第3号窯跡 第4号窯跡 三助山窯跡	塚ノ谷第3号窯跡 第4号窯跡	塚ノ谷第1号窯跡	塚ノ谷第2号窯跡	三助山窯跡 第1号窯跡 第2号窯跡
古 墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳	中佐山古墳 東海古墳 赤坂古墳 中野・日守古墳群 豊前4号墳 塚ノ谷古墳 牛焼谷1号墳 牛焼谷2号墳 牛焼谷3号墳 牛焼谷4号墳

出土須恵器の形式からみた八女古窯跡群と古墳との対比

これらは窯跡に非常に接近した古墳であったが、最近の調査によってやや遠い古墳にまで供給が及んでいることが知られた。窯跡群から西へ5～6kmほど距てた八女群広川町に所在する鈴ヶ山古墳群・山の前古墳群²⁾がそれで、報文によって知る限りでは鈴ヶ山1号墳・同2号墳・山の前2号墳などの出土資料中に、中尾谷窯群・塚ノ谷第4号窯資料ときわめて類似したのがあり、報告者も指摘している。これらは器形の特徴ならびにへう記号から導き出されたものであってほぼ誤りのないところであろう。第V期の資料については現在までに八女古墳群の中に符合すべき資料を見出すことはできない。

これまで窯跡出土資料に対比できる須恵器をもつ古墳をいくつかみてきたが、須恵器が限られた地域のみで生産される特殊な製品でないことから、現在の段階では製品の広がりについて問題とすることはできるが、例えば1古墳が寄せ集めの状態で須恵器をもっている場合に、1つの窯の製品と被葬者の関係を問題にすることはきわめて困難である。6世紀中ごろの時期になると埋葬時の祭器としての需要から一般の生活へ須恵器が浸透してゆくことが考えられ、このことから副葬品にみる寄せ集めの状態も説明されよう。したがって、古墳へは2次的に集められた形になる場合もあることは十分考慮されるべきである。現段階では製品の広がり的一点をおさえ、ゆく作業を振気よく続けねばならない。

(真野 和夫)

註1) 水野清一・樋口隆康・岡崎敏「対馬」1953

2) 調査報告Ⅱ・Ⅳ

3) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫「上大野原大浦窯跡」福岡県教育委員会 1970

4) 小田富士雄・真野和夫「小迫窯跡」北九州市教育委員会 1972

5) 西谷 正ほか「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡県教育委員会 1972

Ⅲ 埴輪生産の諸問題

八女古窯跡群の継続調査中に立山山窯跡の発見があり、これが埴輪生産窯跡であったことは調査団を驚かせたし、また関係方面の人々の関心を高めたのであった。九州地方における埴輪窯跡の発掘調査は、これがはじめてのことであったが、また埴輪窯跡の発見自体が西日本では稀有のことに属していて、その意味からも世間の興味をひくに十分であった。九州地方の埴輪研究の将来に与える影響も少なくないと考えられるので、この機会に八女地方における埴輪生産をめぐる二、三の問題をとりあげて、今後の研究に資することにしたい。

埴輪窯跡の研究概要

古墳の墳丘に象形及び円筒埴輪をめぐらすものは少なくないし、また古墳時代の研究上に占める埴輪研究の位置は重要なものがある。すでに埴輪に関する研究は多く出されているが、その生産遺跡に関する研立となるときわめて少ない現状である。これまで報告されている埴輪の製作工房、窯跡に関するものは東日本の事例がほとんどである。東日本の埴輪生産遺跡の調査は明治39年、柴田常恵氏の群馬県藤岡市本郷における埴輪製作窯穴の発見にはじまる¹⁾。柴田氏は「和名抄」にみえる土師郷の

本郷にあたることから、この地に拠った土師氏の一族が製作に従事したであろうと指摘されている。森本六爾氏は昭和2年に東京都大田区下沼部において、埴輪製作工房とみられる竈穴の発掘調査を行なって注目をあつめた²⁾。さらに後藤守一氏も昭和8年、埼玉県鴻巣市馬室で埴輪を生産した登り窯2基の発掘調査を行なったが³⁾、それは須恵器窯跡と同じ構造のものであった。第二次大戦後になって埴輪生産遺跡の発掘調査もいくつか実施されてきた。昭和27年、尾崎喜左雄氏は群馬県藤岡市本郷の埴輪窯跡の調査を行なった⁴⁾。また昭和38年には、大川清氏が栃木県佐野市で埴輪窯跡の調査を行なっている⁵⁾。昭和40～43年には大塚初重、小林三郎氏らが茨城県勝田市馬渡で埴輪の製作工房、窯跡の調査を行なっている⁶⁾。

東日本にくらべて西日本では埴輪生産関係遺跡の発見自体がきわめて少ない。昭和9年、藤沢一夫、小林行雄氏は大阪府豊中市青池の埴輪窯跡を紹介し、これが須恵器窯跡と同じ構造であること、須恵質埴輪と須恵器が発見されたことを報じている⁷⁾。昭和12年には山口県萩市大井・馬場発見の埴輪窯跡について報告された⁸⁾。これは焚口と煙出し部を欠失しているが残存全長5.2m余、焼成部最大巾1.3m、天井までの高さ70cmの花崗岩質の土層につくられたトンネル式登り窯であった。九州地方では喜徳郡幸袋町目尾で工事中に埴輪窯跡が発見されたが未調査のままに埋滅し、形勢埴輪(馬頭)一個が児島隆人氏のもとに保管されている⁹⁾。埴輪生産遺跡はこのほかに難かなものを見聞したことがない。したがって八女市における埴輪窯跡の発見はこの方面の研究者の耳目をそばだてるに十分であった。

これまでの埴輪生産に関する遺跡の調査は東日本地域にかたよっており、西日本地域ではきわめて少なく、九州地方では今回の八女市における調査がはじめてである。したがって埴輪生産に関する全般的な予察、論考もかなり制約されているが、金谷克巳¹⁰⁾、坂詰秀一¹¹⁾氏らによって整理が試みられていて参考になるところ多い。

(小田富士雄)

埴輪窯の構造

立山山埴輪窯跡は構造上これまで調査の行なわれた須恵器、あるいは瓦を生産した他の古窯跡と大きく異なるところはなく、地下式登窯と汎称されるものである。規模・構造に関する比較表はすでに前項において掲げられているのでここでは省略したい。

まず立山山窯跡の立地の問題をとりあげると、丘陵斜面を利用した点は他の古窯跡と共通し地下式登窯構築に適した場所を選択している。しかしながら、現在までに知られているこの地域の古窯跡の分布をみると、須恵器あるいは瓦を生産した古窯跡が比較的丘陵の奥部に位置しているのに対し、孤立的に平野部に近い所に築かれているのは注目される。これは須恵器の場合がより高温を必要とするために、風向を考慮して丘陵がおしつまった袋部のような地形を選択すること、頻繁な操業回数にみあう、薪炭の供給が容易な場所であることが必須の条件であるためとみられる。これに対し埴輪の場合須恵器とは比較にならないくらい大形品であるから、長距離の運搬は到底困難である。また焼成温度も須恵器の場合程は要求されないから、高所の風の強い場所を選ぶこともなかったであろう。したがって、まず何よりも使用される古墳との距離を考慮した運搬に便利な場所が選択されたに違いない。

次に構造を平面形の上からみれば、ほぼ操業を同じうすると思われる第Ⅲ様式須恵器を生産した中尾谷窯群、塚ノ谷第4号窯に比べ長さの違いがまず上げられる。とくに長大であった塚ノ谷第4号窯は除くとしても、約3m以上須恵器の窯の方が長い。立山山埴輪窯群の所在地は中尾谷窯群とは直線距離にして約800mくらいで古くからの道によって結ばれているか、両窯群の生産集団にかりに違いがあったとしても、埴輪窯が同じ登窯構造をとる以上なんらかの交渉は行なわれていたに違いない。立山山第1号窯および2号窯がどちらも約7m程の長さに構築されていたことは埴輪生産量と密接な関連をもつものではなからうか。いま第1号窯跡によって1回の操業で焼成される円筒埴輪の数量を試算してみると、巾1.4m・長さ4mが焼成可能の床面積とすれば、直径40cmの大形品ばかりを並べたとして最大30本、23cm前後の小形のものばかりの場合約100本という数が機械的には考えられる。もちろんこれは両者が混在して焼成されることもあろうし、形象埴輪類といっしょになることもあろう。また口縁部の開き工合によっては、くっつけて置けない場合あるいは失敗もあろう。一応の目安を示した数字にすぎないことをお断わりしておかねばならない。1回の窯詰めの方の数量が出たところで、これらが樹立される古墳の方に目を転じてみると、こちらの地方で埴輪の総量が知られる古墳の調査例がない現状では今のところ何とも言えないが、八女丘陵では埴輪円筒の使用が最も多いのは筑紫国造磐井の墳墓として知られる岩戸山古墳であろう。そして他の古墳ではこれに比べ急激に減少しているとみられるから1墳に数百本を要するということはまず考えられない。したがって立山山埴輪窯が仮に1基の古墳に要する埴輪生産を目的として作られたならば、その古墳が岩戸山古墳級のものでない限りそれほど大きな生産量を必要としなかったかも知れない。

最後に縦断面形では、須恵器窯に比べるときわめて床面勾配が緩やかにつくられている。須恵器の窯では現在までこの地域で20度以下の床面傾斜のものはみつからない。ところが立山山窯群では、第1号窯が初期の床面で16度その後床上げすることにはほとんど水平に近づいている。また、第2号窯は13~25度をはかりやや傾斜が強いようである。これは第2号窯→第1号窯という構築の前後関係でもわかるように、第2号窯がより須恵器の窯構造に近いことを床面勾配においても示していると考えられる。つまり二つの窯を通しての最終操業時には、床面が水平に近くでも焼成には十分であることを経験から学んだのでないだろうか。大形の埴輪円筒の窯詰めには床面が水平に近ければ、それだけ容易となることは言うまでもないことである。他地域の埴輪窯の調査例では、栃木県唐沢山窯跡群¹⁰⁾の場合13~30度の傾斜のものまでさまざまであり、概して勾配の大きな窯が多いようである。また茨城県馬渡窯跡群¹¹⁾では20~24度と報告されている。これらに比べると立山山窯跡の場合床面傾斜がきわめて小さくなることは興味ある傾向である。

さて、立山山窯跡群の第1号・2号の構造では第2号窯がより須恵器の窯との類似点が見出されることは先に述べたが、両窯とも床上げを行なっていることは共通している。そして第1号窯では、1回目の床上げにもなって焼成部奥に近いあたりに二段の階段状構造をもっている。また、入れ子状に埴輪円筒片を壁際に並べた状態は、すでに述べたように1回目の床上げの段階で不都合が生じた窯構造を改変しようとした現われとみるべきで、床面勾配が緩やかになっていることと何か関連があるかも知れない。単に壁面の補強を目的としたものならば壁際に何枚も重ねて置く方がより効果的であったろう。

以上、立山山埴輪窯の構造を、これまで調査してきた八女古窯跡群の窯構造との対比を中心にして述べてきたが、2基の調査例では資料がかたより誤まった見方をしないとも限らない。今後、西日本各地で埴輪窯跡の調査例がふえることを期待するものである。
(真野 和夫)

形象埴輪の問題

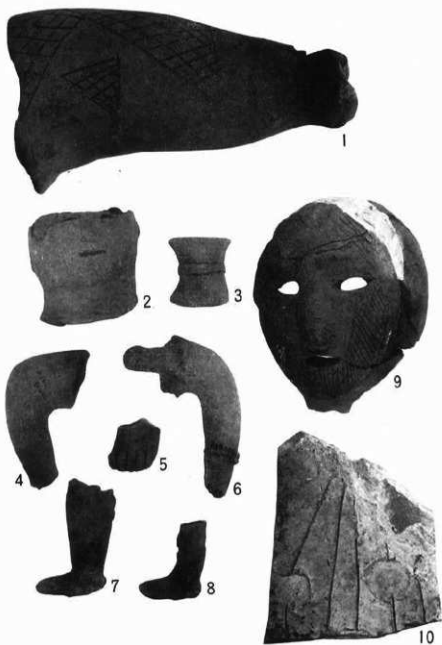
立山山埴輪窯跡群では、採集された資料は多くはないが、円筒埴輪の他に人物・家などの形象埴輪および土師の甕を製作したことが知られた。円筒埴輪では形態・成形手法によって他と区別できるほどの顕著な違いを見出すことは困難であり、第1号窯跡出土の円筒口縁部に刻まれたようなヘラ記号をもつ資料が埴せば古墳との対比も可能になってくるとみられる。そこで形象埴輪を頼りにして八女古墳群との需給関係についての手掛りを得ねばならない。

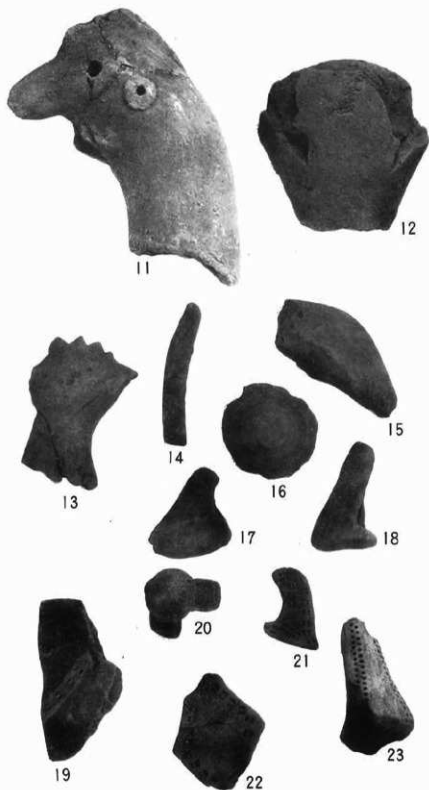
八女丘陵の古墳群中、形象埴輪を出土した古墳については、かつて発表されたことがあった¹¹⁾が、ここではその後の資料をも含めて改めて一覧表にして掲載することとする。表によると人物に関する形象埴輪資料は、石人山古墳・岩戸山古墳はじめ9基の古墳から発見されており、家形埴輪は同じく石人山古墳はじめ5基の古墳からの出土が知られている。そして立山山窯跡群の操業年代を、出土した土師甕より鬼高煎並行とみるならば、六世紀中葉の年代が与えられるわけであるから古墳もさらに限

八女地方における埴輪発見古墳一覧

古 墳 名	所 在 地	外 形	内 部 構 造	形 象 埴 輪	円筒埴輪
石人山古墳	八女郡広川町一条	前方後円	石室 横穴式石室	人・馬・犬・家・ 短甲	
神奈無田古墳	八女郡広川町太田	前方後円	?		○
	八女郡広川町藤田	?		人・馬?	
城山古墳群	八女郡立花町山崎・城山	円	?		○
	八女郡立花町北山 水天宮	?	?	人	
欠 塚	筑後市欠塚	円	?		○
岩戸山古墳	八女市吉田	前方後円	?	人(男女)・馬・ 猪・鶏・家・弩	○
	八女市豊福	?		人	
大神宮古墳	八女市豊福	円		鶏	○
釘崎3号墳	八女市豊福	前方後円	横穴式石室		○
兼場古墳	八女市長峰	前方後円	横穴式石室 装飾あり	人(冠帽)・家・刀?	○
善蔵塚古墳	八女市託問田	前方後円	?	人(肩甲着装)	○
一念寺古墳	八女市一念寺	円		人(足)	
真浄寺2号墳	八女市本	円		家?	
立山1号墳	八女市立山	円	横穴式石室	人(顔)・家・甲・ 馬	
団藏塚	八女市立山	円	?		○
丸山古墳	八女市立山	前方後円	?		○
川犬古墳	八女市川丈	円	竪穴式石室		○

第44圖 八女古墳群出土形象埴輪(一)





定される。また地理的条件を考慮して近くの古墳にしほるならば、乗場古墳・善藏家古墳・一念寺古墳・真浄寺2号墳・立山1号墳などがあげられよう。資料の少ない現時点でこれ以上の類推はかえって危険である。今後の資料の追加を待ちたい。

(真野 和夫)

埴輪の生産

八女地方さらには西日本地域における埴輪生産の過程、組織、需給関係などを究明することは埴輪生産の問題を追究する上で最後にたどりつくところであるが、立山山窯跡群が九州地方における埴輪窯跡調査の初見である現在ではなんとしても時期尚早といわざるをえない。立山山窯跡群の場合だけをとりあげても製作工房跡は未発見であり、また製品供給古墳についても、未だ十分に確定していない。时期的には八女古墳群の第Ⅲ様式須恵器相当期に比定されるであろうことは、ほぼ確かであろうが、60基をこえようとする八女古墳群の古墳個々についての調査は未だ行なわれておらず、今日内部構造や出土品、埴輪などが知られている古墳にしても、そのほとんどが盗掘や破壊に伴って知られたものであるから、特に形象埴輪などにいたっては識者の目にふれることなく、散逸したものであるであろうし、また未発見のままに埋没しているものもあることと思われる。したがって現在知られている形象埴輪の出土例だけで結論をいそぐわけにはゆかない。しかしながら八女地方において、将来に埴輪生産の問題をすすめてゆく最も近道は、やはり八女古墳群の古墳個々の記録を作成し、出土埴輪を比較検討する作業をすすめてゆくことであろう。また製作工房跡についてもいつの日にか発見されるであろうことを期待するほかはあるまい。

これまで製作過程についての報告例を数するならば、東京都下沼部の例では長方形竪穴の中央に埴輪円筒にして6～7個分の粘土塊があり、これをめぐって焼成不十分な7～8個分の円筒の未製品が発見された。それで、家族的少人数の製作であって一回に7～8個を製作したであろうと推定されている¹²⁾。また最近調査された茨城県馬渡における製作工房跡と窯跡の立地関係なども参考すると、窯跡からさして遠からぬ低台地で小竪穴を構えて製作されていたであろうことが推測できるのである。埴輪の製作工程に三段碧を設定したのは金谷克己氏である。すなわち①彫型、②乾燥、③焼成の三工程を考えている¹³⁾。さらに窯の形態については今日あまりのこっていないところからみて、ごく簡単なものであったろうと推定しており、平地につくられた平窯か、天井のない窯窓であろうと述べている。また須恵器を製作するようになって導入された登り窯が埴輪窯にも採用されるようになり、群馬県本郷、埴玉馬場、大阪府青池、山口県馬場などの登り窯が出現したと考えられる。立山山窯跡群はこのような段階の埴輪窯であったのである。

土師器や埴輪の生産に従事した工人達は、一般に須恵器製作工人達とは系譜を異にするものであったと認識されている。土師器や埴輪生産者の集団は土師部を構成し、土師連を伴造として管掌されていた。土師部が陵墓、古墳の営造活動に参加したことは、有名な重仁紀32年条の埴輪起源伝承にもうかがわれるが、土師氏一族は中央では皇室の陵墓や葬儀に関する職掌を世襲することになった。「和名抄」に記載された土師部の痕跡を伝える土師部の郷名をさぐれば、九州地方では筑前・穂波郡土師郷と筑後・山本郡土師郷があげられる。八女地方において土師部が存在した確証は得ることはできない。しかしながら立山山窯跡で生産された埴輪が筑紫国造家一族の奥津城である八女古墳群に供給さ

れたであろう事実を考えると、この地方の族長層の墳墓という限られた階層の葬儀に関与していたということは、やはり埴輪生産という特殊な活動に参加する農民集団が存在し、筑紫国造一族の支配下におかれていて、その需要を支えていたことは否定できないであろう。ただしそれが土師連に掌管される土師部として組織されていたように、八女地方で筑紫国造一族の配下にあつて部民的統率が行なわれていたものであるのか、あるいは部民的統制を行なわなくとも、部の外周に位置づけられるようななんらかの政治的統制を加えられていたとみられるのかを決定すべき確証は現在のところ得られない。将来発見を加えるであろう生産遺物の増加をまけて解決をはかりたいものである。この問題について浅香山木氏は最近、土師部の生産者は倭政権から手工業部としても組織されず、「地方の族長層からも手工業生産者としての特別の政治的規制も受けず、農業共同体からの分離の傾向が殆ど見出されないのを一般的形態とする」が、「限られた一部の集団のみが、特殊な需要のために手工業部として組織され、王権のもとに直結されているもの」があることを述べられていて¹¹⁾、埴輪生産が土師部生産と異なり特殊な手工業生産であるとの見解を示しているのは注目される。また、埴輪窯が本来、平窯あるいは天井のない客窯であつたという金谷氏の見解に従うならば、立山山窯跡のように須恵器系統の登り窯を採用した時点から一層特殊な手工業部民的性格を明確化して、地方族長層との隷属関係を強めたと見られぬでもない。窯業技術の問題ともあわせて検討すべき問題であろう。

(小田富士雄)

註1) 柴田常恵「埴輪の製造地」東京人類学会雑誌第21巻246号・明治39年

2) 森本六爾「埴輪の製作所址及窯址」考古学1巻4号・昭和5年

3) 後藤守一「埴輪窯跡の発掘調査」ドルメン3巻4号・昭和9年

4) 尾崎喜左衛門「古墳のはなし」昭和27年

5) 大川清「安蘇山麓古代窯業遺跡」昭和39年

6) 大塚初重・小林三郎・川崎純徳「勝田市馬渡埴輪製作所」昭和47年

7) 藤沢一夫・小林行雄「埴輪と板部の窯址」考古学5巻10号・昭和9年

8) 山本 博「長門国大井村発見の埴輪窯について」考古学雑誌27巻8号・昭和12年

9) 小田富士雄「九州地方古代窯址(須恵器・瓦)地名表(第一編)」九州考古学29・30昭和41年

10) 金谷克己「はにに窯生」昭和37年

11) 坂詰秀一「埴輪窯跡序説」立正史学28号・昭和39年

同 「東国埴輪窯跡研究の問題点—その学史的展望—」歴史教育12巻11号・昭和39年

以上、同氏著「歴史考古学研究第一」(昭和44年)収録

12) 大川 清「安蘇山麓古代窯業遺跡」窯業史研究所・昭和39年

13) 大塚初重・小林三郎・川崎純徳「勝田市馬渡埴輪製作所」昭和47年

14) 小田富士雄「古墳文化の地域的特色・九州」日本の考古学IV・昭和41年

15) 浅香山木「日本古代手工業史の研究」35ページ・昭和46年

〔第44・45図説明〕

1・人(陶)立山1号墳、2〜9・人岩戸山古墳、10・琴岩戸山古墳、11・鶏大神宮古墳、12・猪岩戸山古墳、13・鶏岩戸山古墳、14〜23・馬具岩戸山古墳

(1岩崎光氏蔵、2〜8・13〜18九州大学蔵、9・12・19〜23福岡教育大学蔵、10・11八女市中央公民館蔵)

Ⅳ 筑紫国造の支配と須恵器生産

八女地方を中心に筑紫君一族が勢力をたくわえていたことは、今日ではよく知られていることからである。八女平野の北方東西7～8キロにわたって延びる八女丘陵上には總數60基をこえる八女古墳群が分布しており、これらの墳墓群は筑紫国造家一族につらなる人々の奥津城であろうと考えられている。この中には次の9基の前方後円墳が含まれている。

石人山古墳 ¹⁾	八女郡広川町一条
神奈無田古墳	八女郡広川町太田(湮滅)
岩戸山古墳 ²⁾	八女市吉田
乗場古墳	八女市吉田(調査報告Ⅳ参照)
善歳塚古墳	八女市宅間田
鶴見山古墳	八女市豊福
釘崎第2号古墳	八女市豊福
釘崎第3号古墳	八女市豊福(湮滅)(調査報告Ⅲ参照)
立山丸山古墳	八女市忠見区立山

このほかに注目されている古墳として次のような円墳があげられる。

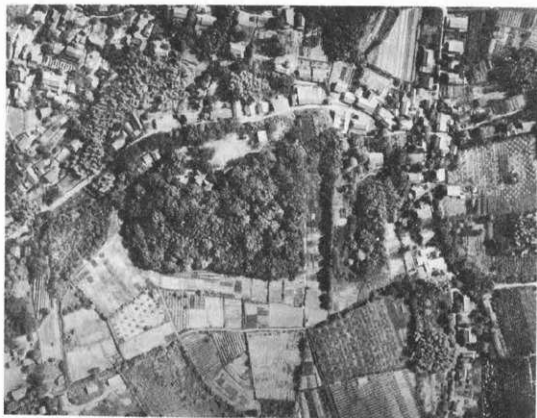
弘化谷古墳 ³⁾ (裝飾古墳)	八女郡広川町一条
円山古墳(裝飾古墳)	八女市宅間田
真浄寺第2号古墳(竪穴系横口石室)	八女市忠見区本
童男山古墳(石屋形)	八女市川崎区山内(調査報告Ⅲ参照)

これらの古墳を擁する八女丘陵の最西端に位置するのが石人山古墳、弘化谷古墳を含む石人山古墳群であり、なかでも石人山古墳は9基の前方後円墳中で最古の位置を占めている。墳丘上には武装石人、形象埴輪をおき、内部構造では最古式の横口式家形石棺とこれを囲む鞘堂のような割石積石室を設け、石棺屋根には直弧文浮彫りを施して九州地方における裝飾古墳としても最古の位置におかれている。5世紀中頃に比定されるこの古墳の被葬者は、おそらく筑紫君がこの地方に頭角をあらわしてきた初期の国造あるいは県主の身分に封ぜられたであろうと推察される。「国造本紀」によれば、大彦命五世孫の田道命が筑紫国造に封ぜられたのは成務天皇の御代であったと伝えられている。その信疑はともかくとしても、大和朝廷の支配下に属して、その身分秩序のなかに組みこまれたのは5世紀前半代をさかのぼらなかつたであろうと思われる。

八女古墳群における9基の前方後円墳は5世紀中頃の石人山古墳にはじまり、6世紀後半代にまで及んでいるが、その多くは6世紀中頃から後半代に集中しており、7世紀代に及ぶものはなかつたようである。これまで最も新しい時期に比定されていた童男山古墳にしても、改めて石室構造を検討してみるとその築造時期は6世紀末頃までさかのぼらせることができる(調査報告Ⅲ)。また裝飾古墳についてみれば、石人山古墳が彫刻文様を主とする石棺系として最古期におかれるほかは、乗場古墳、弘化谷古墳、円山古墳などの彩色画を主とする壁画系古墳は6世紀中頃よりさかのぼらない。

八女古墳群中、最大の規模を誇り、また多くの石人石馬、形象埴輪を樹立して群を抜く存在は岩戸山古墳である。外堤まで含めると全長170mをこえるこの古墳は遠くからでも山のような偉容を望見することができる。記録に伝える筑紫国造磐井の墓として今日では定説となっているが、その反乱伝承と、記録に徴して6世紀の20～30年代に比定できる古墳として西日本地域の研究上に占める位置は大きい。この反乱伝承と古墳資料を分析することによって、筑紫国造家の支配方式、ひいては大化前代における地方族長層の在地統治体制を推測する手がかりが得られるはずである⁴⁾。

一般に地方豪族の統治組織は史料面での制約もあって分明しないところが多い。磐井の反乱は大化前代における地方豪族の最後にして最大の反乱と評価されているだけに、反乱軍の規模や性格を分析する上に、中央では記録されるところの少ない地方豪族の内容を知る恰好の材料となるのである。反乱にあたって磐井は筑紫、火、豊などの北九州全域にわたる兵力を動員して官軍と対したといわれる。これが文字通り磐井の政治圏であったとみるか、あるいは朝鮮出兵という大和朝廷の政策によって蒙る北九州各地族長層の共通した経済的打撃という利害関係の時点に立って、磐井を盟主とするような地縁的団結が形成されたとみるかによって、実態はかなり異なるものとなろう。しかしながら一年余にわたる戦いの後に磐井が敗れたとき、その子孫が父の罪に連座して罰せられるのを恐れ、玄海灘に面した筑前の糟屋屯倉を献上したという記事から考えて、この地は磐井が朝鮮各国の貢物船を自分のところに引き入れたときの拠点となっていたであろうことも推測できよう。



第46図 岩戸山古墳航空写真

また欽明紀17年正月条にみえる筑紫君の子で火中君の弟である筑紫火君の系譜から推察されるように筑紫国造家と火国造家の婚姻関係があったことなども手がかりとして、筑紫国造家は八女地方を本貫地とする筑後地域にのみ勢力圏を有したのではなく、筑前や肥後の地域までも勢力伸長しつつあったことが推察されてくる。このような動向が磐井の時代までさかのぼることは疑いないであろうから、反乱の時点における磐井の地位は単なる族長層連合政權の盟主的身分にとどまるものでなかったことは認めてよいであろう。岩戸山古墳にしかみられない方形張出部の「別区」といわれるものの存在は、そこに裁判状態を物語るような石人石馬の在り方に象徴されるように、律令制以前にあって地方族長層のなかに律令制にひきつがれてゆくような国造法が存在したことを如実に示しているということができよう(4)。大和朝廷がそれ自身に奉仕するような伴造一部制度を設定したように、有力な地方族長層の統治組織にもそれに類した支配方式がとられる面があったことを類推させるであろう。

地方豪族の支配下において生産活動に従事した工人達の集団はどのような存在形態をとったであろうか。八女古窯跡群の調査を継続するなかで、われわれの関心はこの問題に対処せざるをえなくなってきた。一般に生産活動に従事する工人達は部民集団を形成し、伴造に管掌される存在であったと考えられている。須恵器生産の工人集団も「陶部」を称する手工業部として編成されたと考えられている。記録に伝える初見は雄略紀7年条にみえる「新漢陶部高貴」の渡来伝承であることはあまりにも有名である。浅香年木氏は須恵器生産者集団の特定部分が「陶部」として部民制の枠内に掌握されたという通説に疑問を提出された⁷⁾。それは8～9世紀の文獻に陶部の痕跡がほとんど姿をみせないといふところにある。雄略紀の帰化人関係記事は史実的には信憑性の高いものといわれているが⁸⁾、それでも「陶部」の表現を手工業部としての陶部の実在を疑わざるをえないならば、須恵器生産の組織論は根本的に考えなおさなければならないであろう。

6世紀代には須恵器の窯跡は北九州から東海、北陸まで発見されていて、部民制のもとに大和政権だけが独占できるようなものでなくなっている⁹⁾。浅香氏は和泉陶邑窯跡群が単一の部に包括されず、数ヶ郷に分属する様相を示していることは部との関係を考える上で注意すべきことを指摘している。しかしながらこのことは生産者集団が窯跡の所在する地方の族長層の支配から完全に独立しうるものであったことを意味するものではない。八女古窯跡群で生産された須恵器がどの地域まで流通しているのかということを追跡する仕事が、この問題に一応の解答を与えてくれるであろうと考え、八女古墳群発見の須恵器資料を集成・検討するかたわら、筑後地域における類品の出土例を探索することにも留意してみた。現在までのところ八女古窯跡群の生産に帰せられるべき可能性のある資料は主として八女市、八女郡のなかにあって、筑紫国造家の本貫地以外には確実なものを指摘しえない。そうすれば、仮りに流通圏を広く考えてみても筑後地域をこえることは先ずないのではないと思われる。すなわち族長層が支配する政治領域をこえるような流通圏は成立しなかったと思われる公算が大きい。したがって、部民として伴造氏族が管掌するようなつよい規制組織はとられなかったとしても、生産者集団は農民でありながら季節的に須恵器生産に従事する家父長制的な世帯共同体を構成していたであろう。そうして族長層にとって須恵器の生産は、後の律令時代にもみるような交易を前提とする調庸制による生産活動ではなかったであろう。族長層と一般民衆の需要を満たすための生産であり、族長の支配域をこえないという政治的規制のもとでの流通の自由が保証されていたであろう。

八女古窯跡群の調査を通じて、古墳時代から律令時代まで生産活動のあった事実が明らかになった。当然律令時代になってからの生産活動に調制的規制が加えられなかったかという疑問が生じてくる。しかし歴史時代になってからの製品流通については現在のところまだ明らかでない。円面硯や屋瓦の生産がみられるところから推して、より官窯的性格への転身が考えられないでもないが、何としても供給遺跡の不明な現在の段階では説得力に乏しい。それよりもむしろ、須恵器の編年分析を通じて第IV期窯跡の空白現象をいかに解するかということが重要であろう。

第IV期須恵器の欠加は時間的には6世紀末頃に空白であることを意味しており、八女古墳群に目を転ずればすでに前方後円墳は営造されなかったと思われる。識者の注意にのぼる古墳では装飾古墳も終了しておられると思われる。この時期に営造されたものとしては童男山古墳が代表的存在である。残念ながらこの古墳は出土品の所伝を欠いて手がかりを失っている現状である。この時期に筑紫国造家の著しい勢力縮少のようなことがらを考えるとすれば、生産者集団との関係は上述のような予測以上に密接な交渉を考えなければならなくなろう。さらに歴史時代になって第V期須恵器以降の生産活動の再開にはそれ以前とは異なった背景なり、系譜を異にする生産者の移入を考える余地ものこされている。八女古窯跡群調査の結末はまだいくつかの重要な問題を提起しながら将来に解決をはからざるをえないこととなった。

(小田富士雄)

註1) 小林行雄編「装飾古墳」昭和39年

2) 森貞次郎「岩戸山古墳」昭和45年

3) 文化財レポート57「弘化谷古墳」日本歴史276号 昭和46年

4) 小田富士雄「磐井の反乱」古代の日本3・九州 昭和45年

5) 浅香年木「須恵器生産と陶部の関係」日本古代手工業史の研究 昭和46年

6) 平野邦雄「大化前代社会組織の研究」第四編第二号 昭和44年

7) 横山浩一「土器生産」日本の考古学V 昭和42年

編 纂 後 記

一八女古窯跡群の調査を完了するにあたって

着手以来四ヶ年の継続調査を行ってきた八女古窯跡群の最終報告書をようやく発刊することができた。この四年間には大学紛争もあり、この調査に支障を蒙ったこともあったが地元八女市教育委員会のの方々をはじめ各方面の方々の援助を賜わり、無事に完了することができたことは感謝にたえない。

われわれは当初から単に古窯跡の調査に終始することよりも時期的な窯跡構造の変遷、須恵器編年の確立、八女古墳群との需給関係、さらには古墳と窯跡の関係を通じて筑紫国造の支配や工人集団の性格などの問題に発展させて、九州地方で不明なままの重要な問題にとりくむことを考え、四年間という与えられた期限のなかでこれまでの成果をまとめるとともに将来の見通しをつかまえるべく模索してきた。それはこれより先八女古墳群については折にふれて調査を重ねてすでに十年余に及ぼうとしているので、このあたりで古窯跡の調査を機に歴史的な観点から整理してみようと考えたからであった。

八女古墳群は筑紫国造家の墓所として有名であり、地域研究としても古代史上重要な地域であるが、未だ十分に基礎的資料の整理も行なわれておらない現状である。また古窯跡研究も九州地方ではようやくその緒についたばかりである。われわれはこれらのテーマに解答を得るべく古窯跡調査の問をぬって古墳資料の調査整理をすすめ、それらの成果は逐次調査報告書に収録してきた。最終年度の本書ではそれらの成果を総括して当初のテーマに一応のまとめを与える段階となった。しかしながら現状ではまだ十分な解決は望めなかったといわざるをえない。それでも将来に基礎的な資料を集積し、問題の所在を明らかにできたところは少なくない。

この調査がはじまってから多くの調査員が関与してきたが、この間に職場に勤務するかたわら協力された方々、また大学生として参加し卒業していった学生諸君も少なくない。四ヶ年の歳月は決して短かくはなかったと思う。特に本調査の開始以来、本書の結末をつけるまで終始関与してきた調査員の真野和天君には迷惑をかけるところ多かった。学生時代から大学院を修了するまで毎年この調査に参加して中心的存在として活躍するまでに成長した。そうして本書の総括をも執筆して調査の始終を全うしてもらった。学生時代のよき記念碑となるであらうし、さらに将来にのこされた問題の追究をも継承してくれることであらう。

また、毎回報告書の題字を八女市当局の方々にお願いした。塚の谷は才所徳治前教育長、中尾谷は松延一男現教育長、管の谷は平島忠太郎課長、立山山は牛島市長にそれぞれいただいた。なお図版写真は毎回小田調査員の撮影分を使用した。が、本書の乗場古墳の石室写真は中央公民館の渡辺勲氏をわずらわせた。関係者の方々には毎回報告書のなかで礼を失しないように謝意を表してきたつもりであるから、今さらここでも繰り返すことをさけるが、永い間にわたって我々の調査を御支持いただき、援助を惜しまれなかったすべての方々に衷心より感謝申し上げたい。今回をもって一先ず調査は終了することとなったが、問題は将来にのこされ、研究はこれから始まろうとしている。さらに研鑽を積んで何年か経過した将来に再びその後の成果を世に聞きたいと願うのはひとり私だけではあるまい。その意味で四ヶ年にわたる成果も果しない研究の貴重な一里塚となるであらう。

(1972・3 小田富士雄)

立山山窯跡群

一八女古窯跡群調査報告Ⅳ・總集篇一
牛焼谷古墳群・乗場古墳

昭和47年3月31日

発行 八女市教育委員会
福岡県八女市大字本町586番地
八女古窯跡群調査団

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市中央区舞鶴1丁目2-5





管ノ谷第2号窯跡(一) 窯跡全景



管ノ谷第2号窯跡(一) 窯跡全景



窯内燃焼部より煙出しを望む



燃焼部における須恵器出土状態



立地—中央社殿の下が竈跡



竈跡近景—第1号竈跡(左)と第2号竈跡(右)

図版第五 立山山第1号窯跡(一) 全景―最終床面と前庭部の遺物出土状態

下方より照し



照燈より上方より照し



下方より望む



上方より望む（左が第一大床、右が第二大床および地盤門面を利用して下半部壁の中を穿はれた状態）





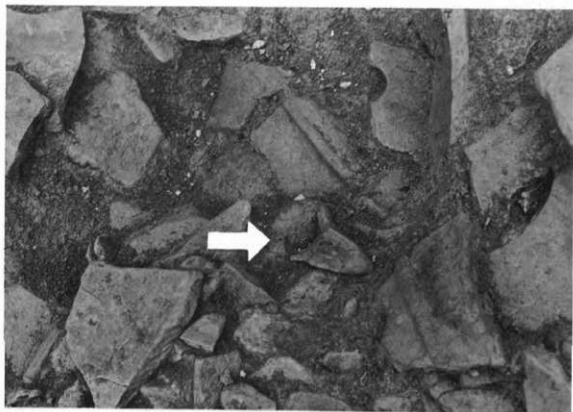
西側より(矢印は形象埴輪)



西側より



上 (かまど出土状態)
下 (同把手出土状態)

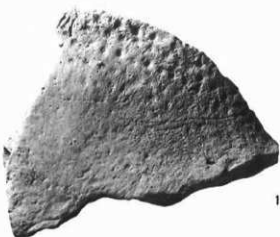




不明形象埴輪の出土状態



人物形象埴輪下半部の出土状態



1



2



3



4



5



6



7

1 (不明)

2 (人物下半部)

3 (手)

4 (家?)

5 (不明)

6 (把手)

7 (把手)





1



2



3



4



5



6



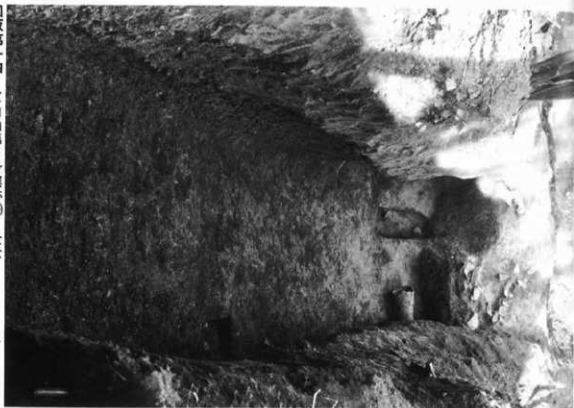
7



8

1～3はへら描きのあるもの





焼成部より灰口を望む



下より望む

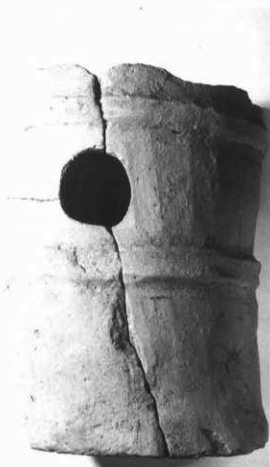
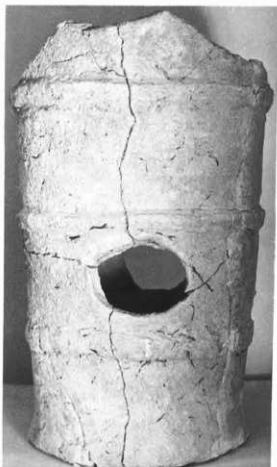


焚口付近の壙軸出土状態



焚口部の状況

図版第一六 立山山第2号窯跡③ 遺物 円筒地輪



圖版第一七 立山山第2号窯跡(四) 遺物 円筒埴輪



図版第一八 牛焼谷古墳群の立地



図版第一九 牛焼谷第1号古墳(一) 石室全景



後室上方より望む





石室の内部構造を写す



石室の外部構造を写す



後室、前室の左側壁面を望む



前室左側壁面の正面観



後室入口の須恵器蓋



後室入口の須恵器高坏

概理より望む



造瓦土方より望む





後室の奥壁と左側壁面を望む



後室の右側壁面を望む



石室の右側壁面を望む



羨道部末端と遺物の出土状況



墓道外の須恵器出土状況



石室内の須恵器高坏

図版第二七 牛焼谷第3号古墳(一) 石室全景



上・発掘作業の風景
下・羨道より望む





後室



前室と羨道



後室の奥壁と左側壁面



後室より羨道を望む



金環



ガラス丸玉



銀環



全景——羨道より望む



石室の構造

図版第三二 牛焼谷第5号古墳(一) 石室全景

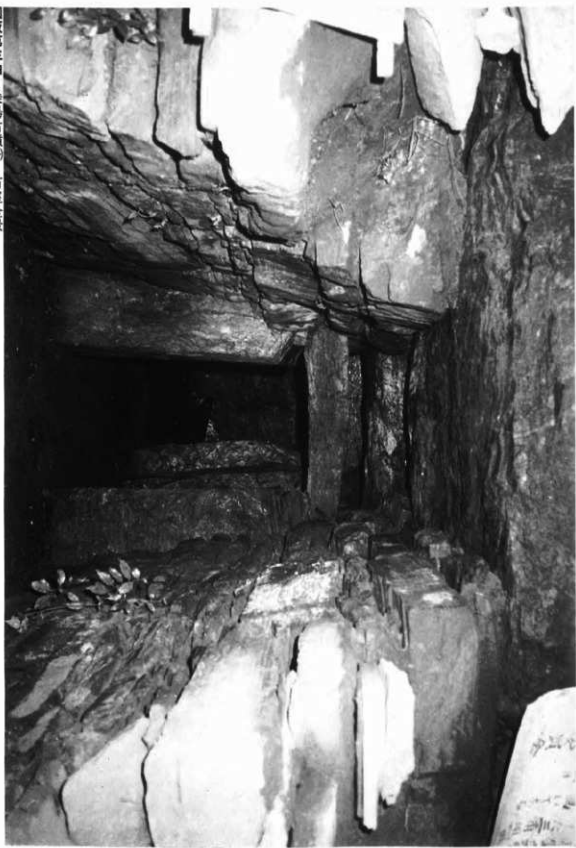




奥壁上方より望む



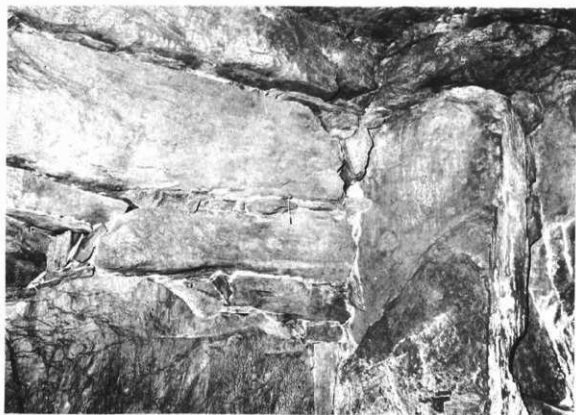
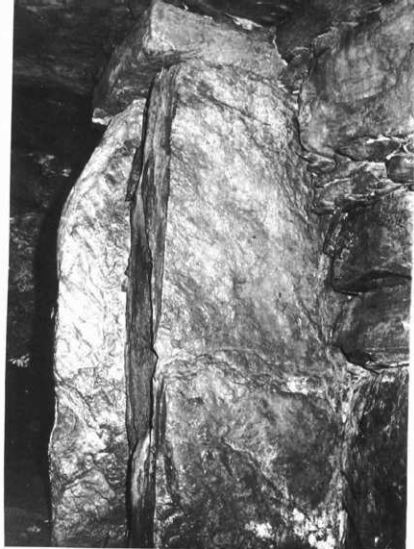
石室内より閉塞状況を望む



下・掘石構築の状態
上・前室より見た前室柏石と榎名



下・後室内より入口方向を見る
上・後室内袖石上部より天井石までの石積



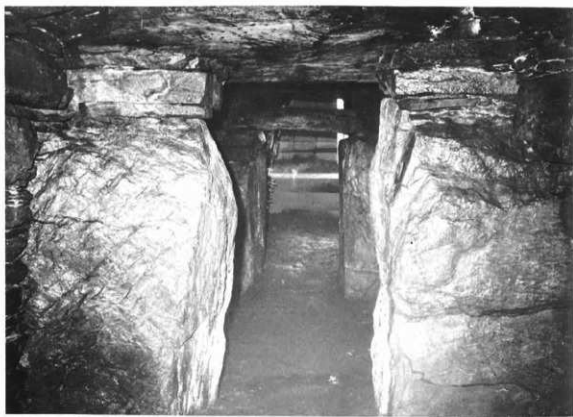


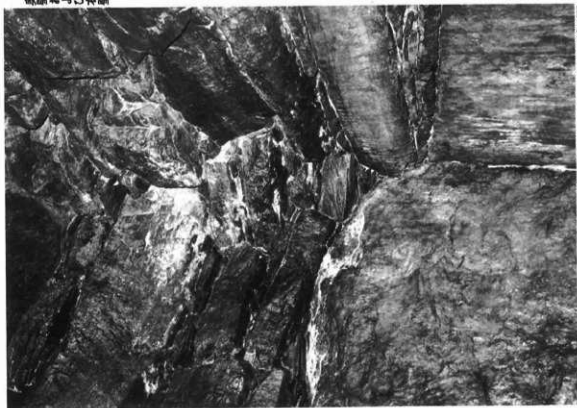
前室左壁の石積 (左端は前室袖石)



前室右壁の石積

下・後室内より入口方向を見る
上・後室内袖石上部より天井石までの石積





敬製より左側

